七宝山の探勝

七宝山の探勝

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ109(2020)

序

七宝山（チルボ）は、渓谷や森林、海浜の風致が金剛山（クムガン）のそれに劣らないとして咸北金剛（ハムブク）とも称されている。

七宝山の世にも稀な奇観と神秘な程の山容について、1542年のある日、たまたま七宝山を遊覧した某文筆家は、「幾千年もの間世に隠れていたこの名山が全国に知られることになったら、自然の風景を楽しみとする世の人たちは、智異山（チリ）はありふれた山とみなし、金剛山もつまらないとして、ここ七宝山に押し寄せてくるだろう」と評した。

昔、腐敗した無能な封建支配層は風致秀麗な七宝山を島流しの地としてさげすんでいたが、人民は、当地にまつわる実に意味深い世情や風俗が描出されたさまざまの伝説を残している。

久しい歳月、その素晴らしさを知られることのなかった七宝山は、朝鮮労働党時代に至り、おのが絶勝の風貌を余さず現出するようになった。

朝鮮労働党の明達な指導を得て、今や七宝山は世界有数の観光地としての特色ある姿を誇っている。

本書には、七宝山を訪れる国内外あまたの観光客の探勝の便をはかり、観光コースに沿った名勝が紹介され、あわせてそれぞれの名所にこもる朝鮮民族の美風良俗を語る伝説も添えられている。

目　次

概　観 ＞ 4

内七宝 ＞ 8
　開心寺区域 ＞ 10
　上鷹峰区域 ＞ 42
　内元区域 ＞ 51
　二仙岩区域 ＞ 61

外七宝 ＞ 68
　将帥峰区域 ＞ 70
　万物相区域 ＞ 77
　徳谷区域 ＞ 91
　露積峰区域 ＞ 100
　降仙門区域 ＞ 104
　多瀑洞区域 ＞ 107
　黄津温泉区域 ＞ 116

海七宝 ＞ 120
　松島区域 ＞ 122
　彩画峰区域 ＞ 133
　塔古津区域 ＞ 137
　月門区域 ＞ 140
　武渓湖区域 ＞ 144

サービス施設 ＞ 146

[伝 説]

七宝山のおなごさんもまた貞婦中最高の貞婦 ＞ 12
夫の盗癖を直した妻 ＞ 13
獅子臼 ＞ 14
新しくそそり立った峰々 ＞ 16
再会の歓喜 ＞ 18
天下の美人岩 ＞ 21
金剛谷で野生人参を手に入れた少年 ＞ 24
餅の中に埋もれた万長者 ＞ 27
伝授できなかった仙術 ＞ 29
道術の極意を会得した二青年 ＞ 30

石に変わった新郎新婦 〉 36
隠蔽されていた剛力泉 〉 38
娘を救った若者 〉 43
門岩嶺の子牛と虎 〉 46
豆腐岩 〉 53
ウサギ伝 〉 55
夢岩 〉 57
やもめの兄嫁に代わってさらわれた義弟 〉 63
女色に迷った若い僧 〉 64
天男天女と共に石となって固まった神仙 〉 65
岩になった若い夫婦 〉 66
将帥峰の麓で出会った娘と若者 〉 74
武芸を修業する娘と若者 〉 79
歳月の流れに気が付かず 〉 80
万水泉 〉 83
七宝山に降りてきた天帝 〉 86
牛が最初に拓いた峠道 〉 88
十耕田の温泉 〉 91
雌鶏を待つうちに 〉 93
入れ替わった肉片 〉 95
邪悪な継母に復讐した兄弟 〉 109
郡守の笠に落ちた馬糞 〉 115
二仙潭 〉 119
山の神に罰せられた黄竜 〉 124
竜宮にない珊瑚 〉 127
海竜を退治した蔡剛力 〉 129
石に変じた僧と女 〉 133
果てのないいさかい 〉 141
七宝山に居残った天男天女 〉 142

概　観

朝鮮の東北部に位置する七宝山は、天下の絶景を誇る名山である。

朝鮮東海に面するこの山は、北側の漁朗(オラン)川と南側の花台(ファデ)川に挟まれた250余平方キロメートルの広大な地域を占めており、山中に金や真珠など７種の宝が埋蔵されているとして七宝山と名づけられたと伝えられている。しかし実際は、山岳の美をはじめ奇岩怪石、渓谷、滝、淵、樹林、海浜の眺めなど７通りの美をすべて備えている、宝のように貴重な山だとしてそう呼ばれたのである。

千変万化する七宝山の造化の妙は、名山特有の今一つの景観だと言えよう。

夜明けと共に濃霧が海からおもむろに谷の奥深くへと立ち込める情景を目の当たりにすると、今まさに伝説中の竜宮へいざなわれるかのような思いにとらわれるであろうし、山の中腹に棚引く雲の上にかすかに見え隠れする峰々は、生きて動いている巨大な怪物どもが、或いは遠く、或いは近くを徘徊しているかのような神秘な興趣にそそられる。

処々の渓谷には見事な滝や淵があり、その周辺一帯に多種多様な植物相が広がって、とりどりの風景を繰り広げており、季節ごと日ごとに変化無双の姿態を現出している。

朝鮮の先人は、季節ごとに新たな装いをこらす七宝山の風光をたたえて、春は百花繚乱の花の山、夏は青葉の茂る緑陰の山、秋は赤いもみじに彩られた紅花の山、冬は銀白色の雪に装われた雪白の山と呼び習わしてきた。

七宝山地区の西北側は高い咸鏡(ハムギョン)山脈に囲まれ、東側は海に面しているが故に、海洋性気候の影響を強く受けて、雲霧に包まれる日がかなり多い。

七宝山一帯の年平均気温はセ氏7.4度、年平均降水量は800ミリである。

七宝山一帯は自然地理的な条件及び生息条件に恵まれて、多様な生態環境が造成されている。

ユネスコは人間及び生物圏計画国際調整理事会第26回会議において、七宝山地区を世界生物圏保護

区として指定し、登録した。

　七宝山には、熊、狸、アナグマなど39種の獣と、ワシミミズク、ハチジョウツグミ、ウグイスなど192種の鳥が生息しているが、これは朝鮮に生息する獣類と鳥類の40パーセント強に相当する数である。このほか各種の両生類、爬虫類、昆虫類、淡水魚類まで合わせると、270余種の動物が生息している。

　海七宝前の海中には、スケトウダラ、タコ、ウニ、ワカメその他水産資源が豊富である。

　七宝山には800余種もの植物が自生しているが、これは咸鏡北道一帯の植物総種の77パーセントに相当する。

　ここには、松、チョウセンカラマツ、クヌギなど経済的価値の大きい数十種の樹木、野生人参、ヒカゲツルニンジン、キバナシャクナゲなど数十種の薬用植物、チョウセンゴヨウ、ゴミシ、ヤマブドウ、サルナシなど野生の果樹、それにマツタケ、ゼンマイ、ワラビその他さまざまの山菜も豊富である。

　七宝山の開心寺シナグリ、古津アカマツ、浦中アカマツが天然記念物として指定、登録され、大切に管理されている。

　なかでも七宝山マツタケは特有の味と香り、健康に良い補薬的効能などにより、朝鮮で産出する80余種の食用キノコの中で最上の位置を占めている。

　2000年の中秋に際して金正日(キムジョンイル)総書記は、６月の北南首脳会談に参加・随行した人たちや言論人代表団一行、現代グループ鄭周永(チョンジュヨン)名誉会長一行の各人に七宝山マツタケを贈った。

　当時、南朝鮮の各地には金正日総書記の大いなる恩情をたたえる、七宝山マツタケに関する伝説が生み出されて広く語られた。

　南朝鮮のメディアは、「旨い、七宝山のマツタケ」などの見出しで、このマツタケにこもる胸熱くなる事由を大書特筆したものである。

　南朝鮮では、七宝山のマツタケこそ特有の香りと旨味、きめ細やかな繊維質を持つ最高の食品であり、国内外に「秋の味覚」として紹介するに足る名品中の名品である、七宝山は「咸北金剛」と呼ばれる名山である、北は早くも1976年にこの山を自然保護区に指定している、金正日総書記は、以前は５大名山という通り詞が広く使用

されていたが、労働党時代には七宝山を含めて６大名山と称するべきだ、それに七宝山を断然首位に置いても遜色はなかろうと大きく評価しているなどなどと、人々は七宝山のマツタケと七宝山についての噂話で花を咲かせた。

名山は偉人の存在により一段と輝きを増すものである。

金正日総書記はたびたび七宝山を視察して、この山を人民のリゾート、観光地として積極的に開発すべきだとし、エネルギッシュに指導した。観光客が山の名所を残らず見て歩けるよう観光コースや施設をすべて手落ちなく整え、開心寺その他の遺跡遺物の保存に力を入れることなど、名勝の開発上見逃すべきでない問題が一つひとつ具体的に指摘されて、探勝コース、亭、閣、休養所などの諸施設が一新され、七宝山は観光地としての面目を新たにした。

七宝山には朝鮮民族の才能と知恵をよく見せる特有の民族建築形式を示す邑城、山城、建造物、墓、碑、卒塔婆など遺跡遺物が多々ある。

七宝山は風光が優れている上、峰々や名所などに人々の感興をもよおす伝説がこもっていることなどからして、探勝の時間を愉快に過ごせる。それに黄津(ファンジン)温泉その他処々に温泉があり、七宝山休養所の充実したサービスも快く、全山が観光客の楽しい憩いの場となっている。

七宝山の名勝は大きく内七宝、外七宝、海七宝の地域に分けられているが、これらを今少し細分すると、内七宝は４、外七宝は７、海七宝は５、合わせて16の名勝区域に分けられもする。

七宝山の名勝を巡るには、明川(ミョンチョン)駅でバスに乗り、明川邑を抜けてパクタル嶺を越え七宝山休養所に到着した後、内七宝、外七宝、海七宝の順で探勝するコースと、これとは逆に漁大津(オデジン)港または清津(チョンジン)港で船に乗り、まず海七宝地域を遊覧してから外七宝と内七宝を見て歩くコースもある。

七宝山の探勝客は、世界いずこの山とも比べようもなく美しい、この山特有の絶勝景観を眺望しながら、心身深くに流れ込む名薬ともまごうすがすがしい空気を満喫し、名所ごとにこもる興味ある伝説に魅惑され、一生の楽しい思い出として山に陶酔するであろう。

案内図

外
七
宝
内
七
宝
海
七
宝
パクタル嶺
外七宝ホテル
万丈峰
闕門峰
将軍峰
月落峰
昇天峰
寝床岩
跳躍台
兎岩
総角岩
娘岩
鷹岩
将帥岩
内景台
ピアノ岩
烽火岩
満月台
瓦屋岩
弾琴台
千仏峰
藁屋岩
礼門岩
開心寺の入口
万寺峰
輿岩
夫婦岩
露積峰
開心台
喫茶店
昇仙台
祈願岩
開心寺
農夫岩
母性岩
敬礼岩
金剛峰
将軍岩
宝村里
硯滴岩
徳谷の滝
オンニョ岩
玉渓亭
降仙門
民宿
海水浴場
魚群台
行列岩
黄津
松島
虹岩
文筆岩
塔古津
象岩
中国
ロシア
南陽
会寧
羅先
白頭山
清津
恵山
甲山
明川
七宝山
北青
咸興
平壌
元山
金剛山
朝鮮東海
朝鮮西海
朝鮮南海
日本

内七宝

内七宝は七宝山の内陸部を占める名勝地域である。

高い山々に取り囲まれた内七宝の尾根はどれも短く、谷も深くないので、探勝に有利である。内七宝の中心に千人の仏が天から降りてきて岩に固まったという千仏峰がある。

千仏峰を中心にして奇妙な形を持つ峰々には、人間や獣、建物、雑多な物品の形態をなす岩石が面白おかしい姿を競い、名勝に独特な彩りを添えているが、昔から内七宝のそうした姿態を特徴付けて、女性的な美を備えた山容だと評されてきた。

内七宝は開心寺区域、上鷹峰区域、内元区域、二仙岩区域に分かたれているが、それぞれの区域をつなぐ観光道路、登山路が安全・便利に開かれている。

開心寺区域

開心寺区域は、開心橋の南側を占めるハン台地、玉駄峰、世尊峰、東側の店屋峰、北側の金剛谷の手前までを含む内七宝の名勝区域である。この区域には、金剛谷、修道庵谷、清渓谷などの浅い渓谷があり、千仏峰を中心に諸名

白岩

所が集中している。

この内七宝の開心寺区域を探勝するには、99曲がりのパクタル嶺を越えなければならないが、この峰を越える前に七宝山の景勝をまず誇示するかのように姿を現すのが名所白岩である。

高さ10〜15メートルの白い岩の群れが東西200メートルの区間にのこぎりの歯のように並んでそそり立っている様子は、あたかも年中白雪をかぶっていると思える風趣である。岩の名が白岩と呼ばれるようになったのはそのためである。

白岩の群れを眺めながらパクタル嶺を越えると、開心寺区域に通ずる清渓谷の開心橋に到着する。

歓喜峠

歓喜峠は開心寺への道の最初の入り口にある、馬の背中のように盛り上がって、まろやかに横たわる峠である。

峠の上に立って東の方を眺めると、にょきにょきと立ち並ぶ岩山の群れが目に飛び込んでくる。その雄壮な眺めに、誰もが「やあなんていう素晴らしさだ」という歓声を上げるとして、歓喜峠という名がついた。

歓呼岩

歓呼岩は歓喜峠の北方に伸びる尾根の上に連なっている。岩の姿はあたかも内七宝を訪れる人たちの列のように見える。北の方の最初に目に付く岩は、重い荷を抱きかかえているような格好であり、その次の岩は長身の男、３番目は虚弱な少年のようである。

内七宝が世にまたとない絶景だと聞いてはるばる遠方の地からやって来た一行は、山の頂に立って内七宝の絶景を眺望して歓呼の声を一斉に上げ、そのままみな岩に成り変わったとして、それら岩の名も歓呼岩と呼ばれるようになった。

昔、歓呼岩の下方の清渓谷にこぢんまりした村里があって、そこには七宝山のおなごさんもまた貞婦中最高の貞婦という伝説が残されている。

［伝 説］

七宝山のおなごさんもまた貞婦中最高の貞婦

昔、清渓谷に器量よしの若い女が峠への道ばたに茶屋を置いて七宝山を遊覧する人たちを相手にして暮らしを立てていた。

ある日、七宝山の見物に来た若い３人の両班（貴族）が連れ立って茶屋に立ち寄った。彼らはあでやかな女主人の容姿に心を奪われ、なんとかして彼女を抱いて一晩楽しみたいものだと、思い思いに考えをめぐらした。けれども連れが３人で、しかもみな同じ思いにとらわれている目つきなので、公然と女に話を持ち掛けるわけにはいかない。

どうしたら仲間を出し抜けようかと思案した末、その一人が、自分はぐずぐずしていられんから、先に内七宝へ行くとして酒代を払い外へ出た。

すると残った二人も各自俺は外七宝をまず見る、いや俺は海七宝から見て歩くと言っててんでに立ち上がった。

最初の男は店の外へ出ると裏へ回って屋根の上に這い上がり、そこにつくばって二人の動きに目を凝らした。

ところが海七宝へ行くと言って出掛けた男が急に「ああ、頭が痛い、頭が…」とうなりながら引き返してきた。

女主人が、「あら、どうしましたの」と聞くと、どうも風邪らしいという。「風邪ならマツタケが名薬だそうですよ。海七宝へ行く途中マツタケを幾つか採って鼻の下に付けて歩くと、きれいさっぱりに治りますからね」と女主人は教えた。

ちょうどその時、外七宝へ向かったはずの男が空咳をしながら現れた。水筒に水を入れ忘れたと弁明するのを聞いて、女主人は、「まあ、何を心配なさっていますの。奇岩怪石で名高い峰々のどこにも洞穴があり、洞があればそこに泉が湧いていることは先刻御承知のはずでしょうに」と笑って言った。

屋根の上に這いつくばってそんな様子を見ていた男は、上には上があると言うが、確かにその通りだと感嘆して、屋根から飛び降りた。

３人の気持ちを察した女は、私にはあなた方に甲乙をつけたい気が毛頭ありません、ですから私が出した問題を正しく解いた方にこの身を任せることにしましょうと言い、１から10までの数を並べて筋の通った言葉を作るようにと言った。

よほどの時間を費やしながらも誰一人解答を出せないのを見て、女は別に深く考えもせず、すらすらと文を作っていった。

「一人でもなく
二人でもないあなた方が
三月も終わり
四月の近づくのどかな春の日に
五臓だけでなく
六腑も丈夫なら
七宝山の見物をすべきであって
八時が過ぎる時までもこの女の
九番目の穴にばっかしよだれを流して
十返もうかがい、先くぐりをしようなんて
なんと呆れたことでしょう」

この思いもよらぬ反撃に３人は一言もなく、茫然と立ち尽くしていた。

翌朝、女主人の忠言にすなおに応じ連れ立って七宝山に向かった３人は、帰途彼女に会って別れの挨拶をし、次のような賛辞を呈したという。

「七宝山はこの国の名山中の名山であり、七宝山のおなごさんもまた貞婦中最高の貞婦ですよ」

宝卓岩

宝卓岩は、歓喜峠東南側の浅い谷に沿ってしばらく行くと、谷の東北側の山頂に見える岩で、その姿はあたかも奇妙珍重な宝物をこれ見よがしに卓上に置いてあるような趣である。

この岩には、人間が物欲におぼれると石の塊も金塊に見えるという教訓がこめられている。

［伝 説］

夫の盗癖を直した妻

昔、物欲におぼれているある男が七宝山の見物に出掛けた。彼は、歓喜峠の谷間から見上げた山頂の、卓上に奇妙な宝の石が載っているかのような形の岩に目を止め、かたわらを通り過ぎる人を止めて、あれは一体なんだと聞くと、七宝山の宝物を載せてある宝卓岩だと教えられた。

この言葉を聞いてむらむら盗心が湧いた彼は、山の見物を止めてしまい、夜暗くなるのを待って山頂に這い上がり、宝卓岩の「宝物」を盗んでわが家へ持ち帰るや、誇らしげに宝の塊を拾ってきたと家内に言った。

夫がおろした宝物なるものを見ると、なんとただの石にすぎない。呆れた妻は、夫の盗癖を今度こそなんとしても直さなくてはと

決心した。

信仰心にあつい夫の前にひざを突き合わせて座り、妻は涙を流して「ねえ、私たちは仏様の前に罪を犯してしまったんですよ。この先どうやって生きていけますのよ」と言い、ふうっと溜息をもらした。

夫はその言葉に痛く心を打たれ、（仏様に供え物を捧げられないまでも、供え物の宝を盗んでくるなんて……）と深く反省し、くだんの石をかかえて七宝山に引き返し、元の場所に置いた。この事があってから彼の盗癖はきれいさっぱりなくなったという。

開心寺

内七宝の宝卓山に位置する開心寺は、渤海（パルヘ）時代（698〜926年）の826年に建立され、その後たびたび改築・補修された。

国宝に指定されている開心寺は、本殿の大雄殿のほか尋剣堂、音香閣、観音殿、山神閣などからなっている。

開心寺には仏像をはじめいろいろの遺物がある。そこには、オノオレカンバの木鐸があるが、昔から僧侶たちの手あかのついたこの木鐸は、叩くと妙な音がする。

また開心寺にはどの他の寺にもない特色ある臼がある。木を削って獅子の形に仕上げた獅子臼である。

開心寺の周辺には、仏教関連の古碑や卒塔婆などが立っている。

宝卓岩から500メートルほど離れた開心寺に通ずる道に碑があるが、それが馬に乗った人はここで降りよと指示する標識碑だということで、後世の人たちはこの碑を下馬碑と呼んだ。下馬碑の先の道の右側に、昔日の僧の遺骨を納めた３柱の卒塔婆が立っている。それぞれ大きさは異なるが、いずれもみな同じ形をしている。

［伝　説］

獅　子　臼

丸い形をした獅子臼の背部の中央に米を入れる穴があり、そこに杵が置いてある。ふっくらしたその尻の一端には先の尖った短いしっぽが

妙ちきりんに付いている。

この獅子臼は昔、この寺の僧たちが、子を授けてもらいたいとして参詣に来る女たちのために作った器物だという。

寺僧たちは、それらの女に寺に供える米は必ず獅子臼に入れて99回搗いた上で納めなければならない、そうしたら効験はあらたかであると言い含めた。

女が獅子の背にまたがり、杵に力を入れて臼を搗いていると、その度に獅子臼はぐらぐら揺れ、何度も搗かずに女は後ろにずれ、獅子のしっぽが女の陰部をくすぐることになる。このようにずり動いたり座り直したりしながら99回も臼を搗くと、その疲労よりも、獅子の「うなり」としっぽの刺激に息がはずみ、頭がくらくらする。

すると、待っていたとばかりに女を抱き下ろしわが欲望を遂げた僧は、やがて懐妊のきざしがあったら仏様の御加護だと思うよう言い含めたという。

ここを訪れた観光客は面白半分に臼を搗いてみては、この臼は医学博士もあえて考え付かないほど優れた「婦人科治療器具」だと言っては舌を巻いている。

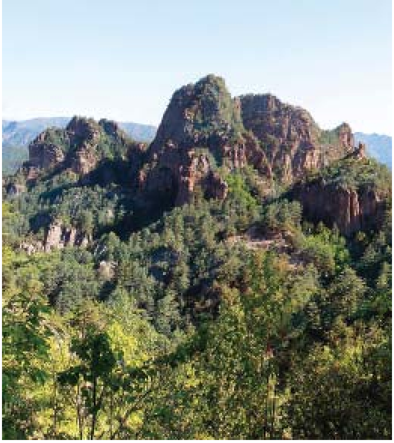
開 心 寺

千仏峰

千仏峰は内七宝の中心にそびえる海抜659メートルの峰である。

千仏峰を中心に万寺峰、鐘閣峰、羅漢峰、猿岩などの峰や岩が林立して、その偉容に重みを加えている。

千仏峰、万寺峰、鐘閣峰、羅漢峰、露積峰の５峰には、千仏がこの地に下りてきて寺院を建て、これら５峰を立ち上げたという伝説が残されている。



天 仏 峰

［伝 説］

新しくそそり立った峰々

むかしむかし大昔、七宝山の西方の空から無数の五竜車が舞い降りてきた。海東の聖国渤海の七宝山が天下の名勝だという話に興味を惹かれた千仏を乗せてくる天の車である。

天上の千仏が地上の七宝山に降り立って見渡すと、山は世にまたとない名勝であり、自分たちの生活に最適の地であると思えたが、寝起きする寺院のないことが問題であった。彼らは峰の処々を見て歩きながら相談した。この地のほかにこれほど優れた土地は見つけられそうになく、だからと言ってここで暮らすには居住する寺院がない。こんなことを話し合っているうちに日が西に落ちてあたりは暗くなった。

かと思う間もなくにわかに天空が振動し、稲妻が走ったかと思うと、四方の地上に何かがにょきにょき立ち上がるのである。あれよあれよと目を見張るうちに、そこに１万もの寺が建った。千仏は歓声を上げたが、改めて思い返し

てみると、ここで住むことになれば、誰の手で供米を集めることができようかという新たな心配事が持ち上がった。

千仏がそんな心配をしていた時、天空から一群のむら雲に包まれて仏たちの弟子である500羅漢が雲の車に乗って千仏の側近くに降り立った。

500羅漢は翌日から朝鮮全国を巡り供米を集めたが、それらはたちまちにして露天に高々と積み上げられた。

千仏はこの慶び事を世に広く伝えたかった。

万寺峰

（世上に鳴り響く大きい鐘があるといいのだが……）

千仏がこう思っていると、天上から大きな鐘がゆっくり降りてきて山の尾根に掛かった。

千仏は歓喜し、鐘を鳴らしながら叫んだ。

「海東の聖国の七宝山に千仏峰、万寺峰、羅漢峰、露積峰、鐘閣峰がそそり立った」

この伝説は、以前僧たちが仏教を広める目的で作り出したものではあるが、七宝山の峰々がいかに奇妙に出来ているかを語る昔話でもある。

夫婦岩

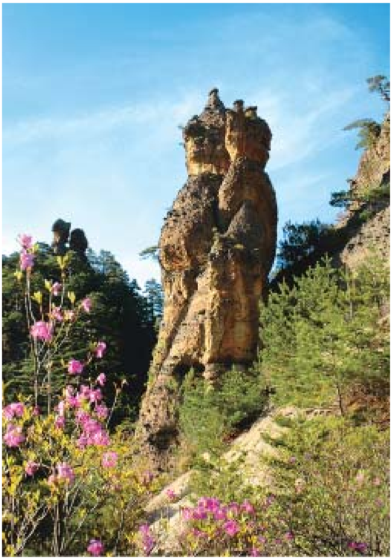
高さ15メートルの二つの岩がくっついて立っているその模様があまりもの傑作で、観光客を笑わせている。

西側の岩は、かぶとをかぶり、よろいを身につけた武士、東側の岩は、すんなりした体にチマ・チョゴリをまとった女の姿をしているが、まるで長い別離のあと久々に出会って喜び、抱擁している風情である。それでこの岩は夫婦岩と呼ばれている。

岩の格好を少し念入りに見ると、合わさった二人の顔は、頬ずりをしているようでもあれば、口づけをしているようでもある。男の下半身を包んでいる女のコリチマ（腰に巻いて着る裾の長いチマ）の中に隠されている両人の手は共に、ある秘かな行為に駆られているかのようである。

笑いを誘うその姿に今一つの面白みを添えるのは、ツツジの花が咲き乱れる春のひと時である。

女の頭上にひとふさの淡紅色のツツジの花がつぼみを開いて魅惑的に揺れ動き、その様子が、あたかも新婚の花嫁が宝石の髪飾りを付けて立っているようである。



夫婦岩

どうした造化の妙で、こんな山中にこのように珍妙な岩が出来上がったのだろうか。

この岩には、若い夫婦が再会の喜びに包まれているうちに岩に変わってしまったという伝説がある。

［伝 説］

再会の歓喜

昔むかし、内元谷に働き者の若者が住んでいたが、苦しい暮らしのせいで、妻をめとったのはかなり遅れてからであった。

気立ての優しい同じ村のういういしい娘を妻に迎えて間もなく、国の北方の国境を越えて侵略軍が攻め込んできたというニュースが伝わった。

夫は勇躍出征した。

いつしか７年の歳月が流れ、遂に待ちに待っていた夫が勇士の誉れを抱いて帰ってくるという知らせが届いた。

妻の喜びは大きかったが、着る

物と言えばつづれのチマ・チョゴリしかないのが気がかりだった。

その悩みが天に通じたのか、空に七色の玲瓏たる虹が立ち、美しい天女が降りてきて、彼女に絹のチマ・チョゴリを与えて帰った。

天女にもまがう優美な身なりで妻は、羅漢峰の尾根まで一目散に駆けつけた。ちょうどその時、向こうからよろいとかぶとに身を固めた夫がやって来た。

夫と妻は懐かしさのあまり、ひしと抱き合った。

しばらく夫の抱擁にわが身を任せていた妻は、夫のパジ(ズボン)の中に手を差し入れて股の物をまさぐり、「無事だったのね」とささやいた。

無心に垂れていた一物が女あるじの熱っぽい手に触れたとたん、ぐっと力強く起こり立った。

「ねえ君、その間こいつが君をどんなに思い焦がれていたか分かるまい」

男も妻の腰の下に手を伸ばし、顔を赤らめるその唇を吸った。

このように再会の喜びにひたっていた夫婦は、凱旋の勇士を歓迎すべくやって来た村のじいさんやばあさんが鐘閣峰の上に立って、自分たちを見下ろしていることに気づいた。

「あっ」

「あらっ、あたし……」

ほかに見る人などいないとばかり思い、逢瀬を楽しんでいた二人はそのままの姿で夫婦岩に固まってしまった。

猿 岩

猿岩は千仏峰の南側にあり、昇仙台に立てば、その姿をはっきり見ることができる。

猿が頬杖をついて何か考えにふけっているかのような格好の岩だとして、この名がある。

昇仙台

昇仙台は金剛峰の北側の麓にある岩展望台である。

昔、七宝山の景勝に魅せられて、天上の仙女（天女）たちが降りてきて遊び、この岩から天上に舞い昇って帰ったものだとして、この名がある。

昇仙台に立って内七宝を見渡すと、金剛谷の東側と西北側の山並みに列をなしてにょきにょき立っている奇々怪々たるさまざまの格好の岩の群れをながめることができ、人々が我知らず嘆声を発する名勝である。

金剛峰

金剛峰は、昇仙台の南側１キロメートル余りの所にある高さ642メートルの峰で、上台、中台、下台の３段からなっている。

上台に立てば、あたかも中天に昇り立ったかのようで、内七宝の全容を一望の下に俯瞰できる。

金剛峰はアルカリ性粗面岩と流紋岩からなる岩山で、その豪放な雄姿と妙を極めた形態の故に、昔から第一名山として聞こえている。

下部は黄味を帯び、上へ向かうにつれて色が濃くなり、頂上近くでは淡紅色を呈する峰の模様は、あたかも燃え立つ炎のような趣である。

金剛峰は、火山噴出岩状の顕著な峰であることから、火山の噴出過程ならびに風化作用の研究に有利な点があり、天然記念物に指定されている。

金剛峰の下台は金剛台とも呼ばれ、ここに天下の美人岩と童子岩がある。

鐘閣峰から見た金剛峰の雪景色

金 剛 台

天下の美人岩

天下の美人岩はその名とは裏腹に、世に二つとないほど醜い岩である。

では、どうしてこの世にも醜悪な岩が美人の名を持つに至ったのだろうか。これについては次のようないわれがある。

17世紀の文人南九万（ナムグマン）が七宝山を訪れ、僧の案内で山に登り、金剛峰に至った。

僧はその一帯の奇岩の名を挙げながらいちいち説明して歩いたが、一つの岩だけは何もいわずに通り過ぎようとした。南九万が「なぜこの岩の説明はないのか」と尋ねると、僧はこの岩はあまりにも見栄えがしないので、名前が付けられていないと答えた。

南九万は、「ほほう、それはなんと無体な扱いだ。もしこの岩に意識があったなら、どんなに悔しがることだろう。きっと涙を流して泣いたに違いない」と言った。

「でも、こんな無様な格好では、どうしようもないじゃありませんか」と、僧は問答無用とばかりに言い張った。

「だが、憎まれっ子には餅を一つ余計にやれという言葉もあるではないか。だから、天下の美人岩と命名してはどうだろう」と文人は言った。

「そう言えば、あの上の岩が美人らしく見えないでもありませんな」と、僧は満足して同意した。

こうして醜い無名の岩はこんな立派な名を持つことになったのだという。

碑石岩

碑石岩は、金剛峰の東側斜面の探勝コースを伝って100メートルほど降りた所の右側山腹に立つ高さ10メートル強の岩で、がっしりした肩に道袍（上着の上にはおる男子用礼服）を着て立っている後ろ姿のような格好である。

金剛窟

金剛窟は、碑石岩の地点からさらに400メートルほど降りた位置にあり、山頂から流れ落ちる雨水が一つに合わさりその浸食作用によって生じた洞穴で、大きさは幅12メートル、深さ８メートル、高さ2.5メートルである。

洞穴内の曲がり角に椅子のような形の台岩があり、ここに腰を下ろしてしばし休息することもできる。

それに洞穴の入り口の内側には清い泉が湧いており、観光客の喉の渇きをいやしてくれる。

入り口の側には常にしめりを帯びている扁平な岩がある。

高い山の上にある岩は、長い日照りで七宝山の草木が乾くようなことがあっても、まったくその影響を受けずいつも湿っている。

会像台

会像台は金剛窟の東側80メートルほどの所にある岩展望台である。

千姿万態の自然の風致が一望に見渡せる展望台で、この上に立つと、東西南北の見事な景観がたなごころを指すように見てとれる。とりわけ、ここから眺める秋の風景の素晴らしさは言語に絶する。

硯滴岩

硯滴岩は会像台の西南側にある。

水注の形をしたこの岩は、高さ５メートルもの円錐状の岩の上にあり、下から見上げると、円錐の

硯 滴 岩

上に石臼ほどの岩が載っているような思いがする。

内景台

内景台は金剛峰の北側、千仏峰の東側にある岩展望台で、この一帯のほとんどの奇岩や名所をぐるりと見渡すことのできる申し分のない位置にあり、そのことから内景台と呼ばれている。

内景台は、昇仙台からは遠くに見えていたものがすぐ近くに広がっているので、なかなか見応えがある。

内景台の北東側には、目まいがするほど空高くそびえている絶壁がある。

開心寺からは単純に見えている千仏峰であるが、その背面には、数万の岩々が競い立ち空を支えているかのような、雄壮な山岳美を誇っている。

九竜潭

九竜潭は、内景台の下方の金剛谷にある大きな滝壷で、昔９匹の竜が棲んでいたとしてこの名がある。

内景台の雪景色

九竜潭にはその昔、孝心の厚い元心（ウォンシム）という名の少年が、９匹の竜に脅かされながらもひるまず、遂に目的の野生人参を手に入れて帰ったという伝説が残されている。

［伝 説］

金剛谷で野生人参を手に入れた少年

大昔、内七宝の露積谷に元心という名の少年が病身の母親と一緒に暮らしていた。一家は代々この谷の近くで炭焼きをして口を糊してきた貧しい家柄であった。

ところで、少年が12歳の年の春、炭焼きでようやく家計を支えていた父親が病気で亡くなり、その後母親まで病にかかり、床に臥してしまったのである。

親孝行の元心は看病に努めたが、母の病状は重くなるばかりである。

そのことを知った村の長老が、野生人参を使ったらお母さんの病気を治せるかも知れないと、少年に話した。

少年は尖った木切れと握り飯を腰に付けて、金剛谷へ向かった。

秋の初めは野生人参を見つけるのに適している。この頃は野生人参の実が真っ赤になり、それが濃い葉の間にはっきりした姿を見せるので、深い茂みの中でもかなり見つけ易いのである。

けれども昔から、野生人参は霊薬であるため、山の神の恵みなしには人間の目にはなかなか付かないと信じられていた。元心は、母親への孝心に感動して山の神が自分に野生人参の位置をきっと教えてくれるだろうと固く信じ、サルナシやヤマブドウの茂みを掻き分けながら谷の奥へ奥へと入って行った。

深い樹林の中へ足を踏み入れてしばらく歩いた時、ザアッという轟音が耳を打った。顔を上げて見ると、高い崖の上から白い水しぶきを吹き散らしながら大きな滝が流れ落ちているのである。近づいて眺めると、滝の下には底の知れないほど広い滝壷が渦を巻いていた。

元心は痛快極まる滝の壮観に目を見張り、呆然と突っ立っていた。

とその時、滝壷の水が急激にぐらぐら音を立て、沸き立つかのように泡を吹き上げたかと思うと、幾つもの黒ずんだ柱のような物が不意に水面上に浮き上がった。目をこすってよく見ると、それらは９匹もの竜で、各自が恐ろしい勢いを競り合っているかのように、首をもたげ振り回しているのである。

ぎょろぎょろ光る目の玉、醜くふくれ上がった額に炎のように突き出た角、青黒い葉状の模様を巡らした首、黒々とした背中を覆っている大きなうろこ、ただ見るだけでもぞっとして逃げ出したくなるほどの恐ろしさである。

「お前は子供のくせに、なんのためこの深い山奥に入ってきたのじゃ」

兄貴分らしい、ひげを伸ばした竜の言葉である。

「は、はい、ぼくは露積谷に住んでいますが、重い病気にかかって死にそうになったお母さんの命を助けたくて、野生人参を採りに来たのです」

元心は恐る恐る涙まじりに答えた。

「おっほん、お前のその孝心は見上げたものじゃが、俺たちは人間に姿を見られることなく、ここで道術を修めているのじゃ。間もなく100日を迎えて天に舞い昇ろうという矢先に、お前が現れて俺たちの姿を見たのだから、俺たちは修業を無事に終えるためお前を食べてしまうほかない。分かったか」

兄貴分の竜は、槍先のような白い牙をむき、長い舌で唇をなめまわしながら言った。

「ぼくを殺さないで下さい。ぼくが死ぬのはいいけど、ぼくが野生人参を持って帰らなかったら、お母さんは助かりません。ぼくとお母さんをお哀れみになって、どうかお助け下さい」

元心は涙をぽろぽろ流しながら哀願した。

９匹の竜は困ったことになったという顔つきで、目玉をぐるぐる回しながら相談した。

「よし、お前の孝心には感心した。お前の苦しい家の事情も哀れだ。だからお前の命は助けてやる。ただしおれたちが天に昇る時まで３日間、あの崖の道に誰も入

り込まないよう、見張りに立っておれ」

こう言い終えると、９匹の竜は水中に姿を隠した。

元心は恐ろしい竜の厳命を違えるわけにいかず、腰に付けた握り飯で飢えをしのぎながら道の番をした。

３日目の夜が明けた早朝、にわかに空がかき曇り、大地が割れんばかりの雷鳴がとどろいたかと思うと、滝壷から９匹の黒い柱のような竜が抜け出して空に飛び立ち、黒雲を突き抜けて消えて行った。

すると空を覆っていた黒雲がたちまちにして消えて無くなり、青空に温かい秋の陽光がさんさんと降り注いで、金剛谷を明るく照らした。

元心は危険が去ったと胸をなで下ろし、険しい崖の道を這い上がった。

そこは、高い松の原で涼しく、地面にはコウライシバが絨毯のように広がっていた。

その密生したシバの中に、濃い緑のまろやかな葉に囲まれて、長い花茎の先に真っ赤な鈴のような実を付けた、愛らしい野生人参の姿が目に止まった。

「あっ、野生人参だ！」

元心はこれで母親の病気が治せると、わくわくした思いで人参の根を掘り大事にきれに包んで家へ持ち帰った。

少年は心をこめて人参を煎じ、母親に飲ませた。こうして母の病はすっかり治り、その後もわが子の孝心に支えられて90過ぎまで長寿した。元心も成長して妻をめとり、子女を設けて露積谷で長い幸せな生活を送ったという。

帯 母 岩

帯母岩

内景台の南側にある大きな岩で、赤子をおぶった女が大きな包みを頭に載せて谷川へ降りているかのようで、帯母岩と呼ばれている。

菩薩岩

帯母岩の後方に見える岩で、菩薩は童子菩薩であるが、馬づらに金壷眼、雨うけ鼻に尖りあごなど、なんとも言えないほど醜悪な顔つきである。

餅 岩

餅岩は内景台南側の金剛谷にある独りぼっちの岩で、黄ばんだ岩の色に加え細かい硅石が点々と付いていて、うるちの混じった粟餅のようである。

岩の形も、もちをあまり高く重ね合わせたせいで、下側の柔らかい部分が四方にはみだし、てっぺんには幾つかの固い餅が載っかっているような格好である。

この餅岩と言うにふさわしい奇妙な岩には、欲に目のくらんだあまり、餅に埋もれてしまった万(マン)長者の伝説が残されている。

［伝 説］

餅の中に埋もれた万長者

昔、漁郎村に万という姓の長者が住んでいた。

彼はひどいけちん坊で、餅や魚を人一倍好んでいながらも、餅を搗いたら、臼や杵、しゃもじ、お盆、箸、甚だしいことには歯にまでくっついて、実際に喉に入るのは幾らにもならないとして、餅を搗いて食べるのを出来る限り避けていた。

魚も、食べたら飯の量を多くならせる飯盗人だとして、一切買おうとはせず、貰い物の魚すら垣根の向こうへほうり捨てるほどの吝嗇漢だった。そんなわけで、村人たちは、万長者の名を聞いただけでも舌打ちをするのが常だった。

そんなある日、同じ村に住む若い木こりが、母親の病気を治すべく、七宝山に野生人参を採りに行き、餅の岩に出会って腹一杯食べ、野生人参も掘って帰り、母親の病まで全快させたということが

知れ渡った。

噂を聞いた万長者は、頑丈な体つきの下男二人にのみを持たせ、せかせかと七宝山に向かった。餅岩をわが家の庭に運んでこようともくろんだのである。そうしたら只で毎日餅を思う存分食べ、その上餅を売ってたちまち大金を儲けることもできる。

二人の下男は万長者の指示通り、餅岩のぐるりにのみを当てて打ち始めた。

その時、不意に長い道袍をまとった女が現れて、目をきっと光らせ、「あんたらはどこの誰なのに、七宝山の餅岩をぶち壊しているのよ」と詰問した。

万長者が一歩進み出た。

「私は餅が大好きなので、この餅岩を山の中にうっちゃっておくより、私の家へ移してから、餅を思う存分食べてみようと思いましてね」

「いや、それは絶対にいけない。ここで好きなだけ食べたうえ、ひとかかえずつ背負って帰りなさい」

こう言い残して女は風のように姿を消してしまった。

万長者は仕方なく、餅岩の餅を掻き取り二人のしょい子に乗せて帰ることにした。

「旦那様、もうこれくらいにしましょう。限度を越したらとても背負っていけません」

けれども万長者は、もっと載せろ、もっと、と促し続けた。餅は膝の高さあたりからへそ、胸、肩の上ほどまで積み上げられた。これではいかな力持ちでも、しょい子を背負って立ち上がることはできない。うんうんうなっていると、万長者はかんかんになり、何をぐずぐずしている、早く立てと怒鳴りつけ、棒で二人を叩いた。

二人はがまんができなくなり、怒りを爆発させた。

「この欲張りめ。貴様はこの餅の中に埋もれておれ」と捨てぜりふを残し、しょい子の餅を万長者におっかぶせて山を降りてしまった。

こうしてけちくさい欲張り男の万長者は餅の中に埋もれ、そのままへたばってしまったという。

店屋峰

店屋峰は金剛峰の東側に立つ岩の峰で、この二つの峰の間に金剛谷がある。

店屋峰上の奇妙な岩々はすべてさまざまの物品を思わせる形をし

ており、あたかも雑貨の売り場のような趣である。

書冊岩

書冊岩は店屋峰の北側の麓にある岩で、岩の肌には二筋の裂け目が同じ間隔で平行に左右に走っており、まるで３段づくりの書架のようである。

以前人々はそれが八万大蔵経をぎっしり並べ置いたもののようだとして、この岩を八万大蔵経書冊岩と呼んでいた。

書冊岩には、書物の紛失を防ぐためそれらに仙術をかけておいたが、それが永遠の石に固まってしまったという伝説がある。

［伝 説］

伝授できなかった仙術

大昔、天界では天帝が学者を集めて、万古の昔からの出来事を語る史書を編纂するよう命じたが、出来上がった冊数は100万余を数えた。

ところが、この膨大な書冊を保管するに足る適切な場所が天界にはなかった。そこでいろいろと協議した末決まったのが、地上の

会象台から見た書冊岩

七宝山のこの位置であった。風光に優れて大勢の人が訪れてくるので、図書の閲覧にも適していると見たのである。

天帝は書冊の運搬と書庫の建設、それに本の陳列・管理の一切を婿でもある学仙（ハクソン）臣下に当たらせた。

臣下の学仙は100万冊の本をすべて七宝山に移して積み上げ、書庫建設用の銅柱の到着を待った。

しばらく経って通知が届いたが、銅柱は他に流用されて余裕がないというのである。困ったことに、露天に積まれた史書は、七宝山の見物に来た人たちがてんでに抜いて読んだり、なかにはそのまま持ち帰る者もいるので、どうしてよいか途方に暮れた。

書冊の保管問題で頭を悩ましていた学仙は、妙案を一つ考え出した。天界で修めた仙術を使い、普段はすべての本が石に変じ、閲覧の希望者が現れたら求める本を元の姿に戻して与えることで紛失を防ごうとしたのである。

歳月は流れて学仙は老いさらばえ、臨終を間近にした。ある日、病床の学仙はもはや最期は免れないと覚悟し、書冊の変容を指図する仙術を総領娘に伝授することにした。やっとのことで起き直り、娘の名を呼んだが、彼女は外出中で家にはいない。

家臣が総出で捜し、天界にいる娘を見付けて連れ戻した。その時、学仙は最後の息をようやくついていた。

学仙は仙術の奥義を伝授せんものと懸命に口を動かしたが、「書冊岩に向かって…」という片言だけを残して絶命した。

結局、天界の万古以来の出来事を伝える史書は岩に変わったまま、二度と再び本には戻れなくなったという。

降仙窟と鍛冶窟

降仙窟は書冊岩の下側に、鍛冶窟はそこから50メートルほど先の下方にある洞で、共に壁がくぼみ、底には砂が厚く敷かれている。この二つの洞には道術の修業を果たした二人の若者についての伝説が残されている。

［伝 説］

道術の極意を会得した二青年

開心谷には崔（チェ）という姓の若者と李（リ）という姓の若者が暮らしていた。

二人は共に貧しい家庭の生まれで、幼少の頃父親に死なれ、母親一人の手で育てられた境遇の共通性からして格別に仲が良かった。年も同じだったし、近所付き合いで深くなじみ、柴刈りに山へ行く時も、川や海へ釣りに出掛ける時も常に一緒だった。

それに二人の考え方や性格もよく似ており、どちらも頑丈な体格を持ち力が強く、道義心や愛国心も深い、たくましい青年であった。

彼らの父親は当地で暮らしながらもしばしば辺境の防備に出て軍務に従事したが、幼いわが子たちに侵略軍を退け、国や故郷をしっかり守ることがいかに大切であるかを教え、愛国心を育んだものである。

そんなある年、二人の父親は侵略軍を撃退する戦いに出て、両人共に戦死した。

二青年が成長して心身の発達した年頃にも、七宝山からさして遠くない地方にまで不意に侵入して財物を略奪し、家屋に放火し、殺人をこととするえびす族の残忍な蛮行は後を絶たなかった。

国難を憂えた二人の若者はある年の初夏、国と人々の安全を守ることに献身しようと決心し、100日を期限とし道術を修めようと相談した。

道術の修業では、崔青年は居ながらにして目を閉じていても遠方から侵入する敵兵の動きを察知する術を会得し、李青年は空中に雲と雨を呼び、稲妻と雷鳴を起こして敵兵を壊滅させる術を身に付けようと誓った。

二人は本と武器、食料と生活用品を背負い、七宝山の秀麗な初夏の風光を満喫しながら、昇仙台の崖道を伝って金剛谷に至った。

崔青年は卓子岩の上方にある降仙窟に居所を定め、李青年は小松林の茂る低い台地を挟んでやや離れた下側の鍛冶窟に落ち着いた。

修業に入る前二人は、それぞれ目的の術を会得するまでの100日間は、一切会うことは避けようと約束した。

居所を定めた翌日から二人の修業は開始された。午前は弓術、剣術、疾走などの武術に励み、午後は閑静な岩の上や大樹の前に座禅

して精神を修養した。さらに夜は洞の中にたいまつの灯をともして真夜中まで諸種の兵書や有名人の著書を熟読した。

若い二人の友情の無言の伝達者は、朝夕食事を作る時に立ち昇る煙であった。両方の洞の前からもくもく昇る煙は生活が順調になされ、共に日課がとどこおりなくはかどっていることを語るシグナルでもあった。

このようにして時と日はたんたんと流れ、計画した100日の期限もいよいよ終わりに近づいた。七宝山の秋は二青年の修業が成就しつつあることを象徴しているかのように、赤い彩を表わし始めていた。

いよいよ約束の100日目を迎えた最後の日、突然空中に雷鳴のような轟音が鳴り、青白い光がぴかりと走った。山鳴りのようなこの響きに続いて卓子岩の上に巨岩が転がり落ちたような音がしたかと思うと、柱のように太い、てかてかしたうろこを持つうわばみが降仙窟の方へ降りてきた。

うわばみは、崔青年が眠っているかのように目を閉じ座禅をしている岩の上に頭を長く垂らし、チョツ、チョツと音を立てながら舌なめずりをした。

けれども、精神の集中に努める崔青年は、いささかの動揺も見せず、口を一文字に結び、静かに目を閉じて座禅を続けていた。

この巨大なうわばみは、崔青年をなんとか驚かせてやろうと躍起になってあの手この手を弄してみたが、すべて無駄に終わったのであきらめ、李青年のいる鍛冶窟へ向かって滑っていった。

うわばみは、鍛冶窟前の松の根方で精神の集中に励んでいる李青年の周囲を這い回り、恐ろしい唸り声を上げた。

しかし李青年も無念無想の境地を維持し、なんらの反応も示さないので、うわばみは滑るようにして森林の中へ姿を消してしまい、書冊谷は重い静寂に包まれた。

だが静寂は長くは続かなかった。

昇仙台の尾根の上で、「ガオーッ」といういかずちのような虎の咆哮がしたかと思うと、牛ほどもの雄虎が飛ぶように走ってきて卓子岩の上にうずくまった。虎は、

書冊谷の二青年を食い殺そうとするかのように、どうもうな目を両人に交わる交わる向け、口のまわりに付いたよだれを赤い舌でなめずった。

やがて虎は卓子岩から昇仙台の尾根までの間をつむじ風をヒューヒュー起こしながら飛ぶように行ったり来たりした。そのたびに虎のあげる咆哮は書冊谷を震撼させた。

それでも二人の若者はびくともせず、目を開くことも座禅の位置を移すこともしなかった。道術の修業に没頭していた彼らの精神状態はそれほど高い境地に達していたのである。

しばらく騒ぎ立てていたどうもうな虎は、無念無想の姿勢で修養を積む二青年の厳粛な態度に威圧されてか、昇仙台を越え、玉泰峰の方へ走り去ってしまった。

その夜、二人は何事もなかったかのように各自夕食を作って食べたあと、洞の中に座り、たいまつの明かりの下で兵書と経典の最後のページをめくった。100日間の修業を終える最終日の夜だった。

降仙窟で崔青年は睡魔を払いのけながら兵書の終章をそらんじた。

そんな時、不意に美しい一人の娘がそっと洞へ入ってきた。彼女は玉を転がすような声で、ためらいがちに言った。

「内七宝の見物に来て道に迷ってしまったのです。御迷惑でも一晩ここで休ませていただけませんかしら」

崔青年は驚いて顔を上げた。入り口に天女のように愛らしい娘が立っていた。水晶のように明るく輝いている瞳、笑みを含んだユスラウメのような唇、つぼみを開いたばかりのツツジの花のような色の頬。……

若者はまぶしげに彼女を見つめた。

「いや、それは困る。今は修業中の身で、いかなる人とも一切付き合いを断っているのだ。いわんや若い娘を近づけるなど絶対にできはしない」

彼は、今は同情をすべき時でないとして、きっぱりことわった。

「この夜中に私のようなか弱い女が独りで、虎がうろうろしている山の中をどうしてさまよい歩けましょうか」

娘は主の拒絶にもひるまず、さっと中へ入り、洞の壁際に体を横たえた。狭苦しい窮屈な洞に横たわった娘の胸は、座って兵書をそらんじている若者のふとももものすぐ側にあった。

疲れている娘はすぐ深い眠りに陥り、寝言まで発しながら、片足を若者の膝に乗せたり、手を伸ばして男のももを引き寄せようとしたりさえした。

そんなたびに若者は娘の腕や足を直してやったが、その柔らかい肌に触れるたびに、全身は燃えるようにほてった。

けれども彼は心を引き締めて誘惑に打ち勝ち、兵書の最後の学習に全精神を傾けた。国の守りを固めようとの大志を抱いて深山にこもり、100日の間、1日として日課を違えず修養を積んだ末、今夜最後の高峰を極めつつある時、偉丈夫たる者が、瞬間的な欲望に負けて清純な志操を曲げてもよいものか。

こう心を決めてみると、胸のときめきはおさまり、精神はただ一つのことに集中した。こうしてかたわらに人なき如く兵書に視線を投じ、夜が明けるまで繰り返しそらんじた。

東の空が白み始めた頃、彼は兵書を完全にものにして立ち上がった。大きく背伸びをして、見下ろすと、つい今しがたまでかたわらで眠っていた娘の姿が見えなかった。

同じ夜、鍛冶窟でも李青年は深夜に現れた娘の耐えがたい誘惑にめげず頑張り抜き、修養の塔の最後の石を積み上げることに成功した。

道術の奥義を会得した二青年はその後、辺境に出陣し、侵略軍を撃滅する戦いで、共に神妙な道術を駆使して大功を立てたという。

ピアノ岩

ピアノ岩は、書册岩の上側にある二つの岩からなっている。

遠い昔、釈迦は書册岩の本を抜き取り、涼しいそよ風が吹いているこの山頂に机と椅子を置いて座り、読書をしたとして、卓子岩と呼ばれていた。

ピ ア ノ 岩

時代が移り、ある時は二つの椅子が交じっているようだとして交椅岩、さらにその後はオルガンのように見えるとして風琴岩と呼ばれてもいたが、今日ではピアノ岩と改められている。

礼門岩と輿岩

礼門岩と輿岩は金積岩のすぐ近くにある。

金積岩の60メートルほど先に「人」の字の形をした高さ８メートルの岩があるが、これが礼門岩である。

初めて礼門岩と名づけられた頃の岩の間隙は輿が通り抜けられるほど広かったという。ところが現在のように狭くなったのには、それだけの訳があるとされている。

昔からこの辺りでは、新婚の若夫婦が婚礼当日この岩門を並んでくぐると偕老同穴で幸せに過ごせるという言い伝えがあって、新郎新婦がこの岩門の通過を婚礼の式順に含めることを一つのしきたりとしていた。ところがそんな噂が次第に広まり、遠方の地から白髪の老夫婦までわんさとやって来て、われもわれもと門をくぐるほどにぎやかになった。

このような様子にあきれた門番は、「いやはや、なんというけったいなこっちゃ」と苦笑して、人間が一人ようやくくぐれるほどに間を狭めて、どこともなしに立ち去ってしまった。

けれどその後も、婚礼の日の門くぐりの風習はすたれなかったという。

礼門岩の前方50メートルほどの地点に、昔新婦が嫁に行く時に乗っていたという輿の姿をした岩がある。

礼門岩と輿岩には、式の日に七宝山の見物にやって来て山の美しさに魅せられた新郎新婦をはじめ、同行した人たちや輿までみな岩となって固まってしまったという伝説がある。

礼門岩と輿岩

［伝　説］

石に変わった新郎新婦

大昔のある年、うららかな春の日和に花台郡に住む若者と漁郎郡に住む娘が鴛鴦の契りを結び式日を迎えた。

新婦を迎えに馬に乗って漁郎郡に出掛けた新郎は帰途、新婚祝いの遊覧かたがた七宝山を見物することにした。

新婦を乗せた輿をかつぎ、昇仙台を経て満月台、瓦家岩、舟岩などの並び立つ山の尾根に向かった一行が店屋岩のある山際に至った時、細道の前に「人」の字の形をした高い岩が立っているのに出会った。みなその奇妙な格好の岩を見上げて歩みを止めていると、物知りの馬の口取りが滑稽な言い回しで説明した。

「この岩門はですな、婚礼に福を添える礼門岩なんですよ。姿格好が人の字のように出来ているのは、婚礼を行ってここを訪れる新郎新婦を歓迎して人事（インサ）（挨拶）す

るという意味を持ち、また見方を変えると八の字のようにも見えますがね、それは新郎新婦がたくさんの子宝に恵まれて80を過ぎるまで長生きし、偕老同穴することを保証するというしるしなんですわい」

そのもっともらしくもおどけた話しぶりに、みな楽しそうに笑った。

ところがこの時、大きく開かれていた礼門岩の門が徐々に狭まり、人間一人がようやく通り抜けうるほどになってしまった。

輿かきたちは、新婦を乗せた輿が通れなくなったとして気をもんだ。

「みなさん、心配は御無用ですわい。礼門岩が狭まったのは、新婦も輿から降りて、新郎と共に門を一人ずつくぐり抜けて歩きながら、七宝山の景色を思う存分楽しめよ、という意味なんですよ」

先程の口取りがこう縁起の良い解釈を行ったので、礼門岩の前に輿は下ろされ、新婦は新郎に手を取られて門をくぐり、山の見物に向かった。

新郎新婦は内七宝と外七宝を見て回った後、海七宝を見物すべく海辺にやって来た。二人はまず松島に渡り、山の頂に立って、対岸に広がる絶壁や東海の景色を眺めた。

紺碧の海上に青々とした松の群れを持ってそびえる松島も壮観であるが、山の頂に立って見渡す海岸と海の風景はただ素晴らしいの一語に尽きた。

陸地の方に目を凝らすと、海岸に沿って延々と城壁さながらに切り立つ断崖が続き、その下方の崖の面に千姿万態の奇岩怪石が群がっている。色彩画のような彩りの肌を持つ崖もあれば、体躯の巨大な象が長い鼻を海面に垂らしているかのような象岩、数十数百本のろうそくが火を灯しているかと思える燭石岩、石柱のように削られ、まがきさながらに立ち巡らされた直石岩なども目に映る。

実に海七宝の景色も内七宝のそれに劣らず素晴らしく、海岸風景の特色がよく現出されている。

松島の頂で新婦ともども海七宝の景観に酔いしれていた新郎はふと、礼門岩の前に待たせている人たちのことを思い出した。

「ねえ、この美しい海七宝の絶

景をぼくたちだけが見ても良いものだろうか。ぼくが内七宝に大急ぎで引き返して、みんなを呼んでくるから、君はここでちょっと待っていてくれよ、な」

新郎はこう言い残して内七宝へ向かった。

ところが彼は、銀浦谷の前を通りすぎていた時、谷の松林の間に妙な形をした奇岩があるのを目に止めた。

彼は岩のあまりもの美しさに見とれて、内七宝に待つ人たちのことも、海七宝に置いてきぼりにした新妻のことも忘れてしまい、いつまでも立ち尽くしているうちに石となって固まってしまった。

銀浦谷の俗人岩はこのように石に変わってしまった新郎であり、海七宝の燭石岩の下手の浜辺で海中に足を沈めてぽつねんと立っている花嫁岩は、新郎の帰りをやきもきして待ち焦がれているうちに石に固まってしまった新婦だという。

それから物知りの口取りは開心寺で仏書を借り出し、見晴らしのよい岩の台地で平たい岩を机代わりにして本を広げて読みふけっているうちに卓子岩に変じ、輿かきたちが下ろした輿は礼門岩の前にある輿岩に固まってしまったという。

三卒塔婆岩（農夫岩）

三卒塔婆岩は、店屋峰の西側にある山の尾根に見える岩で、その形態が開心寺の境内に立つ３柱の卒塔婆に似ているとして付けられた名の岩である。

この岩はまた、大きな笠をかぶった３人の百姓が力強い足取りで歩いているかのようだとして、農夫岩とも呼ばれている。

農夫岩には隠蔽されていた剛力泉という伝説がある。

［伝　説］

隠蔽されていた剛力泉

昔、金剛谷にかつてない長日照りが続き、村人たちは水飢餓にあえいでいた。

そんなある日、村の一農家に白髪の老人が訪れて一椀の水を懇望した。

家の主は老人の窮状を哀れんで、法事用に取っておいた澄んだ

農 夫 岩

きれいな水を分け与えた。

喉の渇きをうるおした老人はほっとして、こんな話をした。

以前、この村には七宝山の深い渓谷から地中を伝って流れ込んでいた剛力泉という泉水場があった。村は大きくはないが、この泉の水を飲んで育った村人はみな体が頑丈で力が強かった。なかでも３人の若い農民はとりわけて非常な剛力であった。

ある年のこと、侵略軍が大挙七宝山に押し寄せてきた。

村の３人の剛力も戦いに臨むことになった。

村人たちは、もし敵兵がこの村に攻め入り泉の水を飲んだら大変なことになるとして、泉を隠すことにしようと相談した。３人の若者がその仕事を引き受けて、大岩を持ち上げ、泉の上にかぶせた。

その後歳月はやむことなく流れ、いつしか剛力泉は人々の記憶から消えうせてしまった。

話し終えた老人は、泉にこもるこの話をいたずらに聞き流さず、きっと探し出して、先祖たちの思いを違えずに剛力泉をしっかり守るよう繰り返し強調して、薄れる霧のように姿を消してしまった。

白髪の老人の言葉を伝え聞いた村人たちは総出で、畑にどっかり座り込んでいる大岩を掘り動かしてみた。はたしてその下に氷のような冷たい泉水が湧いていた。

この水を飲み始めてしばらく経つと、10年来の持病などがきれいに治り、人々は力にあふれて元気いっぱい農事に励んだ。

そればかりか、この泉水を使った畑の穀物はぐんぐん伸びて大きな実りをあげた。

こうして村人たちはもはや水に困ることがなく、喜びにあふれて暮らせるようになった。

歳月が流れ、孫子にも恵まれた例の農民は次第に深い思いにとらわれていた。３人の若者が出陣を前にして泉を隠蔽したことは、なんと大きな称賛に値する行為だったろうかと考えた。

こうして彼は、泉の位置を示す標識を設けると共に、侵略軍との闘いに出て帰れなかった３人の愛国の衷情をとわに伝えるべく、岩を彫って、３農夫の像を立てようと決心した。

彼は必要な道具を背負って前の山

の中腹に登り、朝から日暮れまで、汗にまみれながら岩を加工した。

この農夫岩はその時の彼の作品だと言い伝えられている。

瓦屋岩

瓦屋岩は倉庫峰の北側禅会岩の150メートル先にある岩で、あたかもお寺か瓦葺きの家のようだとして瓦屋岩と呼ばれている。

満月台と舞戯台

瓦屋岩の北100メートルの位置に、上側の縁がやや下に傾いている平らな岩がある。昔天女たちが七宝山で遊ぼうとして天界から降りてきて、月夜にこの岩の上で月見を楽しんだという満月台である。

満月台の東側に円形の平らな岩があるが、ここで天女たちが円陣を作って歌い踊りながら夜を明かしたとして、舞戯台と呼ばれている。

以上のように、開心寺区域の峰々や多種多様な奇岩怪石は、諸所の展望台に立って眺めることができるが、また登山コースをたどりながらそれらを目の当たりにして探勝の楽しさを味わうことも悪くないであろう。

瓦 屋 岩

上鷹峰区域

上鷹峰区域は、七宝山探勝の入り口であるパクタル嶺と門岩嶺、上鷹峰、チョロン峰を含む内七宝の名勝である。

パクタル嶺

パクタル嶺は標高762メートルで、七宝山探勝の入り口に当たる嶺である。

パクタル嶺という名称は、この嶺にパクタル（オノオレカンバ）が生い茂っていることによるとも、パンダル（半月）の模様をなす七宝山の山並みの中心に位置する嶺だとして半月嶺、パンダル峠と呼ばれていたのが音声が変化してパクタル嶺になったともいう。

峠道は内陸地帯と海辺の村を結ぶ通路である。

昔から虎も３日かかって越えたという話が伝えられているほど、くねくねと曲がる峠道を昇り降りする九十九曲がりの嶺である。

パクタル嶺の頂には、大型宝石画の七宝山観光案内図が立っている。ここから２キロほど下がると、内七宝の中心部にある奇岩や嶺々を観望できる石門亭がある。

山並みの中程を切り崩して道路を拓いた時、道の左右に切り岸ができたが、それが門のようだと呼び、ここに建てられた亭は石門亭と称されているのである。

円形の亭に立つと、内七宝の勇壮な姿を一望に収めることができる。

上鷹峰

峰の上部のありさまがたけだけしい鷹が止まっているかのようだとして上鷹峰と呼ばれている。また、山容がまさに飛び立たんとする鷹が翼を広げて羽ばたいているかのようだとしてこの名があるともいう。ほかに、雲や霧に始終包まれるとして、雲霧山という別称もあった。

上鷹峰の頂に立つと、七宝山のほぼ全景が望見できるが、ここから見晴らす山のもろもろの壮観の中でもひときわすばらしい眺めは、朝鮮東海の日の出と、夕暮れの陽光に赤く彩られた峰々の姿である。

門岩嶺

山頂の道の左右に切り立つ崖が向き合っているとして、門岩の名で呼ばれている嶺である。

門岩嶺の東北側に昔焼畑として利用されていた韓台地という台地があるが、当地には、韓（ハン）という性の若者が虎にさらわれた娘を救い、それが縁で彼女をめとり幸せな一生を送ったという伝説が語りつがれている。

［伝 説］

娘を救った若者

韓青年は親孝行で、善良で勤勉なうえ体格もよい若者であったが、間もなく新年を迎えると25の歳を数える、当時としてはかなり婚期を逸した年頃であった。

彼は容貌に優れ、しっかり者で、慎み深い青年ではあったが、貧乏暮らしが仇で嫁の来手がなかった。そんな境遇にありながらも、彼の胸中にはある娘への思いがたまらないほど渦巻いていた。

彼女は隣村の薬売りの一人娘であった。

若者は山で採った薪をその家へ時々届けているうちに彼女に心を引かれた。相手の両親も真面目な若者に好意を寄せ、娘も素朴なその人柄に気持ちを動かされ、ひそかに恋情をつのらせていた。

若者の二親もわが子の胸中を察してはいたが、わが家のあまりもの貧しさに気が引けて、あえて縁談を持ち掛ける勇気を出せなかった。

そんなある年の冬、若者はしょい子を肩にして山へ柴刈りに出かけた。

鼻歌を歌いながら門岩嶺の下方の谷を伝って上鷹峰を登り始めた時、右側の小高い崖の上で何かがうめいているような妙な声がした。

「なんだろうか?」

崖の上を見上げた若者はぎょっとした。

そこに牛ほどもの体に黒々とした縞を持つ大きな虎がくわえてきたらしい人間を前において、なぜか食べようとはせず、ただ口をもぐもぐさせていた。

人間の気配に驚いたらしい虎は大きな頭をもたげたが、若者の姿を目にすると、前足を上げて口を指し、何か助けを求めているようなしぐさをした。

上鷹峰の洞で一冬過ごした虎は２週間ほど前穴の外へ出たが、体がうずうずしてどうにもたまらず

一気に吉州（キルチュ）の長徳（チャンドク）山にかけつけ、雌虎とひと交わりして帰る途中、峠道で出会った中年の女を襲い、空腹の余り女の体を一切れも残さずがつがつ食べてしまった。

ところが、見境もなく女の頭をよく噛みもしないで飲み下したために、彼女の長い銅のかんざしが喉に突き刺さってしまった。

そのせいで何日も食べ物を喉に通すことができず飢えていた虎は、とにもかくにも獲物にありつこうとして、谷の奥のサルナシの茂みの中にひそんだ。そんな所へ薬泉の水を汲みに来た娘が一人現れた。

虎は待っていたとばかりに娘を襲い、口にくわえて風のように走り、この崖の上までやってきたのだったが、喉に突き刺さったかんざしのせいで口を動かすことができず、うめきをもらし、涙を流していたのである。

若者は虎のそんなしぐさから判断して、自分に何か助けを求めているものと考えた。彼は大胆に虎の前に近づいて怒鳴り付けた。

「やいつ、図体の大きい、山中の王たる者が山にうろつく不届きなけものを食い殺せばそれまでなのに、なんで人里に現れて人間に危害を加えるのだ」

若者のすさまじい叱責を受けても、虎はただ哀れみを乞うかのように、口を大きく開けて見せるのである。

彼は袖をたくし上げて虎の口の奥へ手を差し入れ、かんざしを抜き取った。すると虎はぶるっと体を震わせ、口を開いたり、閉じたりしてみて、もうこれで大丈夫だと安心したかのように、大きく息をついた。

虎は自分を助けてくれた恩人は見分けがつくのか、大きな頭を二度三度下げて感謝の意を表し、茂みの中へ姿を消した。

若者は娘の体に手を触れるのがはばかれてもじもじしたが、それは束の間で、両手で娘の頭をそっと回し、顔をのぞいて見て、あっと驚いた。

その娘は、自分がなんとしても妻に迎えたいと思いつめながらも、愛を告白するひと言の表現もできないでいる薬売りの一人娘だったのである。

その朝、孝行娘の彼女は両親に清い薬泉の水でご飯を炊いて上げようと考えて、雪の道を歩いて谷の奥の薬泉場にやって来たところを、虎に襲われたのである。

若者はそっと娘の胸に耳を当ててみた。幸いにも彼女の心臓はかすかに鼓動していた。

彼女をおぶって大急ぎでわが家に帰った若者は、オンドル部屋の暖かいかまど側の場所に娘を寝かせた。

しばらくして意識を取り戻した娘の明るい目には、命の恩人である韓青年への感謝と喜びの涙があふれ、玉のようにしたたり落ちた。

若者が娘の生命を救ったことも、また娘がほかならぬその若者の助けで死を免れたことも前世の因縁だとして、両家の親は共に二人の結婚を喜んで約束した。薬売りの夫妻は、命の恩人を婿に選ぶのは、徳行には徳行で答える道であるとはしてもそれ以上に、生死の境で結ばれた鴛鴦の契りはなんという幸運だろうかとして大喜びした。

酔いしれるような花の香りが漂う春、韓青年と薬売りの娘は、開心谷の村々が大騒ぎするほど盛大な結婚式をあげた。

若い夫婦は両家の親たちに心から仕えながら農事に励み、子女を設けて睦まじく幸せな一生を送ったそうだ。

七宝山に入る道筋の一つである、門岩嶺の東側の台地が韓という名で呼ばれるようになったのはこの頃だという。

稲叢岩、雄牛岩、農夫岩

稲叢岩は上鷹峰の東北側の尾根の上にある。その模様はあたかも稲叢を高々と積み上げたもののようである。

雄牛岩と農夫岩はその下側にある。稲束を高く積み重ねた稲叢、その稲叢に向けて頭をぐっと持ち上げ、稲束を満載したそりを力強く引いていく雄牛、その後ろに立って満足気に見ている頑丈な体つきの農夫。

この生き生きとした岩の群像は、まさに精巧な彫刻と見まがうほどである。年中汗水流して農作に励んだ農民が、豊年の喜びと誇りを表現しているような場景だと言えよう。

これらの岩にまつわって、虎に襲われた子牛を無事に救い出したという昔話が伝えられている。

［伝 説］

門岩嶺の子牛と虎

昔、上鷹峰の裾の門岩谷に、早く夫に死なれ、幼い二人の男の子と暮らしている若いやもめがいた。

彼女は焼畑を起こして懸命に働き、そのかたわら清渓谷で焼かれる陶器を市場に持っていって売りもした。

清渓谷の白土をこねて焼いた七宝山陶器は軽くて丈夫なうえ造りもきれいで、売れ行きが悪くなかった。陶器がよく売れるので気をよくした彼女は、畑仕事はほとんどなおざりにした。

若い女が重い陶器を入れたかごを頭に載せて、往復40キロ近くもの高く険しい門岩嶺峠道を歩いて行き来するのは決して容易でなかった。夜明け前にざっと朝食を済ませて売り物を頭に載せて出掛け、日が暮れて家に帰るのが普通の日課だった。

市場を往復する道の長くも険しいことに毎日難儀していた彼女は、なんとかならぬものかと考えた末、牛を１頭買おうと思いついた。牛の背に載せて陶器を運べば身が軽くなるだけでなく、荷をずっと増やせるので、商いをもっと広げることができると考えたのである。

彼女はちびちび溜めたお金を持って市場へ行き、子牛を買ってきた。子どもたちは家族が増えたとして喜んだ。子牛を荷牛として使えるまでには、１、２年しっかり肥やさなければならなかった。

牛の飼育は子供たちに任せられた。

子どもたちの熱心な飼育で１年ほど経つと牛は肉づきがよくなり、かなり大きくなった。

子牛を買って２年目になる晩秋のある日、二人の兄弟は子牛を谷の奥のカヤの原につないでおき、山裾の焼畑で大豆の取入れをしていた。

そんな時、思いもよらぬ出来事が突発した。

だしぬけに谷の奥から子牛の悲鳴が聞こえた。驚いた二人は手にしていた鎌を投げ出して、枯れ枝のぽきぽき折れる音のする方へ走っていった。見ると大きな虎が子牛を引きずって松の茂みの中へ入っていくのである。

二人はあっと驚いた。彼らの一

家にとってその子牛は家財のすべてであり、親子が生きてゆくためのただ一つの命の綱である。

丸々と肥えた子牛を重そうに引きずって峰の上へ登っていく虎の姿を呆然と見つめていた二人は、はっと我に返った。

「おい、俺たちがこんなにぼんやりしといたらどうなる。あの大事な子牛をむざむざ虎の餌食にされてはたまるものか。命がけで虎と戦って、きっと子牛を取り戻そう」

腕っ節の強い気丈な兄が叫んだ。兄弟は必死の思いで虎を追って走った。

はしこく先に虎に追いついた弟が泣き声で頼んだ。

「なあお前、どうかその子牛を返しておくれ。その子牛はぼくたち一家の命みたいなものなんだ。お前がいくらけものであっても、その子牛を食い殺したら、ぼくたちはどうやって生きていけるか考えておくれよ。ねえ、どうか子牛を返しておくれよ」

けれども虎はどこ吹く風と言わんばかりに、ぶるっとしっぽを一振りして尾根に這い上がった。

ところが、そこで何歩も行かずに虎はどしんという音響を残して姿を消してしまった。驚いた二人が近づいて見ると、虎は牛をくわえたまま深い穴に落ちていた。それは村人たちが熊を捕るために掘って擬装しておいたわなであった。

落とし穴にはまった虎はあわてふためき、子牛にはかまっていられなかった。くわえた子牛を放して落とし穴の外へ出ようと何度も這いのぼろうとしたり跳んでみたりしたが、穴が深すぎていくらじたばたしても無駄だった。

兄が弟に言った。

「おい俺はここで虎が子牛を食い殺すのを防いでいるから、お前は早く村へ走って人々に知らせるんだ」

弟の知らせを聞いて、村の青壮年が手に棒を持って駆けつけたが、落とし穴をのぞいてみて、困惑した。

子牛を傷つけず穴から引き上げようとしても、虎が先に上がってこようとするだろうし、だからといって虎を先に揚げようとすると誤って足を踏みはずし子牛が虎の下敷きになるか衝突して危害を受けないとも限らないのである。

みな落とし穴を取り囲んで、ああでもないこうでもないと言い

合っているうちに辺は暗くなっていった。

仕方なく彼らは、一部の者はかがり火をたいて虎が牛を食い殺さないよう見張り、残りの者は返って夜が明けたら、開心谷の名だたる熊狩りの男を連れ出してきて、投げ槍で虎を殺すことにした。

その夜遅く市から帰った母親は、子牛が虎にさらわれたと聞いて、気が動転した。

子牛を失うのではという不安にいらいらして眠ることもできず夜を明かした彼女は、疲れに負けてうとうとした。ところがその時妙な夢を見た。

死別した夫が子牛を抱いて落とし穴の中に座っていた。

「なあお前、この俺は今落とし穴にはまって死ぬ羽目に陥っているのだよ。わしは上鷹峰の主になったが、今度９番目の牛をつかまえて食べたうえでここを立ち去ろうとしたんだけど、思いもよらずお前が苦労の末手にした子牛を襲ったあげくこんな有様になってしまった。もし槍で俺を殺そうなどとしたら、門岩谷はおびただしい死骸で埋まるだろうから、絶対にこの俺を槍で刺し殺さないように止めてくれ。

わしがそうとは知らずに仕出かした過ちだったけれど、わが子たちが大事に、大事に育てているわが家の子牛だと知ったからには、何で食い殺そうか」

しばらく口をつぐんでいた夫は、次のように忠告した。

「門岩嶺の両側の岩が開かれているためにしょっちゅう虎が出入りして谷間に住む人たちや家畜に危害を加えるのだ。だから何はともあれ嶺の片一方の岩の門柱を崩して道を埋めてしまうのだ。

次に門岩嶺の向こう側の尾根の枕岩はなまけてのうのうと時間をつぶしていることの象徴だ、それがあるせいで谷の村人たちが貧乏暮らしに慣らされてしまっているのだ。だからそれに手を加えて牛岩に作り変えるとよい。

そうしたら門岩谷の人たちは虎に襲われもせず、みんな働き者になって貧乏から抜け出せるだろう。

それでは子牛を生きて返すから、わしが落とし穴から抜け出せるよう努力してくれ」

コケコッコー、夜明けの時を作る雄鶏の鳴き声に驚いて彼女は目をさました。

彼女は今見た夢がただの夢ではないと思い、一族の長老の家へ駆けつけて、夢の一部始終を話した。

「ふうむ、不思議な夢もあるもんじゃ、思うに、その夢はあの世にいる夫がこの村の人たちの生活を気づかうあまりに、虎に姿を変えて言ったことに違いなかろうから、その言葉に従うのがよいようじゃ」

早速人々を呼び集めた老人は、虎を害することなく落とし穴にはしごを入れてやれと言った。

老人の言葉に従って人々は長い丸太を落とし穴に差し入れた後、遠くにじっと隠れて様子をうかがった。

すると、虎は丸太を足がかりにしてひょいと穴の外へ飛び出した。虎は命拾いをしたことに喜んでか、ぶるっと体を震わせて大きく伸びをし、頭を持ち上げて全山が振動せんばかりに「ガオーッ」と一声大きく咆哮して、風を切って上鷹峰の茂みの中へ消えていった。

それを見届けた兄弟と村人たちはすぐさま死を免れた子牛を穴から引き出して村へ帰った。

子牛を無事に救えて安堵の胸をなでおろし、さらに死後も自分たちを気づかって救いの手を伸ばしてくれた夫の霊の愛情にほだされて、やもめの母親は歓喜にむせんだ。

他方、村人たちは力を合わせて、門岩嶺の頂の片側の崖を切り崩して峠の道をふさいでしまい、石工の手を借りて向こう側の嶺の枕岩を加工して雄牛岩に作り直した。

現在見られる、門岩嶺の頂の両側に城門さながらに立っている崖の一方の上部が欠けているのや、その向こう側の嶺にある雄牛岩はその時の出来事を語るものだという。

三礼岩

三礼岩は門岩谷の少し上の左側の山腹の茂みににゅっと突き出ている岩で、子細に見ると真ん中に大人が立ち、それが両脇に二人の少年を抱いて一緒に礼をしているかのようである。３人が並んでお辞儀をしているとして三礼岩と呼ばれている。

金蔵寺の卒塔婆

金蔵寺の卒塔婆はパクタル嶺の谷にある。往績谷の入り口から南方300メートルほど先の道路際に金蔵寺が立っていた。

金蔵寺は1700年頃に建てら

れ、1850年頃になくなった寺で、今はその土台が残っていてこれを金蔵寺址と言っている。この金蔵寺址の前に卒塔婆が立ち、一時栄えた金蔵寺の昔日の面影をしのばせている。

チョロン峰

チョロン峰は、内七宝橋の西方へ道路沿いに走り、千徳峰から分かれ出て宝村川上流の岸辺に伸びている４筋の小高い尾根に幾つもの岩を持つ峰の名である。

チョロン峰とは、峰に岩々がオロンチョロン（鈴なりに）ぶらさがっているようだとしてつけられた名であるが、その幾つかの主だった岩を見ると次のようである。

道士岩——チョロン峰の最初の尾根の一番上にある岩で、頭巾をかぶった道士のようだとして名づけられた岩である。

学徒岩——道士岩の下側にあり、道士の教えを受けて武芸の修業に励んでいるかのような趣である。

兜岩——学徒岩の下で兜をかぶり、外向きに座っている武士のようで、武芸の極意をほとんど体得した勇将のようである。

鰐 岩

書物岩——チョロン峰の２番目の尾根の下側にある書物が並び置かれているような岩で、四角形の、横に走る長い亀裂が続き、あたかも数百冊の本が丁寧に積み重ねられているかのような趣である。岩の上部にはひさしのように石が突き出ていて、それらの本を雪や雨から防ぎ保護しているように見える。

司書岩——書物岩の側近くに重々しく立っているこの岩はさも書店の主のようである。

巨人岩——大きな体つきの女が孫娘を抱いて立っているような格好の岩である。

鰐岩——鰐が松葉の垂れている岸壁に取り付いているような岩である。

将帥岩——高さ10メートルの大岩で、剛勇の士さながらだとしてこう呼ばれている。

チョロン峰の３番目の尾根を望むと、ぐんと高く長く盛り上がっている鼻柱岩があり、４番目の尾根の上には角に幾つかの三角柱が立っている奇妙岩がある。

内元区域

内元区域は、南側の迎春台、東側の禽獣峰、西側の満月台東面、北側の三王峰に囲まれた内七宝の名勝区域である。

内元区域の中央部を通って、基本観光道路が外七宝に向けて走っている。

基本観光道路に沿って内元区域に行く道筋には、屏風岩、明鏡岩と銘録岩、沸流潭、拳骨岩、景松岩、馬岩などいろいろな名所がある。

屏風岩

開心橋を渡り、観光道路に入って最初に出会う名所は、左側に見える屏風岩である。

屏風岩は高さ300メートル、幅100メートルもの大岩で、道路上から眺める巨岩の壁面は弓なりに緩やかに反っていて、巨大な屏風を思わせている。

明鏡岩と銘録岩

左側に屏風岩を眺めながらしばらく行くと、今度は右側に明鏡岩と銘録岩が姿を見せる。

明鏡岩は岩肌がつやつやとして鏡のような岩であり、銘録岩は、昔ある文人が七宝山の名所を記録すべく、この岩の上に座って筆を取ったとしてそう名づけられた岩である。

沸流潭

明鏡岩と銘録岩を見てから山の曲がり角を回ってあがって行く道の下方に、奇妙な形態をした淵が現れる。

勢いよく流れる谷川の水が上からここへ落ちて、淵がふつふつ沸いているかのように思えるとして沸流潭と呼ばれている。

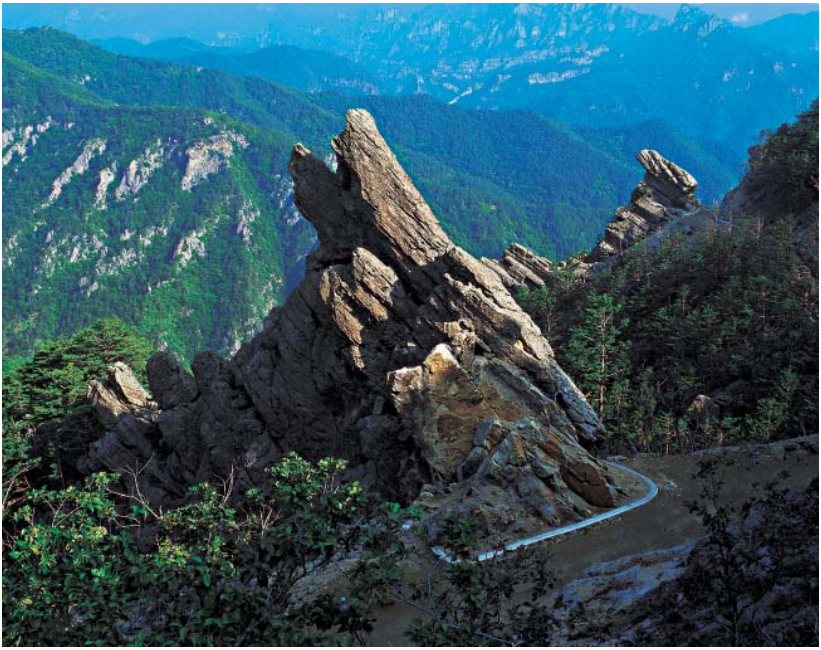
広い岩板の上を流れる清い水が淵に落下して無数の美しい玉しぶきを四方に散らしているのはまことに絶景である。

半月峰

半月峰は、安心橋から基本道路を150メートルほど進んだ所にある低い峰で、その姿が半月のようにきれいだとしてこの名がある。

頂上には２匹のサメが空高く飛び立とうとしている格好の鮫岩や、座っている官吏を思わせる文官岩などがある。

沸 流 潭



鮫 岩

豆腐岩

豆腐岩は、観光道路から安心橋に入る際に右側に見える半月峰の中腹にある岩である。四角形の岩板の上に、一辺の長さ1.5メートルの正六面体からなるこの豆腐岩が載っているのである。豆腐岩は人工のものではないかと思えるほど精巧に出来ている。

豆腐岩の前には包丁を真っ直ぐに立てたような形の岩があり、伝説の中の、豆腐を切っていた包丁だとされている。

豆腐岩については、次のような伝説がある。

昔、七宝山の見物で往来の頻繁なこの道際に、一人の女が餅と豆腐を置いて売っていた。

ある日のこと、餅はすっかり売れたが、豆腐が1丁売れ残った。

女は暗くなる前に帰らなければ

として、ここを通る人は誰であれおなかが空いて食べたかったらどうぞという思いで、人の目につき易い場所に豆腐を置いておいた。

ところが、翌日もその次の日も主のいないその豆腐に手を付ける者は一切現れず、豆腐は元の場所にそのまま置かれてあった。

そんな所へ、たまたま山の見物に来た隣国の外国人がそれに目をとめて、「あの豆腐はなんのためにあんな風に置かれているのですか」と尋ねた。

この辺りに住む住民から訳を聞いたその外国人は、「いやあまったく、朝鮮は聞きしにまさる東方の礼儀国ですわい」と感嘆してやまなかった。

その後、豆腐はだんだん大きくなり、石に固まってしまったという。

禽獣峰

禽獣峰は内元谷入り口の東側にそびえる峰である。いろいろなけものや鳥の姿をした岩が多いとしてこの名がある。

禽獣峰に登りながらまず目に付く岩は猪頭岩である。ぐいと突き出された岩の格好は、がつがつ餌を食べる猪の頭にそっくりである。

清い支流に沿って進むと、勇猛な獅子の姿をした岩があり、その右側には梟岩がある。この岩は胸部に白味を帯びた本物の梟そっくりである。

その数歩先には、力自慢をしているかのように熊岩が頭をぐっと突き出している。

次に、けものどもの力競べを判定して手を上げているような、平手岩がそり立っている。

平手岩の下には何かをつついているような嘴岩があり、その次には郭公岩がちょこなんと座っている。

山頂には、これら鳥獣の見物をしているような童子岩が立っている。

板瓦谷

板瓦谷は内元区域の西北方遠くの薬袋峰の東南方に延びている渓谷である。

薬袋峰という名は、草薬の入った紙袋を高々と重ね上げたような

姿をしているとして付けられたものである。

板瓦谷は、以前板瓦を作っていた谷だということでそう呼ばれているが、板谷とも言われている。

板瓦谷の北側の尾根には、亀岩、仮面岩、花餅岩などがある。

亀 岩

亀岩は豆腐岩の先の北側、板瓦谷の尾根の上に見える岩である。

亀が岩壁に取り付き、それ以上上がれず、壁に張り付いているような趣である。

亀岩を眺めていると、『ウサギ伝』という昔話が浮かぶ。

［伝 説］

ウサギ伝

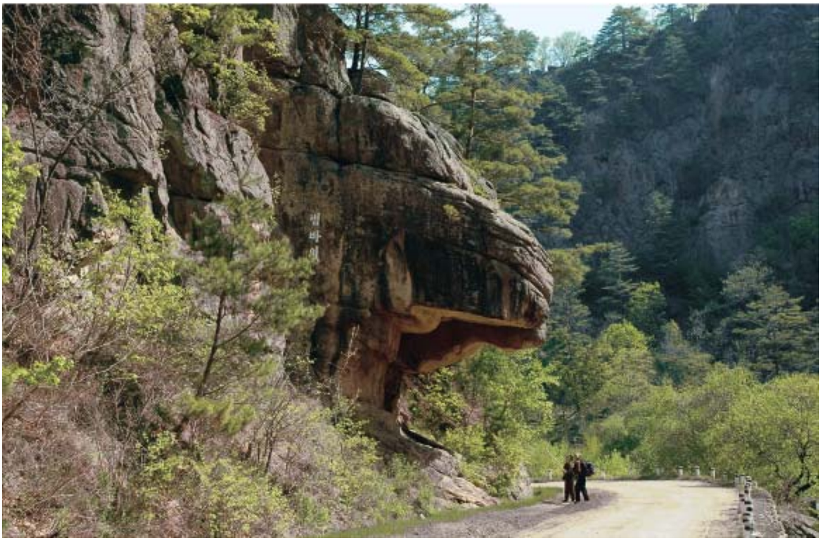
昔、東海の竜王の娘が胃腸病を患い苦労していた。侍医の言葉によると、ウサギの肝を手に入れて、薬に混ぜて飲ませれば効き目があるという。

けれども海にはウサギがいるわけがないので、どうしようもなく困り切っていた。そのことを知った一匹の亀が竜王に、自分がウサギを捕らえてきて見せると言った。

こうして陸に上がった亀はウサギに会って言葉巧みに持ちかけた。「海にすばらしい島がある。そこではきれいに澄んだ泉があり、森は青々と茂り、おいしい果実がいくらでもある。年中寒くも暑くもないし、恐ろしい鳥やけものもいないから、お前がその島へ渡って暮らしたら安らかに、心配事もなくすごせるよ」と。

心を動かされたウサギを背中に乗せて、１キロほど泳いだあたりで、亀は振り向いて言った。「本当のことを言ったらな、今竜王の娘が病気に苦しんでおり、ウサギの肝を薬にしようとしているんだよ。ちょっとしんどいけど、今お前を乗せて帰っているんだ」

ウサギはびっくりしたが、すぐに気を取り直した。「なんだって？ぼくはね、神様の子孫なので自分の五臓を取り出し、きれいに洗って元の場所に戻すことが出来るんだ。近頃体の調子がどうもよくないので、ちょっと肝と心臓を取り出して洗い、岩の上に置いておいたのさ。君のうれしい話を聞いてすぐさまついて来たもんで、肝は今もそのまま岩の上にある。だから早く引き返して肝を持って



虎 口 岩

来たらいいだろう。そしたら君は薬を手に入れることができ、ぼくは肝がなくてもちゃんと生きていけるからどちらにも結構なことじゃないか」

亀はこの言葉に乗せられて陸へ引き返し、肝があるという岩の上へ這い上がった。ウサギは岩から飛び下りて叫んだ。「なんて馬鹿な奴だ。亀さんよ、どこに肝もなしに生きていける奴がいるのだ」

こう言い残してウサギは茂みの中へ走り込んだ。亀はぐうの音も出せず、すごすご引き返した。

兎岩と虎口岩

兎岩と虎口岩は、外七宝に通ずる基本観光道路の際にある。

兎岩は禽獣峰の裾を一曲がりした道路左側の大岩の上にある。

本物のウサギにそっくりそのままで、いつ猛獣が現れるかと、周囲に注意深く目を配りながらそろそろ降りているような姿勢である。

兎岩を眺めて山の角を回って少し行くと虎口岩がある。一名虎岩とも言う。

大きな口を開けた虎の下あごは道路の面にほぼ達しており、上あごは道路に向けてぐっと突き出ている。

口の中の歯茎や牙のへり、低い鼻も本物の虎のそれである。

梨 谷

梨谷は、北側の薬袋峰と仙王峰の間にある渓谷で、梨の木が多くてこの名がある。虎口岩の下方200メートルほどの所に狭い谷の入り口があるが、その谷が梨谷である。梨谷には、烽火岩、敵対岩、太鼓岩、双馬岩などの奇岩がある。

烽火岩は梨谷の東側の道路際にある。燃え上がる火炎のように赤みを帯び、その形ものろしにそっくりである。

梨谷の１キロほどの奥に入ると、北側の仙王峰から伸び下がった尾根に、敵陣に斬り込む軍勢のようだとされる敵対岩がある。

敵対岩の下方から谷沿いに２キロほど進むと、北側の尾根に幾つかの奇妙な形をした岩が現れる。

柱状の、高さのそれぞれ異なる、３本及び２本ずつくっついた二組の岩があり、その次に１本柱のような岩の上に太鼓岩という丸い石が載っている。その昔、鼓手が戦勝を祝って打ち鳴らしていた太鼓を置き去りにし、長い歳月が流れて石に変わってしまったという。

太鼓岩からさほど遠くない所に、２頭の馬が仲良く体をすり寄せて立っているような双馬岩がある。大きさも模様も全く同じで、双子のように思える。

夢 岩

禽獣峰を後にして３キロほど内元谷に沿って進むと、青々と松林の茂る谷の水際にきちんと置かれた平らな岩がある。

大きさも形態も特別なところのないただのこの岩が、どうして夢岩と呼ばれるようになったのか？そのいわれを語る伝説が今日まで語りつがれている。

［伝 説］

夢 岩

昔、内元谷に都越真（トウォルチン）という老人が成知（ソンジ）という名の一人息子と一緒

に暮らしていた。

幼い頃母親に死なれ、病身の父親に代わって生活を支えている成知はたいそうな孝行息子であった。毎日のように七宝山の尾根や谷を探し歩いて採ってきた薬草を煎じて父親に飲ませ、白米のご飯は無理だとしても、三度三食欠かさず温かい食事をもてなしていた。

そんなある日のこと、柴を取って山を降りていた成知はひどい疲労と空腹に耐えかねて、ある岩のかたわらにしょい子を下ろし、一休みしようと岩の上に座った。ところが、我知らず彼は深い眠りに落ちた。

そんな時、雲の中から姿を現した白髪の老人が成知を見下ろして言った。

「わしは天界に住む神仙だ。お前は大変な孝行者だから、お前を助けたいと思う。だから、あしたまたこの岩の上に来るがよい。その時どんなことが起ころうとおじけず、勇気を奮い起こすことを忘れてはならないぞ」

目をさました成知は、夢だったのかと思ったが、あまりもの不思議さに、ただの夢ではないと思い、翌日そこにやって来た。ところがにわかに空がかき曇り、黒雲を貫いて稲妻が走り、雷鳴が轟いた。それは内元谷のすべての物を洗いざらい巻き込んでいくのではないのかというほどのすさまじさであった。

この時、ピカッと光った稲妻に照らされて、一人の女が悲鳴を上げながら必死に走ってくるのが見えた。よく見ると、１匹の虎が彼女の後を追っている。成知は岩の上から一気に飛び下がり、虎をめがけて斧を振り上げた。

彼は頭上を飛び越える虎の頭を切り付けようと斧を力一杯振るった。若者の勢いに恐れをなしたのか、虎はしっぽを巻いて逃げてしまった。

虎を追い払った成知は、気が動転してぶっ倒れている女を抱き起こした。ところがなんと、彼女は美貌のうら若い娘であった。

若い二人が向き合って立っていると、どちらももじもじして口もまともに利けなかった。成知はやっとの思いで、雨がひどいから、晴れるまで自分の家で休んでいく

ようにと言って彼女をわが家へ連れて帰った。

娘は、七宝山の北の村で母親と二人で暮らしていたが、母親が急病で亡くなったので、花台郡にいる母方の叔父を頼っていく途中だった。

成知の家で雨宿りをする間、部屋に行儀よく座り、それとなく室内を見回す娘の目に映るのは、貧乏のひどさを語るものばかりだった。

しばらくこの家にとどまり、親子二人の暮らしをわずかなりとも助けてあげようと思った彼女は、その日から洗濯をし、台所をきれいに片付けるなど、甲斐甲斐しく家事を手伝った。

彼女のおかげで家の内外は見違えるほど清潔になり、毎度の食事でも、同じ材料を使いながらもおかずの味が異なるように工夫しておいしく作った。

ある日、成知の父親は惜しい気持ちを隠して、もうそれくらいにして出発するようにと言った。すると、娘は目に涙を浮かべて切なげに訴えた。

「お父さま、私はお子さんのおかげで命拾いをしたのです。ですのに恩返しもまともにしないで出ていけましょうか。

私は一生このお家に残り、恩をお返しする思いで暮らせればと願っています」

こう言って彼女は、床に手をついて深々と頭を下げた。

思いがけない申し出に、成知は嬉しさを隠し切れなかった。その間胸の中に彼女への思いが消し難く焼きついていたのである。

こうして若者と娘はささやかな祝儀を上げた。父親は息子夫婦の心こもる介抱に助けられて、翌年遂に床を上げ、家事を助けながら100歳まで長生きしたという。

くだんの岩が夢岩と呼ばれるようになったのは、岩の上で夢を見、幸運に恵まれたとされたからである。

松明岩

松明岩は観音峰の頂にある岩で、高さ５メートルの円柱の上に径１メートルの丸い石が載っている。円柱と丸石の間に40センチほどの細い頸が付いていて、丸石をちょっと押しても転がり落ち、頸

松 明 岩

まで壊れてしまいそうである。

この奇妙な形の岩をある一つの方向から眺めると、棒の先から炎が燃え上がっている松明のようなので、松明岩と呼ばれているのである。

城塞岩と将帥岩

城塞岩と将帥岩は内元谷の最奥の西側にある岩で、開心寺区域のすぐ近くに位置している。

城塞岩は高い城壁とそこに城門を持っているかのような形態の岩であり、岩の内側には将帥岩が巨然と立っていて、あたかも将帥の命令一下、城門が開かれて無数の軍勢が打って出るのではという思いがする。

仙女窟

城塞岩の下側にある洞で、入り口は半月のような形をしている。

昔、天界の仙女(天女)たちが陰暦６月15日の流頭と陰暦８月15日の秋夕に七宝山の見物に降りてきて、昼は山を見て歩き、日が暮れると舞戯台の上で皓々たる月光に照らされながら歌を歌い踊りを踊りながら遊んだ。

そんな時、俗世の人間が近くに現れたりするとすばやく洞に隠れたという。

そんなわけで半月窟と言われていた洞は改めて仙女窟と呼ばれるようになった。

ここで探勝客は今一度開心寺区域に入るか、または内元谷の入り口に戻り、外七宝地域へ向かうこともできる。

城 塞 岩

二仙岩区域

二仙岩区域は、北側の世尊峰と東側の徳峰、西側の上鷹峰と玉駄峰、南側の南山岩に囲まれた内七宝名勝の一区域である。

内七宝の南側に位置する二仙岩区域の奇岩はすべて大型で、衝天の勢いを現しているのが特徴であり、しかもよろずさまざまの形態を備えていて、内七宝の万物相と言うにふさわしい。

二仙岩区域に向かう登山コースへは、外七宝の浦下と浦中を経て入ることになる。

浦下川をさかのぼって登山コースに入ると、あちらこちらに渓谷があり、右手にその一つ蝉谷と呼ばれる谷がある。

セミが特別に多いとしてこの名があるが、夏のさなかになると、セミの鳴き声は耳にかしましいほどである。

浦中アカマツ

笠松（浦中アカマツ）

笠松は、浦下川に沿って上流へ３キロほどさかのぼった所にある蝉谷の入り口に立つ、一風変わった姿の松である。

松の上部の枝ぶりが本物の笠のようだとしてこの名がある。

笠松の年齢は200年を超えており、根元の径は0.9メートルである。四方に傘の骨のように枝を伸ばしている笠の直径は20メートルにもなる。

葉は短く密に重なり合って濃緑色を呈しており、あたかも縫い合わせた青い絹のような趣である。

この笠松はその特異な形がことのほか珍しいとして、天然記念物に登録され、浦中アカマツの名で大切に保護されている。

笠松の立つ蝉谷には昔、小さな村落があったが、そこにはやもめの兄嫁の身代わりになってさらわ

れた義弟が、奇しくも花嫁を手に入れたという物語が残されている。

［伝 説］

やもめの兄嫁に代わって さらわれた義弟

昔、蝉谷に婚期を逸した若者がやもめの兄嫁と同じ屋根の下で暮らしていた。

当時はまだ略奪婚の風習が残っていた時代であったが、海辺の漁村に住むある男やもめが兄嫁をさらいに来るという話が伝えられた。

驚いた兄嫁は考えに考えた末、ある日妙案を思いつき、義弟を呼んだ。

「ねえ、今日の夕方その男がやって来るそうよ。

あたしが縛られていったら、この家の家門とはすっかり縁切れになっちゃうのよ。そんなことになったら大変じゃない。だからね、あんた、あたしの言う通りにしていただけないかしら」

分かったとうなずく義弟に、彼女は自分のチマ・チョゴリを着せ、きれいに紅おしろいもつけて部屋に座らせて言った。

女らしい恥ずかしげな身振りをし、声は一切立てず、いやいや無理にかつがれていくようなふりをして、男たちのなすがままに動くのよと。

その夕刻、男やもめが押しかけて来て、「兄嫁」をかついで帰り、仰天している「女」を安心させようとして、年頃の妹のいる部屋に横たえてから、出入り口の戸に錠を下ろしてしまった。

夜、男やもめの妹は、新しく迎え入れた「兄嫁」を歓迎して側に横たわり、親切を尽くした。

そんな有様で、兄嫁に代わって捕らえられてきた若者がじっとしていられるわけがなかった。

とうとうこらえきれなくなった彼は、娘をぐいと抱き寄せた。

びっくりした娘は、目を白黒させてあがいたが、もはや後の祭りで、わが身を任せることになってしまった。

かくして男やもめのもくろみは水泡に帰し、妹を女やもめの義弟に与える始末になった。

淑女岩

笠松を見てから浦下川に沿って４キロほどさかのぼると、右側の山の中腹に淑女岩が立っている。

高さ20メートルの独りぽつんと立っている岩は、すらりとした朝鮮女性の姿をかたどったかのようである。

子母岩

淑女岩の上方300メートルほどの所に今一つの岩が現れるが、これが子母岩である。母親がわが子を抱いているようだとしてこの名がある。

子母岩を見て、さらに浦下川に沿ってしばらく上がると寒三浦に至る。

展望峰

展望峰は、寒三浦の北側の山並みにある小峰で、この峰に立つと、四方に立つ奇岩を一望のもとに収めることができる。

展望峰に登る途中まず目に付くのは奇妙な形の役者岩である。

役者岩

寒三浦北側の展望峰の尾根に沿って２キロほど上がっていくと、役者岩が立っている。

松や低木の茂る山の中腹に突き出ている、高さ20メートルを超える役者岩は、笠をかぶった男が踊っているような姿をしている。

僧 岩

展望峰の西側近くに見えるこの僧岩は、松林の中に独りぽつんと立っている。

両手を合わせて静かに立っている姿は、僧が念仏を唱えているかのようであるが、これには女色に迷った若僧についての伝説がある。

［伝 説］

女色に迷った若い僧

開心寺のある若い僧が、寺参りに訪れたある女と密通し、そのあと考えてみると、五戒を犯したことが取り返しのつかぬ大きな過ちであったとして悶々とし、もはや寺にはいられないとして飛び出した。

ふらふらとこの辺りにやって来た僧は、山水の風景がなんという美しさだろうかと感嘆し、ここへ寺を建てて釈迦を祭り、わが罪行

を贖罪しようと思い立った。

けれども閻魔大王が自分の罪を見逃さず、きっと地獄に落とすだろうと考えた。

途方に暮れた僧は、どうやって罪ほろぼしをしたものかと悩んでいるうちに石に固まってしまったという。

二仙岩

二仙岩は、二人の神仙の気概を示すという意味で名づけられた巨大な岩である。

二仙岩区域の西北方に天を突かんばかりに高くそそり立つこの岩は、雄壮かつ奇異という点では、内七宝の第一だと言えよう。

群仙岩

群仙岩は二仙岩に続いて山並みの端ににょきにょき群がり立つ岩の総称である。

内七宝万物相の景観に魅せられた天女たちが美しく着飾ってわれもわれもと降りてきて、二仙岩の前で歌い踊っているかのような風景である。

群仙岩の一番前の岩は子細に見ると、前髪はチョクトリ（花嫁の髪飾り）を付けた女のようで、チョクトリ岩と呼んでいる。

昔、ある仙女（天女）が嫁入りを前にして結婚衣装をまとっている時、天女たちが大勢七宝山の見物に行くと聞いて、この素晴らしい機会を逃してなるものかと、婚礼を先に延ばし、結婚衣装を着替えもせず、天女たちの先頭に立って七宝山に降りてきたとか。

神仙岩

神仙岩は、二仙岩や群仙岩の上側に人形のような姿をして立っている大きな岩で、天界の神仙が万物相に降り立ち、歌い踊っている天女たちを満足げに眺めているようだとしてこの名がある。

［伝　説］

天男天女と共に石となって固まった神仙

天上界に住む天男、天女たちが景色のよい地を見つけようと地上の世界を見回したところ、七宝山がとても素晴らしく、みんなの気に入った。

彼らは、こんなにも美しい土地があるとはと感嘆し、今までそれに気づかなかったことが惜しまれるとしながら、七宝山に降り、歳月の流れも忘れて毎日を楽しんだ。

そうと知った天帝は激怒し、腹心の神仙を七宝山に派遣した。早く天男、天女たちを見つけ出して連れ戻せと。

天帝の命で七宝山に降り立った神仙は、秀麗を極めた山の諸所に、目を奪わんばかりに競い立つ奇岩怪石に気を引かれ、歩みを移せないほどである。彼は天帝の厳命を忘れて七宝山を見て回った。

そのうちに万物相のこの地で天男、天女たちに巡り合った。彼は言った。

「天帝がお待ちだから、ここで３日だけもっと遊んでから帰ることにしよう」

しかし、日ごとに新しい様相を見せる七宝山の恍惚たる景観に、彼と天男、天女は約束を３カ月、３年と延ばしてしまい、その３年が過ぎてもまた日を延ばして、結局七宝山にそのまま居つき、やがてみな石に固まってしまったという。

郎君岩、新妻岩

郎君岩と新妻岩は北側の世尊峰から伸びる尾根と平行に走っている西側の尾根の上部に立つ岩である。

上側にある郎君岩はやせた男さながらにほっそりとして背が高く、下側の新妻岩は胸が大きく膨らみ、大柄であるが頭は小さく見える。

これらの岩には、ある美男美女についての伝説がある。

［伝 説］

岩になった若い夫婦

昔、世尊峰の山並みにある鷹峰嶺の麓の原洞村に住むある家で、可愛い男の子が生まれた。

その子は七宝山の清い水と澄んだ空気に恵まれて、すくすくと丈夫に育った。

歳月が流れて、彼は容貌の秀でた若者に成長した。両親は、海七宝の村に住む心の優しい美貌の娘を選んで嫁に迎えた。

村人たちは、おしどりのように

むつまじい二人に羨望の目を向けていた。

新婚の二人は、山へ山菜を摘み、きのこを取りに行く時も手を取り合って行き、野良仕事の時も一緒だった。夜は夜で、男は愛妻が誰かに奪われはしまいかと恐れているかのように妻を強く抱きしめて寝ていた。

蜜月の日々は流れて数カ月が過ぎた。

新妻は、夫の体が目に余るほどやつれていくことに気づき、心配の余り姑に打ち明けたところ、毎晩抱き合って寝ているせいに違いないと言う。

夫を深く愛している彼女は考えあぐねた末、姑の許しを得て、数カ月夫と離れて暮らすことにし、村の東側の谷間に小屋を建てて隠れてしまった。

ところが、何日も経たずにどうやって知ったのか、夫が小屋に姿を現した。

「君なしにはいっときとして生きていられん。ぐずぐずしないで一緒に家へ帰ろう」

妻は切々と訴えるように言った。

「ねえ、あなたのやつれようはただことじゃないのよ。あんまり度を越して倒れてしまったら、あたしはどうなりますの。ちょっとばかしがまんして気力を取り戻したら一緒にすごしましょうね」

妻の切なげな言葉にも夫は心を動かさず、冷たい目を向け、怒りをこめて言い放った。

「くそっ、それじゃもう何も言うことはない」

こう言い捨てて腹立ちまぎれに山の上をめがけて登っていったが、途中、石となって固まってしまった。

一方妻は、自分の気持ちをちっとも理解してくれないのが悲しくもあり、ひるがえり夫の愛情をむげに退けたわが行為が悔やまれもし、夫なしにどう生きていけようかと、目を固く閉じたまま絶命して、岩に固まってしまった。

こうして二人は、死んだ後も愛の岩となってそこにいつまでも立っているのである。

外七宝

外七宝は、内七宝を後にして外七宝橋を渡り、海岸に向かう途中に広がっている名勝地域である。

外七宝は興味津々たる情趣に満ちた内七宝とは異なり、全般的に大造りで、雄壮にして力強く、闊達かつ開放的な男性的美が表出された絶勝の地域だという評を得ている。

外七宝はその地域と探勝コースの違いにより、将帥峰区域、万物相区域、露積峰区域、徳谷区域、降仙門区域、黄津温泉区域、多瀑洞区域に分かれており、明川郡の仙岩区域、明間（ミョンガン）郡の竜淵区域などの開発も予定されている。

外七宝の中心だと言える跳躍台には亭があり、ここには望遠鏡が備え付けられていて、万物相の景観を詳細に味わうことができる。

外七宝の名勝区域を探勝するには、内七宝の内元区域を見た後、まず将帥峰区域から始めるコースと、逆に海七宝を先に見た後、多瀑洞区域から基本観光道路に沿って順に見物するコースがある。

将帥峰区域

将帥峰区域は将帥峰と猛獣峰の南側に広がる名勝区域で、深原谷と可田谷がこの区域に属する。

将帥峰区域では深原谷を除くほぼすべての奇岩、名所を観光道路から眺めることができる。

内七宝の内元区域を後にして内元橋を渡ると、外七宝の将帥峰区域が始まる。

偉人峰

偉人峰は将帥峰区域の中心の北側にそびえる岩石の峰である。

松林の上方にぐっとそびえる岩石の高さは60メートルにもなる。

偉人峰を深原谷の中心部から眺めると、白頭（ペクトゥ）山の正日峰を望見するような趣である。

鷲 峰

鷲峰は深原谷の入り口にそそり立つ岩石の峰である。

岩々が柱のようにそびえ立ち、

鷲 峰

鷲がこの峰の絶壁上に巣くっているとして古くから鷲峰と呼ばれている。

仙王峰

仙王峰は深原谷中心部の西側にそびえ立ち、山に棲むけものさえ踏んで立つことが難しいほど頂上が鋭利な切り岸を形づくっている。

仙王峰の南側の麓には、古くから名の知られた剛力窟と剛力泉がある。

仙王峰の麓に沿って歩いていると、どこかで水の流れる音がする。ところが、そのどこにもせせらぎほどの谷川も見当たらないのである。

そこで、耳を澄まして水音のする方へ進んで行くと、小さな岩窟が目に付く。水音はこの洞の中から聞こえているのである。この洞が剛力窟である。

卵のような形態の洞の左側の天井から腕ほどの太さの水がどくどく流れ落ちているのであるが、その大量の水が床にいくらか溜まるだけで、目によく付かないほどの壁の隙間にほとんどが吸い込まれて消えてしまうのである。この水

剛 力 窟

が剛力泉であるが、それらは秘密の洞、秘密の泉だと言うにふさわしい。

剛力窟と剛力泉という名のいわれは、昔深原谷に住むある若者がこの洞に居を移して毎日その泉水を飲んでいるうちに非常に力がつき、体も大きく頑丈になって、剛力とうたわれるようになったということにある。

深原谷

深原谷は深原橋の手前左側にある谷で、宝村川の流れる谷伝いに進んで行くと、峰々や岩石を左右に望見できる。

深原谷の奥の仙王峰北側の裾には万景の滝と多段の滝があり、深原谷の右側には洞城岩と奥寂窟がある。

万景の滝と多段の滝

仙王峰の裾をくねり流れる渓流をさかのぼり、300メートルほど谷の奥に入ると万景の滝がある。高さは９メートルである。

万景の滝からさらに２キロほど進むと、段々式に落ちる多段の滝に至る。石段のような岩の上から幾つもの層をなして落ちる滝の周辺にはカエデが茂り、滝の風景を一段と美しく彩っている。

洞城岩と奥寂窟

深原谷に伸びる観光道路を３キロほど進むと、道の右側の山の尾根に、壁を巡らしたかのような岩が南北に高く続いている。あたかも村の回りに巡らした囲いを彷彿させるとして洞城岩と呼んでいる。

洞城岩に立つと松が広い面積にわたって茂っており、その茂みの中にあまり人の目に付かない洞がある。奥寂窟と呼ばれている洞である。

将帥峰

将帥峰は将帥峰区域の東側にそびえる峰で、高さは346メートルである。

うっそうたる松の茂みに支えられているかのような将帥峰は、峰の上に峰が、岩石の上に岩石が重なり、勇壮な気象をもって空高くそそり立っている。

その東側には猛獣峰が将帥峰と並んでそびえ立っている。

将帥峰と猛獣峰に挟まれた渓谷には多くの名所があり、観光道路に沿って進むと、それらほとんどの名所を道路上から見ることができる。

乙女岩、総角岩、猫岩

将帥峰の麓に立つこれらの岩はやや距離を置いているが、道路からも同時にはっきりと見える。

外七宝の学校村から可田橋に向かって進むと、道路に沿って流れる川の岸の上に総角（チョンガー）岩がにゅっと立ち、その先100メートルほどの位置に乙女岩が立っている。乙女岩の足もとには娘をじっと見上げている猫岩がある。

乙女岩は雨に濡れたチマの裾をつかみ、雨着を身に着けた格好の、はにかみを含んだ純情な娘のようであり、総角岩の方は穏和な飾り気のない若者が娘におずおず愛を告白しているかのような風情である。

これらの岩の有様があまりにもリアルで、見物人はその場に立ち尽くし岩に目を凝らしては笑いを抑えきれないでいる。

そこには、内元洞の若者と可田村の娘が情を交し合ううちに、石に固まってしまったという伝説がある。

［伝 説］

将帥峰の麓で出会った娘と若者

内元洞の寺子屋の先生の家には、幼くして両親を失い、この家に引き取られ20歳になる歳まで暮らしてきた若者がいた。

彼は夏の間は主家の牛の世話をし、毎日のように草をしょい子一杯に刈って帰り、冬は深い雪をかき分けて一日も欠かさず将帥峰の谷に入り、薪を取ってきていた。

そんな厳しい苦労の中でも、彼を喜ばせていたのは、毎日七宝山の麗しい景色を楽しむことであり、またそれに劣らず可田村に住む鳳任（ポンイム）という娘に思いを寄せ、その姿を描きみたり、言葉は交わせないながらも時に彼女を遠くから見つめる瞬間などであった。

鳳任は幼くして母親を病気で亡くし、男親の手で育てられ、成長してからは父親の世話を焼いて暮らしていた。

そんな彼女も、内元谷の先生の家の若者のたくましくも純朴な姿に接して、ひそかに胸をときめかしていた。

前の年の冬、彼女の父親は激しい咳が続いて家の外へはほとんど出られず、やむなく鳳任が父親に代わり、深い雪をかき分けて山へ入り、柴を取る毎日が続いた。

そんなある日、将帥峰に登り柴の束を大きく作って頭に載せ、山を降りていた鳳任は、足を踏みはずして崖の下に転がり落ち、深い雪の中に埋もれてしまった。

ちょうどその時、内元洞の若者が薪を背負って降りてきていたが、ある崖の下でかすかなうめき声が聞こえた。

見るとそこに柴の束が転がっており、その下の雪が動いていた。

彼は雪を掻き除き、柴の束をかたわらに移して雪に埋もれている人を抱き起こした。

と、若者はあっと驚き、全身がこわばった。

頭や体に付いている雪を払って立ち上がったのは、なんとうら若い娘だったのである。

若者は彼女と目が合った瞬間、胸がどきどきと高鳴った。

「お助けいただいて本当に有難うございます。ところであなたはどちらでお住まいなんでしょうか」

「有難いなんてとんでもない。ともかく大変なことになるところだった。ぼくは内元谷に住んでいるんだ。

この深い山の中で雪に埋もれてしまったらどうなる。君の家には男手がいないのかい」

若者は、娘の柴をしょい子に載せて可田橋まで見送り、柴を彼女の頭に載せてやってから家へ帰った。

こんな出来事があってから、若い二人の胸には消すに消されぬ愛情が芽生え、恋情はつのるばかりであった。

けれども、「男女七歳にして席を同じゅうせず」という封建儒教道徳に縛られて、二人がこっそり会うことさえも、牽牛織女の出会いのように難しいのである。

冬が去り春も過ぎた夏のある日、雨がしとしと降っていた。

そんな時思いがけない出来事が起きて、若者と娘が出会う機会が生じた。

その出来事とは次のようである。

可田村の娘の家には彼女がとても可愛がっている１匹の猫がいた。

雨の降るその日の朝のこと、猫が見えなくなった。早朝、部屋を

出た猫が、飯を盗んで食おうとして台所に忍び込んだネズミが逃げ出すのを発見し、ネズミを追って将帥峰の岩場へ登っていったのである。

鳳任は古びたチマを雨着代わりに肩に掛け、猫を見つけようとして山へ登った。

同じ頃、内元洞の若者は雨にもかかわらず、牛に食わせるカヤを刈るべく将帥峰へ向かった。

丘を登っていた若者は、山の中腹の岩の上に立っている娘を目に止めた。

「チェドギー」という呼び声は確かに鳳任の声である。

「鳳任さん！」

若者は大声で叫んだ。猫を捜し回って疲れていた娘は、その聞き覚えのある声に驚いて振り向いた。

自分の名を呼ぶ声の主が慕って止まない内元谷の若者であると知った娘は、「あら」と小声で叫んだ。

「その間元気だったかい。君に会いたくて会いたくてこの胸がつぶれんばかりだった。

じめじめ雨が降る日だけど、去年の冬のあの日のように、ほかに人影のないこの静かな山の中でまた会えたのは、何かの因縁だね」

若者は愛する彼女を前にして、何から先に話したものかと迷いながらも、どんなに彼女を思い続けたかを告白した。

娘は自分の嬉しくてたまらない心情を打ち明けたかったけれど、若者の熱い告白に圧倒され、気恥ずかしくて、ただ黙ってうつむいていた。

いちずに会いたいと胸を焦がしていた末、こうして愛する人に出会うことができた若い二人の心臓は破裂せんばかりで、全身が火の塊のように熱くほてった。

このようないきさつで内元洞の若者と可田村の娘は、ここ将帥峰の麓で火のような情を交し合ったその姿勢そのままに石に固まってしまった。

若者の告白を聞きながらうっとりしていた幸せなその時、娘をじっと見上げていた猫も石になって固まってしまった。

将帥峰の絶壁の中腹に立つ総角岩と乙女岩、それに猫岩はこのようにして生じたものだという。

兄 弟 岩

兄弟岩

兄弟岩は猛獣峰の南側の尾根に立つ岩石で、丈の異なる二つの岩がくっついて立っている格好は、まさに仲の良い兄弟である。

兄弟岩は、大力の男が他の地にあった岩をわざわざかかえてここへ移したかのようにも思える。

鷹 岩

鷹岩は、可田谷の宝村川の東南側にそびえる岩石の峰である。岩の端が鷹の嘴にそっくりだとしてこの名がある。

万物相区域

外七宝の万物相区域は、万丈峰と門守峰、闕門峰南側の崖を彩る千姿万態の奇岩ならびにそれら周辺の景色を包括している。

万物相は文字通りよろずさまざまの物体の姿を持つ岩や峰に満ちた神秘境を繰り広げている。

万物相区域の観光は、将帥峰区域の見物後じかに当区域に入って

行うか、徳谷区域と露積峰区域を見た後で行う方法、または露積峰区域の６段の滝から新道嶺に通ずる探勝コースを利用して行う方法もある。

迎先岩

観光道路を歩いて万物相区域の入り口を抜けると、道路の右側に巨岩が高々と立っている。

万物相区域を訪れた観光客を案内すべく迎えに出たようだとして迎先岩と名付けられている。

跳躍台

跳躍台は、迎先岩から新道嶺渓谷を1.5キロほどさかのぼった位置にある岩展望台である。

跳躍台は、　屏風の絵さながらに広がる万物相の目を奪わんばかりの景観を一望の下に見晴らすことの出来る、最適の展望台だと言える。

400メートルの断崖の上に大きな岩がひさしのように前方へ突き出ているこの展望台に立って下を見下ろすと、くらくらと目がくらむほどである。

この跳躍台には、七宝山で武芸を修業した娘と若者の伝説がある。

跳 躍 台

［伝 説］

武芸を修業する娘と若者

昔、七宝山の深い樹林の中で小さな山小屋を建てて、善雅（ソンア）という若い娘が男装して武芸を練磨していた。

雲鶴（ウンハク）道士という名で広く知られていた彼女の父親は、ある年、北辺の国境を越えて侵入した敵軍との戦いで勇戦したが、惜しくも戦死した。

善雅は親の敵を討たずにはおかないという一念に燃えて武術の修業に励んだ。

ある日、武芸を修めて国の守りに出で立とうと決心した韓白虎（ハンベクホ）という若者が、雲鶴道士を尋ねていく途中、ここ善雅の山小屋を目に止めて立ち寄った。

娘は彼に自分の名は崔道令（チェドリョン）だと言った。互いに言葉を交わしているうちに、雲鶴道士は今はこの世の人でないと知った韓白虎は、雲鶴道士の弟子だと言う崔道令の指導を受けて武術を修業しようと決心した。こうして崔道令が師となり、韓白虎はその弟子となった。

二人は、千姿万態の奇岩怪石に覆われた七宝山のこの岩からあの岩へと飛び上がる技を磨いたり、斧で岩を砕き、岩に矢を放つなどの武技を練磨し、自らを鍛えていった。

七宝山を駆け巡りながら猛鍛錬を続けた結果、振り下ろす斧の刃に岩は削られ、矢に当たった岩には穴があいた。こうしてこれらの岩は斧鉞岩、鏃穴岩と言われ、二人が飛び移った岩の一つは跳躍台と呼ばれるようになった。

３年もの間共に修練に努めながらも、韓白虎は崔道令が若い女だということに気付かなかった。

一度として自分の小屋に入れてくれず、共にうちとけ楽しい時間を分け合おうとはしない崔道令の行為を不審に思いながらも、まさかこの深い山奥に若い娘が独り住まいをしていようなどとは、夢にも思わなかったのである。いわんや武術や知略はもとより力較べでも遠く及ばない相手ではないか。

崔道令が女性だということを知ったのは、３年後のある年、北方の蛮族が国境を越えて侵入し、横暴の限りを尽くしている時であった。

剛勇の士として自らを鍛え上げた善雅は先鋒長、韓白虎は副先鋒長に任命されて出陣し、勇戦奮闘した。

ある日、敵の大軍に囲まれて苦戦している韓白虎を救うべく、善雅は白刃を振りかざして怒れる獅子のように敵陣に突入し、敵兵を手当たり次第に切り伏せた。

敵軍は総崩れになったが、そんな中で敵兵の放った矢が善雅の胸に突き刺さった。倒れた崔道令の胸板を開いた瞬間、韓白虎は先鋒長が女だと気付き、やがて彼女が雲鶴道士の一人娘であることも知った。

万丈峰

万丈峰は跳躍台の北側にそびえる峰である。

峰の南側は切り立つ絶壁で、その高さが千尋万尋をなすとして万丈峰と呼ばれている。

代表的な奇岩は兜岩、蓮花岩、鳳台岩、竜馬岩、老翁岩である。

老翁岩は、万丈峰の南側の尾根に年老いた男の姿で立っており、これには「わしやいつのまにこんなにも老けたのだろう」と嘆息したという一老人の話がこもっている。

［伝 説］

歳月の流れに気が付かず

昔、20代のある若者が七宝山の景色は格別に素晴らしいという人々の話を聞いて見物にやって来たが、山に踏み入った瞬間からその景観に圧倒された。

そこでひと月ほどの予定で七宝山の探勝を始めた。

彼は天下の絶景に酔いしれて、１カ月はおろか、月日の流れに気付かず、この峰あの峰を繰り返し見て歩いた。見ても見ても峰々の姿は新鮮で、新たな絶景が眼前に繰り広げられるのである。

このようにして過ごしたある年の夏の日、玉のように清い谷川の水を両手ですくって飲み、顔を洗っていた彼は、ふと水面に映った自分の顔を見て、おやっと驚いた。

（一体これはおれの姿に間違いがないのか）

髪は白く、顔には深いしわが寄っている。

（わが家を後にしたのがつい数日前のことだと覚えていたのに、こんなにも歳月が流れたのか）

彼の頭にはわが家で自分を待ち焦がれている愛妻の姿が浮かんだ。けれども今さら家へ帰っても、若い時代を独りわびしく過ごした妻が、老いた自分を喜んで迎え入れてくれるとは思えなかった。

（えいくそ、こうなったからには、ここ七宝山で余生を送るまでだ）

こう決心した老人は、七宝山の名勝を毎日堪能した末、景観の万物相を前にして石に固まってしまった。死後も七宝山の絶景を楽しもうとして。

闕門峰

闕門峰は万丈峰に次ぐ高峰で、万物相区域では高さ787メートルを誇る最高峰である。

峰の東南側から見ると、広い壁面の中間辺りから岩層が同じ厚さで下まで剥ぎ取られたような様相をなしており、それが城門のようで、内側にかんぬきが掛かっている趣だとして闕門峰と称されている。

門守峰

門守峰は闕門峰の南側に立つ岩石の峰で、あたかも闕門峰に抱かれているかのような風情であり、見方によっては闕門峰を守って立つ番兵のようでもある。

雄鶏岩

雄鶏岩は、門守峰の前方に伸びる山並みの中腹にある岩で、今さっき餌を腹一杯食べて止まり木に上っているような趣である。短

雄 鶏 岩

くて太いくちばし、ごわごわ突き立っているとさか、丸く張り出した胸、止まり木につい今しがた垂れたかのような白い糞など、まるで腕利きの彫刻家の作ではないかと、見る人の目を疑わせるほどである。

雄鶏岩の少し先の下方に鷹背岩が立っている。鋭いくちばしの形はまさしく鷹のそれである。

鏃穴岩

雄鶏岩の下にある岩で、その表面には無数の穴がある。これらの穴は伝説中の韓白虎なる若者が弓矢の練習で付けた穴だとして、岩の名が鏃穴岩と呼ばれているのである。

実際は、蜂の巣のような穴が無数に出来ているのは、大昔、地底から熔岩が噴き出し、それが冷却しながら出来た気泡の跡である。

鏃 穴 岩

大熊岩と万水泉

大熊岩は闕門峰の裾の新道嶺探勝コースの入り口にある巨岩である。この大熊岩の前に万水泉がある。万物相の地下深くから湧き出る水だとしてこう呼ばれている。

水の湧き出る所は清く澄んでおり、こけに色濃く覆われている。泉水の温度はセ氏10度内外であり、湧出量は秒当たり0.3リットルである。それに、いかに長い日照りが続いても乾くことなく、湧出量は一定している。

［伝 説］

万 水 泉

昔、七宝山に棲むある雌熊が七宝山を狭しとばかりに駆け回った。

熊は谷川の水や泉という泉の水はみな飲んでみたが、万水泉の水の味が格別だった。そこで熊はここに居着いて万水泉の水だけを飲んだ。

そんなわけで熊の腹は水でいっぱいになってしまった。ところがどうしたわけか体まで次第に肥え太り、それにたまらなく雄熊に会いたくなるのをどうすることもできなかった。

さかりのついた雌熊は雄熊のもとへ一目散に駆けて行き、楽しく情を交わした後、泉のほとりに帰って寝そべり、甘い夢を見た。それ以来これが毎日の習わしになった。

水を飲み、逢い引きを楽しむ日を重ねているうちに、雌熊の体はいよいよ大きくなり、しまいには動くことすら苦しくなって、そこに寝そべったまま石に固まってしまったとやら。

将軍峰

将軍峰は、跳躍台から眺めると闕門峰の次に目に入る峰で、万物相区域第２の高峰である。

将軍峰の名は、この峰に将軍岩があることに由来している。

将 軍 峰

昇天峰

跳躍台からは将軍峰の次に見える峰で、昔天女たちがここから天上に昇って帰ったとして、昇天峰と呼ばれている。

昇天峰の南側の麓から頂に向かってはしごのような格好の昇天台が高々と立っており、岩面が上から下までずっと平らに伸びている。

天女たちは昇天峰の頂に登る時、このはしごを利用したという。

楽仙台

昇天峰の南側に続く尾根に馬の鞍のような形をし、跳躍台に向かって立っている岩である。

楽仙台は、七宝山の景勝に魅せられた天女たちがここへ降りて楽しみ遊んだとして付けられた名である。

楽仙台の北方には天を突かんばかりの高峰闕門峰が将帥峰と並び立ち、闕門峰の番兵とされる門守峰の雄姿も見られる。

こうもり岩

雁 岩

楽仙台の東方、月落峰の尾根に連なる山並みには万物の姿を競う奇岩怪石が列をなしている。その代表的な奇岩は、こうもり岩、毒蛇岩、もぐら岩、子犬岩、鳩岩、雁岩、騎馬岩、角岩、大兎岩などである。

月落峰

月落峰は跳躍台の東側にそびえる峰である。

ここには直径４メートルもの、東西方面に開かれた円形の門が付いているが、これを月出門と呼んでいる。

伝説によると、朝鮮東海に昇った月が、月出門を抜けて月落峰の頂に立ち、他人は見ることのできない万物相の夜景を独り占めにして楽しみ、早暁空が白み始めると、月出門を抜け出し、海辺で眠ったという。この伝説に基づき月落峰、月出門の名が生じたとされている。

月落峰には、天帝や天女と関連した、魚頭岩、仙粉岩、竜床岩、寝床岩、獅子岩などさまざまの岩があって観光客の目を楽しませている。

月落峰の峰

［伝 説］

七宝山に降りてきた天 帝

大昔のある日、天上界の帝王は、毎年のように七宝山を見物していた天女たちの自慢話を聞いているうちに、自分も一度見たいとして七宝山に降りてきた。

月落峰の頂に降りた天帝はそこに置いてある竜床に座り、外七宝万物相の景観に見とれ、そのあまりの素晴らしさに感嘆して明日また見ることにして、獅子を番兵に立てて寝床に就いた。

子の刻もかなり過ぎた深夜、全山を激しく揺さぶるような虎の咆哮がした。驚いて目を覚ました天帝は激怒して、番兵の獅子にあの

虎を直ちに食い殺してしまえと命じた。

獅子は早速虎退治に飛び出したが、七宝山のどこを捜しても虎を見つけることができなかった。

そのうちに天帝は天上に帰ってしまい、残された獅子は石に固まって獅子岩になったという。

その時天帝が座った岩は竜床岩、夜休んだ岩は寝床岩と呼ばれている。

新道嶺

万物相の全景と奇岩を見物した後、東側の樹林の中に足を踏み入れると、牛が初めて拓いたと言われる峠道を登って新道嶺の頂上に立つことができる。ここからは展望が明るく開け、北東方に朝鮮東海と楸津湾（チュジン）の横たわる風景を望見できる。

頂上の西北方50メートル辺りに、100年ほど前にここ樹林の密

竜床岩

生した崖に道を開いた黄津(ファンジン)の人鄭(チョン)尚仁(サンイン)の功績をたたえて建てた新道嶺碑がある。

新道嶺の峠道が拓かれて、黄津の人たちは遠回りすることなく、この峠道を伝って可田洞へ行き来しうるようになった。

ところで、この峠道を真っ先に拓いたのは、実は黄津の住民鄭尚仁が飼っていた雌牛だと言い伝えられている。

［伝 説］

牛が最初に拓いた峠　道

今を去る100数年前のある春の日のこと。

万物相の奇岩や絶壁の際を美しく彩っていた淡紅色のツツジの花も散り、谷川の流れる深い渓谷や山腹はすがすがしい薄緑の木の葉や雑草で絨毯を敷きつめたように覆われていた。

鄭(チョン)老は朝早く朝食を済ませて、雌牛に新緑の草をはませる一方、そり用のながえ材を切って来ようとして雌牛を七仙谷に引いていった。

谷をしばらく上がった所に黄みを帯びた柔らかな草原があった。

「ここでお前は好きなだけ腹一杯青草を食べているのだぞ。わしはその間向こうのクヌギ林でそりのながえ材を切ってくるからな」

それからかなりの時間が経ち、老人は牛はどうしているだろうかと気にかけながら、ながえ材を引いて谷の草原に戻ってきた。

ところが草を食っているはずの牛がどこにも見当たらない。牛を捜して歩いた彼は、尾根に続く崖の中ほどに残っている牛の足跡を見付けた。

老人は牛の足跡をたどり月落峰の北側の尾根を越えて、その西側の谷へ降りた。辺りを見回すと、そこは宝村川の流れる可田村だった。

どこかから牛の荒い息づかいが聞こえたようで、そちらの方へ行ってみると、わが家の雌牛が土手のニオイドロノキにつながれている雄牛とつるんでいるのである。

「ほおー、雄牛のことを思い詰

めてじっとしていられなかったんだな。あの険しい峰を越えてこんな所にまでやって来るとはな」

老人は、雌牛がさかりのついていることに気が付かず、放置していたことを苦笑して、こう呟いた。

彼は岩の上に腰を下ろして煙草を吹かしながら、牛どもが一件を終えるのを待った。

「物言わぬ牛も霊物だわい。

どうして可田村へ越えてくる近道を知り、それにこの村に雄牛がいることまで分かったのだろうか。あの雌牛の知恵はただのものじゃないわ」

キセルを岩に打って灰を落とした老人は、交尾を終えた雌牛を先立たせて、元来た尾根を越えて帰ることにした。

雌牛は、万物相東側の谷と月落峰の尾根が落ち合う辺りに付いたわが足跡をたどり、道を少しも違えずに峠を越えて歩いた。

そんな雌牛をじっと見つめていた老人の脳裏にふとある考えがひらめいた。

（ふうむ、牛が人間よりはるかに優れた知恵を働かせている。

あの雌牛が初めて歩いた足跡をたどって道を付けたら、可田や黄津の村人たちは互いに行き来する際に海辺の宝村を経て遠回りして歩かないで済むばかりでなく、パクタル嶺を越えて黄津にやって来る人や市場に通う黄津の人たちも大変便利になる）

鄭老は家族にも告げず、一人で七仙谷から月落峰北側の尾根に至る険しい崖に峠道を作ろうとして、毎日のように山へ登った。

村人のことを思い近道を作ろうとしてただ一人大変な苦労を続けていることを知った村の長老は、その老人の善行を口を極めてたたえ、明日のうちに種まきを済ませて、全村が道造りに総動員するよう手配した。

すると峰の向こうの可田村の人たちもこのことを知って道造りに乗り出した。

こうして両村の人たちがそれぞれの側から道を拓いていき、ひと月足らずで峠道は出来上がった。

道普請を終えた両村の人たちは峠の上で寄り合いを持ち、この道

を拓く上で先駆者の役割を果たした鄭老を一様にたたえ、峠道と峠の名をどう付けたら良いか、案を出してもらえないかと言った。

「いやいや、そんなに褒められては困りますよ。

褒めるならうちの牛を褒めてやって下され。実はこの道を拓けとわしに教えたのは、わしんちの雌牛ですわい」

こう言った鄭老は、この峠の名は、新たに近道を造って出来た峠だという意味で新道嶺とし、峠道の名は峠を越える新しい近道だから新嶺道だとしてはいかがだろうかと自分の考えを語った。

人々は鄭老の意見はもっともだとして、みんな賛成した。

こうして新しく出来た峠と峠道の名はそれぞれ新道嶺、新嶺道と呼ばれるようになった。そして大きな山並みを挟んで遠方の地の人としてそれまで別に付き合いのなかった可田と黄津の住民は互いに近しい隣村の人間として親戚付き合いをするようになった。

石陵峰

石陵峰は将帥峰区域の近くの観光道路右側にそびえる峰である。

代表的な奇岩は、鳳栖岩、偶蹄岩、滑稽岩などである。

鳳栖岩は鳳凰が座っているような形をした岩である。

偶蹄岩は鳳栖岩と観光道路を挟んで右側に広がる青い松林にそり立っている岩で、二股に分かれて10メートル余の高さに伸びているその形が、牛や豚、山羊のひずめとそっくりである。

観光道路を更に進んでいくと、今度は道路の左側にひと目見ただけでも吹き出したくなる滑稽岩がある。

徳谷区域

徳谷区域は新たに開拓された外七宝の名勝区域で、松、クヌギ、ヤマナラシ、オノオレカンバ、カエデなどの樹林で覆われ、左右の山腹に次々に見られる奇岩怪石、谷川の水が作る滝や淵などよろずもろもろの景色が集まっている。言わば水と石、樹林、景色が一つに溶け合った、特色ある外七宝の名勝区域である。

新たに造成された観光道路から駐車場のある徳谷探勝路に至る区間にもさまざまの名所がある。

微温泉

万物相区域から徳谷区域に至る道路の右側にまず見られるなだらかな台地は、つまり10日掛かりで耕せる耕地という意味の土地である。

微温泉はこの十耕田の先の道路左側の偏平な岩の裂け目から湧き出る泉で、温度はセ氏22度である。現在はこのように生ぬるい温泉であるが、以前は50度を超える熱さだったという。

この温泉には次のような伝説がある。

［伝　説］

十耕田の温泉

昔、十耕田村の人たちはみな微温泉の水を飲んでいたが、男は一様に壮健で、女の肌は奇麗だった。

ところがある年洪水に見舞われて温泉が荒らされ、それ以後は冷たい水しか出なくなった。

それに、湧き出し口の中から革手袋のような異物がにゅっと突き立ち、人々は水を汲むのに難渋した。

湯であれ冷水であれ、この泉水を唯一の頼りにしている十耕田の村人たちは、邪魔物を片付けようとして、斧で切りつけたり、のこぎりで挽いたりしたが、一切歯が立たず困り果てていた。

そんな時に一人の女が、あの

変な手袋を燃やしてみたらと言って、わが家からたいまつを持ってきて、それに火を付けようとして当てたところ、革手袋のような怪物は、あっという間にたいまつを鷲づかみにして水中にもぐってしまった。

するど、冷たかった水が元のような温泉になった。

その後いつのことだったか、ある男が夜中に生きている縛った鶏を持ってきて、ひそかに温泉の中へ押し入れて屠畜しようとした。

この時、七宝山を治めている山の神がその有様を見て激怒し、「こやつ、名山のこの名物を汚すとは何事だ」と叫んだ。

思わぬ怒号に仰天した男はあわてて山の茂みに向かって走り出した。

天神は、「やいっ、止まれ。貴様のように手前勝手な腹黒い男は、黒いカラスになってしかるべきだ」と怒鳴り付けた。

と、男はたちまちカラスのような黒い石に変わってしまった。

今もその場には黒っぽい岩が立っており、カラス岩と呼ばれている。

祈願岩

徳谷の入り口から200メートルほど進んだ所の西側に見える山頂の岩で、トゥルマギ（外套）を羽織った男が、両手を胸の前に合わせてつつましやかに立っている姿である。その前には燃え立つ炎のような小さい岩があり、あたかも香をたいて神仏に祈りを捧げているかのような風情だとして、祈願岩と名付けられている。

鶏鳴峰

鶏鳴峰は、祈願岩からさらに1キロほど先の東側に立つ岩石の峰である。

この峰の総体的な姿は醜悪な怪物を彷彿させている。

昔、この頂で鶏が鳴いていたとして鶏鳴峰と呼ばれているが、それを裏付けているかのように麓に雌鶏のような形の岩があり、その前にうわばみに似た岩がある。

これらの岩には、『雌鶏を待つうちに』という童話もどきの昔話がまつわっている。

［伝 説］

雌鶏を待つうちに

昔、徳谷には仲の良い雌鶏と雄鶏が住んでいた。やがてそれらは結婚し、家族を増やそうとして毎日卵を産んだ。ところが20日も経ったのに、どうしたわけか卵は一向に増えず、巣にはいつもその日産んだ１個の卵があるだけだった。

おかしなこともあると思った雌鶏と雄鶏は、一晩中巣を見張った。夜が明けそめる頃、あにはからんや１匹のうわばみが現れて卵を盗んでいくのである。

鶏たちが驚きおどおどするのを尻目に、うわばみは「これまで卵をたんと食べたわい。これからはちょっと待って孵ったひよこを食べることにしよう」とひとりごちて、その機会を待った。

そんなわけで、ともかく一安心した雌鶏と雄鶏は20羽以上ものひよこを育てるほどになった。けれどもその喜びは束の間にすぎず、ある日ひよこたちは１羽残らず姿を隠してしまったのである。

懸命に「ココココ」と声を上げながら捜したが無駄だった。さてはうわばみのしわざに違いないと気付いた雌鶏と雄鶏は住まいをうわばみのいない他所に移すことにし、先に雄鶏が外七宝の万物相へ下検分に出掛けた。

万物相に到着してみると、徳谷とは違い、この世のあらゆる生き物が集まり、みんな仲良く暮らしている。景色もよくて、とても暮らし良きそうだった。

雄鶏はこんな素晴らしい土地を間近にしながらも心配をし淋しく暮らし、それに可愛い子たちまでうわばみに奪われたことが悔やまれて、早く雌鶏を呼んでこようとした。最初から一緒に来たら良かったのにと思いながら、徳谷に向けて「コケコッコー、雌鶏よー　ここがいいぞー。早く上がってくるんだー」と大声で叫んだ。

雄鶏の叫び声を耳にした雌鶏は、「ココココ、行きますよ。ココココ、すぐに行くからちょっとお待ちになってねー」と答えた。

ところがこの時、うわばみが現れ、鎌首をもたげて立ちはだかった。

「じっとしておれ。お前らをみな食べてやろうとしたのに、雄鶏

を逃してしまったわい」

雌鶏は怖れおののき、「ココココ、ココココ」と悲鳴を上げた。

この時、七宝山を治めている山の神がそんな光景を目に止めた。

「狡猾な悪どい野郎め、今こそ貴様をこらしめてやる時だ。天罰を受けるがよい」

すると、にわかに空に稲妻が走り、雷鳴が轟いた。

こうして悪行の限りを尽くしたうわばみは岩に固まってしまった。ところが、うわばみのすぐ前にいた雌鶏もそのあおりで同じく石に変わってしまったのである。

一方、雄鶏の方はそうとも知らず、徳谷からやって来るはずの雌鶏の到着をいつまでも待っているうちに雄鶏岩に固まってしまった。

母性岩

母性岩は鶏鳴峰の少し先の南側の小高い山頂に見える岩である。

背の高い女が乳飲み子を胸に抱いて立ち、チマの裾には少し大きい何人もの子たちがまとわり、一人の子は玩具を持って女のそばで遊んでいるような情景である。

昔、母性岩前の平地で結婚して間もない若い夫婦が暮らしていたが、まだ子がなかった。

夫婦は山上の母性岩を羨ましそうに眺めては、自分たちもあんなに子宝に恵まれ、わが子たちに囲まれて暮らせたらどんなにいいだろうかと考えていた。そんな二人に幸いに初子が生まれた。待ちに待った念願が叶い、若夫婦の喜びはたとえようもなく大きかった。

そんな慶び事があってから年子がつづいて生まれ、子どもたちの数は12人にもなった。こうして二人は母性岩と同様、一生を孫子たちと共に幸せに暮らしたという。

景勝峰

景勝峰は基本観光道路をしばらく進んでいくと、道路のすぐ右側に立つ峰で、頂上は丸みを帯びている。この峰の頂に立つと、徳谷に広がるもろもろの景勝を一望の下に収めることができるとして、この名がある。

ここから眺める奇岩の代表的なものは、俯瞰岩、将軍台、遊戯台、愛童岩、花瓶岩などである。

徳谷探勝路

大型駐車場と小型駐車場の前方に長さ１キロほどの探勝路がある。

探勝路の入り口に立つ岩石には不滅の革命頌歌『金正日将軍の歌』が刻まれている。

ザリガニのはさみ岩

ザリガニのはさみにそっくりな岩で、この谷にザリガニが多いのでザリガニのはさみ岩が出来たのか、それともザリガニのはさみ岩があるためにザリガニが多いのか、ともかく徳谷にはザリガニが多い。

徳谷のザリガニと関係して、しゅうとと嫁の肉片が入れ替わったという滑稽な話が伝わっている。

［伝 説］

入れ替わった肉片

昔、徳谷に息子が成長し、嫁を迎えたばかりの農家があった。しゅうとは嫁を大変可愛がった。

ある年、真夏の蒸し暑さに耐えかねて、嫁は水浴びをすべく、衣服を脱ぎ捨てるや谷川にざぶんと飛び込んだ。

その時、水中の大きな石の下にもぐっていた、数十年も長生きしている臼石ほどもの大ザリガニが驚いて見上げた。

（あれっ、こりゃなんというけものじゃ。ほかのけものはみんな口が横向きについているのに、こいつは口が縦についている。それにひげまでもじゃもじゃ生えているのを見ると、得体の知れない怪物に違いない。あの口に食い付かれたらそれこそお陀仏だ。ここは先手を打つに限るわい）

こう思ったザリガニは大きなはさみを振り上げて彼女のへその下の口をぐいとはさんだ。

女はきゃっと悲鳴を上げ、呻き声をもらし、あわてふためくばかりであった。

家にいて嫁の帰りを待っていたしゅうとは、嫁の悲鳴に驚いて駆け付けてみると、そんな有様である。

（いやはや大変なこっちゃ。嫁をこのまま引き上げたら、あそこに傷が付く。噛み付いているザリガニのはさみを食いちぎるほかない）

こう考えたしゅうとは口を開けて水中に頭を突っ込んだ。

ザリガニは目を大きく見開き、（おやっ、これはまたなんたる口じゃ。真っ白い歯をし、これまたひげを生やしている。この口に噛まれたら元も子もなくなるわい）と思って、今度はいまひとつのはさみで老人の口をぎゅっと挟み、今日は餌がよくかかる日だわいと言って喜んだ。

老人は力を振り絞って嫁を水の外へ放り上げ、自分もやっと這い出した。ところが一緒に上がったザリガニの二つのはさみにはまろやかな肉片が付いていた。

彼は石で叩き付けてザリガニを殺し、二つの肉片を取って、嫁と自分の元の場所にくっつけた。

傷がすっかり治ってから、老人は食事の際トウガラシ味噌を食べたが、普段食べつけているものとは違ってひどく辛い。おかしいと思って嫁に何か異常はないかと尋ねた。すると彼女は、「お父さま、あたし、この頃下の方からきつい煙草の臭いが上がってきて、どうにもたまりません」と言うのである。

この返事にしゅうとは、（ひゃあ、肉片を取り違えてくっつけちゃったのか。とんだことになっちまった）とほぞを噛み、ぼんやり嫁の顔を見つめるばかりだった。

とにかく、そのしっかりくっついた肉片を今さら取り替えるわけにはいかず、ただ我慢して過ごすほかなかった。

将軍岩と敬礼岩

徳谷の探勝コースのうち、ザリガニのはさみ岩に次いで現れる岩である。

剛勇の武士が威風堂々たる姿で腰を降ろしている格好の将軍岩と、その前にやや面を伏せてお辞儀をしている女を思わせる敬礼岩。

それらは、侵略軍との戦いで大功を立て、勝利の凱歌をあげて帰った将軍と、知らせを受けて七宝山に駆けつけて出迎え、お辞儀をする女の姿をリアルに表現している。

徳谷の滝

探勝道路をずっと上がっていくと徳谷の滝に出会う。

この徳谷の滝は、巌壁からなる両渓峰を間に挟んで流れ落ちる二つの滝である。

両渓峰の南側には玉渓の滝が２

上 徳 の 滝

段をなして８メートルの高さから流れ落ち、西側では上徳の滝が白布を垂らしたかのように10メートルの高所から勢いよく落下している。この二つの滝は、合わせて徳谷の滝と呼ばれている。

徳谷の滝の前には木材建築の特色ある玉渓亭が建っている。

歓呼峰

歓呼峰は徳谷の西側に見える峰で、侵略軍を撃退する戦いで大功を立てて故郷に帰った将軍を歓迎しているかのようだとしてこの名がある。

この峰で特に際立つ岩は双指岩と犀岩である。

双指岩は歓呼峰の南側に高くそそり立つ岩で、２本の指を開いて立てているような格好である。

双指岩の二つの岩のうちの一方はがっしりとして太く、その高さは46メートル、今一方の岩の高さは45メートルであるが、地上３メートルほどまではほっそりとし、その上部

双 指 岩

は太くなっている。細い下の部分はなんとも弱々しく、手でちょっと押してもくずおれそうである。

それはさておき、どうして２本の指を開いて立てているのだろうか。徳谷が七宝山第一の景勝とうたわれはしないまでも、第２位は間違いないと誇っているのだろうか。

実際、水と石の作る景色の見事さという点では、多瀑洞の次には徳谷こそが置かれるべきであろう。

犀岩は歓呼峰の南側にあり、その名の通り犀にそっくりそのままである。アフリカ熱帯地方の動物である犀がどうしたわけでここ七宝山にやって来て岩になってしまったのか、なんとも不思議なことである。

隠浦谷

隠浦谷は徳谷の西北側に峰を一つ隔てて並んでいる谷で、北は宝村川、南は山峰、西は筆峰、東は景勝峰によって取り囲まれた景勝の渓谷である。

昔ある僧が道に迷い、ここで休んでいったという道越岩を見てか

鋤 岩

ら谷の中へ入ると、南側の山麓にシャベルを立てたような鋤岩と天秤棒のような形の天秤岩が立っている。

谷の奥へさらに進んで行くと、右側の尾根に高さ10メートルもの老人岩が立っている。岩の面がかさかさしていて、ひどく老いさらばえた年寄りのようである。

仙衣岩

仙衣岩は隠浦谷の奥深くに立つ岩である。

天秤岩の２キロほど先の東側

仙 衣 岩

にある尾根に、輿岩伝説中の新郎が石になったとされる俗人岩があり、その少し先の谷の中央に絶壁さながらにそそり立つ岩が現れるが、これが仙衣岩である。

昔、仙女（天女）たちが、俗世の人があまりやって来ない隠浦谷の玉潭で水浴びをする際、羽衣を脱いでこの岩に掛けたとして、仙衣岩と言われている。

仙衣岩の下方の谷に入ると、５個の岩からなる５兄弟岩がある。

隠浦と玉潭

隠浦と玉潭は、５兄弟岩の先の深い谷間にある滝と淵の名である。

高さ６メートルのこの滝は、谷の非常に深い奥にあって、隠れ滝とも言われている。

隠浦の上方に直径4メートル、深さ7.2メートルの玉潭がある。

上徳５潭

５個の池がそれぞれ30メートル内外の間隔で並んでいる。そ

のどれも直径５メートル、深さ１メートルという規則正しさであり、池をのぞくと、底の岩盤が透けて見えるほど水は清く澄んでいる。

池の周りもすべて岩盤からなり、休息に適している。

ここが黄津七星谷伝説中の５人の仙女が天上から舞い降りて水浴びをしたという上徳５潭である。

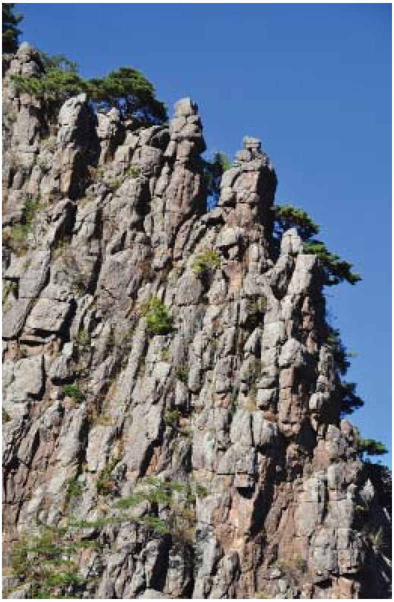
露積峰区域

露積峰区域は北側の五泰峰、南側の宝村川、西側のカササギ峰を境界とし、露積谷に沿って弓なりの区域を形成している外七宝の名勝である。

徳谷区域は基本観光道路の南側に位置しているが、露積峰区域は道路の北側に伸びている。

露積峰区域の岩々は他区域のそれとは違い、すべて花崗岩からなり、岩肌はどれも白っぽいのが特徴である。

この区域は滝の眺めが特異なことでも世に知られている。



露積峰の奇岩怪石

露積峰

露積峰は宝村川の下流、露積谷の入り口に立つ岩石の峰で、高さは57メートルである。

花崗岩からなる峰の岩肌は全面に亀の甲のような亀裂が出来ていて、人々はこの峰の格好が露天に積み上げられた稲叢かと見まがうほどだとして、露積峰と呼んでいる。

露積峰は、花崗岩の肌にそのよ

露 積 峰

うな亀裂が出来た過程ならびに白頭火山帯の地形を研究する上で好個の資料としての大きな意義を持ち、さらには風致の優れた峰として天然記念物に指定され、大事に保護されている。

風回岩

風回岩は露積峰の西側に伸びる尾根に立つ岩で、３個の岩が層をなして、実に妙に重なり合っている。とりわけ、一番上の岩は下部が尖っていて、ちょっと手を触れても転がり落ちそうであり、風がそよ吹いてもくるくる回転しそうだとして、岩の名も風回岩と呼ばれている。

風回岩を遠くから眺めると、人間にそっくりであり、農民が稲叢をもっと高く積み上げてみようとして、腰に手を当てて露積峰を見上げているかのようである。

倉庫岩

倉庫岩は、露積峰の西方へ下っている山並みの100メートルほど先の位置にあり、松の茂る尾根にすっきりと姿を見せている岩が倉のようだとしてこの名がある。

岩の壁で囲まれた倉庫岩の下部に奥行き５メートルほどの洞があり、これを米穀窟と言っている。この名は、露積峰の稲を脱穀してこの洞に保管していたという伝説に基づいている。

２段の滝

２段の滝は、露積峰を後にして露積谷の奥へ２キロほど入った所にある。

秀麗な渓谷の片一方の崖の上から流れ落ちる滝は、広くくぼんだ溝を伝って８メートルほど落下して大きな水がめのような形態の淵をなし、次いでまた８メートルほどの崖を流れ落ちる。

閑静なたたずまいの滝壷のほとりには、カエデや松の木が茂り、それらを映す水は水晶のように清いが、水面はあかね色を帯びている。

巨石の滝

巨石の滝は、２段の滝のさらに１キロほど先にある。

２段の滝の秀麗な眺めを楽しんでから谷の奥へ進むと、渓流をせき止めようとするかのように幾つもの巨石が密集している所があり、それらの岩の下を隠れん坊をしているのか、あちこちに見えたり隠れたりして流れる滝が現れる。

巨岩の下をうねり流れるその有様が特異な趣を呈しているとして、巨石の滝と呼ばれているのである。

６段の滝

６段の滝は、巨石の滝の１キロほど先に見られる。

天空に懸かっているかのような高い崖の上から６段をなして流れ落ち、或いは立ち、或いは臥せて落下する滝の全長は79メートルで、最長のものは25メートル、最短のものは６メートルである。

各段の滝の下にはそれぞれ滝壷があって、露積谷の風致を一段と引き立てている。

水量が特に多い７、８月の雨期に繰り広げられる６段の滝の全体像は壮観を極め、その轟音は全渓谷を揺るがすほどである。

頂上に登ると、深さ３メートルの淵があり、ここに集まった水が６段の滝となって流れ落ちるのである。

鬼面岩

鬼面岩は６段の滝の右側の山腹にある岩の集合体で、ごつごつした岩が固まり合った姿は、総体的に眺めても、またあちこちから一つひとつに目を凝らして見ても怪異そのもので、幽鬼の群れのようだとして鬼面岩の名がある。

一番上にはかさぶたのついているような岩が傾き加減に載っており、そこに丈の低い松の木がぽつんと生えているのも妙というほかない。

降仙門区域

降仙門区域は、東側は宝村里の中心部、北側は長老峰、南側は寺谷、西側は徳谷を境界とする外七宝の名勝である。

降仙門区域は切り立つ層岩絶壁と奇岩が林立する、山岳美の極致を誇る景観の地である。

この区域の名所は概して仰ぎ見るより、高所から見下ろすのによりいっそう適している。

石林峰

石林峰は宝村里機関所在地弦岩村から寺谷へ４キロほど入った所にそびえる岩石の峰である。

さまざまの形態の奇岩や荘厳そのものの、力に満ちた巨岩が競い立ち、岩山の美を誇っている。まるで岩の林だとして石林峰と呼ばれている。

昔、この峰の麓に石林寺という名の寺があったことからこの渓谷は寺谷と称されている。

７谷８陵

７谷８陵は石林峰に形成された７つの渓谷と８つの陵を意味し、石林峰の全容を一つにまとめて呼ぶ語である。

石林峰を観賞する最高の面白みは、峰の頂から見下すことにより満喫できるであろう。

70メートルになんなんとする急傾斜の壁面に200数段の石の階段が設けられていて、１、２、３…数えながら上がっていくと、峰の尾根に立つことができ、さらに峰の頂に登ると南側に形づくられた7谷8陵の全景観を眼下に見下ろすことができる。

奇岩が林立する尾根に並ぶ各陵の幅は20～30メートル、それらに挟まれた谷間の幅はそれぞれ100メートル内外であり、７谷８陵の全長は１キロほどである。

陵の平均の高さは谷底から計ると500メートルであり、陵の斜面の傾斜角はおしなべて、谷底から400メートルまでは60度内外、その上部は80度程度である。それら急傾斜の陵はすべて滑らかな肌を

持つ岩石からなっている。

夏の雨季ともなると、７つの渓谷に伏せ滝が負けず劣らずと轟々と流れ落ち、霧が立ち昇りたなびく時、その上方に浮かび上がる８陵の奇岩怪石は、この世の恍惚境の粋をなすと言うにふさわしい。

これら８陵の一つひとつは奇々怪々たる岩々のゆえにそれぞれ特異の風光を競い、互いに自らを誇っているかのようである。

頭の大きい魚の軍団よろしく並び立つ第１陵のホンチ岩、羊の頭やけものの群れがつどい集まっている風の第２陵の獣羊岩、第３陵のフグ岩、第４陵のタラと熊からなっているような魚熊岩、これらすべての岩が群れをなし、尾根に沿って峰に登っているかのような風姿である。

第５陵と第６陵の特異な風光の見どころは、無数の旗幟が風にはためいて前進しているかのような旗幟岩と、鋸歯のように先の尖っ

熊 岩

た岩の群れが繰り返し続く僧列岩である。

第６陵に次ぐ第７陵のすぐ近くに巨大な岩の門である降仙門が立っている。

第７陵には巨岩が群れをなして立ち、第８陵には１列になって先を競い、前進するカレイのような岩々が続く奇異な風景も見られる。

７谷８陵の最後の位置に亀岩と、そして鈍重そうな熊岩が立っている。

以上のように７谷８陵の奇岩怪石をすべて見終わると、荘厳そのものの、力に満ちた石林峰こそ文字通り奇岩の茂みに覆われた名にし負う景観の峰だとして誰もが感懐を新たにするのである。

石林峰の東側につづく尾根には、いろいろなけものの模様をなしているとして、獣岩と呼ばれる巨岩があり、ここから東の方を眺めると、フクロウがこちらに向かって座っているような岩と、その後ろにリスが誇らしげにしっぽを立てている風の岩が見える。さらにその次に狐が這っているような姿の岩があるが、その格好は狡猾でよこしまな狐がおのれの本性をそのままさらけ出しているかのようである。

獣岩の先の北側に見える尾根には、石林峰の７谷８陵を横に眺めながら降仙門に向かう人たちの群れのようだとして名づけられた登山岩がある。

降仙門と降仙橋

降仙門と降仙橋は７谷８陵の第６陵と第７陵の間にある岩である。

大きさと形、秀麗さという点で特異な降仙門は、昔、天女たちが七宝山に舞い降りて通過した門だとされている。降仙門の上部にはアーチ形の、幅３～５メートルの岩の橋があるが、天女たちがこれを渡って降りたとして降仙橋と言われている。

降仙橋に上がる道は降仙門の西側についており、岩をつかみつかみ降仙門の上に登って降仙橋に立つと、門の下方の底知れない懸崖

降 仙 門

に目がくらくらし、よほど気丈な人でないと長くは立っていられないほどである。

ともあれ、雲霧のたなびく７谷８陵の降仙橋に立っていると、高い天空から下界を見下ろす天女、天男のような気分にひたれるであろう。

降仙橋からは、はるか遠くの浦下と橋前の沖を望見できる。

多瀑洞区域

多瀑洞区域は、外七宝の最南端を占める名勝で、東側は海七宝、北側は消日嶺、南側は三渓峰によって囲まれた七宝山の渓谷美を代表する区域である。

この名勝区域は滝でなければ淵、淵でなければ滝だと言えるほど、全渓谷が滝と淵で占められて、その名も多瀑洞であるが、それら多くの滝と淵の姿はそれぞれ独自の模様と美しさを誇っている。

実によろずの水の造化の妙が一つの谷に集合したと言える滝と淵、奇岩とうっそうたる樹林が見事に調和した谷の秀麗の美は、確かに七宝山の渓谷美を代表していると言ってよい。

それにこの区域の谷川のいずこにも偏平な岩が敷かれていて、それぞれ格好の休息場、遊戯場となっている。

この区域は大まかに言って、竜

沼谷と雲満台谷の二つの名所からなっている。

多瀑洞への道は二通りで、その一つは浦下里の古津波止場で遊覧船に乗り、満月台で降りて竜沼谷に入っていくコースであり、今一つは古津波止場から西南方の消日嶺を越えて竜沼谷に至るコースである。

竜沼台と竜沼の滝、竜沼

竜沼台と竜沼の滝、竜沼は、雲満台西側の渓谷である竜沼谷にある岩と滝、淵である。ここに竜が棲んでいる深い淵（滝壷）があるとしてこれらの名がある。

雲満台から竜沼谷に入って２キロほど進むと、谷の左右に低い山が重なり合い、丸々とした大小の石の間をぬって水が流れている。

ここから左側の尾根に登る道を少しばかり上がった所に竜沼台がある。

竜沼台の周辺は全面が偏平な岩からなっており、上方の谷から流れてきた水は、この偏平な岩の上に集まり、その一端から滝となって落下している。これが竜沼の滝である。

この滝の下に、古くから名所として知られている滝壷竜沼がある。

この滝壷は舟のような形をしており、深さは８メートルである。

七宝山中の最大の滝だと言える竜沼の滝は、全渓谷を揺るがす轟音と、岩の上端を巻き込んで落下

竜沼の滝

しつつも、天空へ飛翔しようとする竜の姿が描き出されていると見まがう太い水の柱に、人々は耳を聾せられ、目は恍惚として見ほれるのである。

しかも、その下の滝壷に落下し、るつぼの鉄湯が煮えたぎっているかのような濃緑の水中には、間違いなく竜が棲んでいるに違いないという錯覚に人々はとらわれ、陶然とする。

滝の周りの巌壁の裂け目には、クヌギ、カエデ、クロフネツツジその他いろいろの低木が根を下ろして滝に彩りを添え、見る人の目を楽しませているが、とりわけ赤いもみじが渓谷を覆う秋の風景はたとえようもなく美しい。

この竜沼台と滝壷竜沼には、その昔、継母の姦計で不幸な死に追いやられた幼い兄弟が邪悪な継母に復讐したという伝説がこもっている。

［伝 説］

邪悪な継母に復讐した兄弟

昔、竜沼谷に若い夫婦が暮らしていた。

盧斗七（ロ ドゥチル）という名の夫は、温和な世慣れていない若者だった。

妻も気立てが優しく、夫に誠実な女であった。

若い夫婦は共に仕事熱心で、３部屋の新居を建てて住み、野良仕事に励んだ。

二人は男の子と女の子に恵まれ、勤勉な労働のおかげで食べ物に不足するようなことはなかった。

一日の仕事を終えて帰ると、幼子たちの愛らしい様子に見惚れ、一緒に遊んで時間を過ごすのがまたとない楽しみであり、喜びだった。

そうしたある年、末っ子が五つの歳を迎えて間もない時に、真面目で福々しい顔立ちの妻が原因の知れない病気にかかり、次第に痩せ細った末に世を去った。

若い夫はその後１年ほど、死別した妻をなつかしみ、母親を亡くしてしょんぼりしている二人の哀

れな子たちの様子を眺めては、涙でほおを濡らしていた。

ところが翌年の春、姉の紹介で、花台の上岩村に住む若後家を後妻に迎えてからは、すっかり変わった人間になってしまった。

後妻を迎えてから、彼は母親を亡くした哀れなわが子たちに肉親の情を注ぎ保護すべき立場を喪失し、まま父同然になってしまった。

温和な盧斗七に嫁いだ後妻は、心のねじけた悪賢い女だった。最初の半年ほどは、まま子たちを目に入れても痛くないとでもいう風な可愛がりようだった。

ところがその半年ほど後からは、二人の兄弟を邪魔者扱いし、夕方野良仕事から帰ったお人好しの夫に有りもしない嘘をあれこれと言い立てては、本当に困っていると泣き言を並べ始めた。その言葉を真に受けた夫は、いつも子供たちを叱り飛ばすのが日常の出来事となった。

毒蛇のような悪どい後妻は、自分の言いなりになる愚かな夫のにぶい目を利用して、まま子たちを亡き者にしてしまおうという怖ろしい姦計を練り始めた。

蒸し暑い夏のある日、沐浴をさせてやると言って兄弟を海岸に連れ出した女は、子どもたちを深い海の中に引いていき、二人の髪の毛をつかみ、頭を海中に押し入れて殺そうとした。

この時、置網を引き上げるべく漁民たちが舟に乗って近づくのを見た女は何食わぬ顔をして、子どもたちの背中を洗ってやっているように見せかけた。

謀殺に失敗した女は、その数日後、男の子をかめの中へ押し入れて飢え死にさせようとした。

悪賢い継母は、「ねえ、納屋にあるかめに米を入れて置こうと思うんだけど、どんなに大きいかはっきり分かんないの。で、お前が中へ入ってちょっと見てくれないか」ともっともらしく言って、男の子をかめの中へ押し込めた。

ところがこの時、庭に入ってきた隣家の老婆が、「あら、この家の納屋の中から子どもの泣き声がしている。男の子が納屋に入っているんじゃないのかな」と言うのを聞いた女は、ぎょっとしてひそかに男の子をかめから引き出した。

翌年の春、邪悪なまま母は、兄

弟を人々があまりやって来ない竜沼に沈めて殺してしまおうという怖ろしい計画を立てた。

「ねえ、今日は竜沼谷へ行って山菜を摘み、ツツジの花も折ってきて、お父さんを喜ばせようよ」

兄と妹は継母が、また何か恐ろしいことを企てているようだと思い、ぞっとしたが、そのがなり立てる怒声やむちに打たれるのが怖くて、彼女の後について山へ登った。

竜沼のある崖の上からは絹布を垂らしたかのような壮快な滝が轟音を上げて落下し、崖の縁には淡紅色のツツジの花が奇麗に咲いていた。

崖に上がった継母は子どもたちに崖ぶちのツツジの花を折ってくるようにと言った。

兄と妹は、毒を含んだ継母の恐ろしい目が怖くて、言い付けられた通り、ツツジの花を折ってこようとして、おそるおそる足を少しずつずらしながら崖のふちまで進んだ。

とその時、後からついてきた継母が子どもたちの背中を力一杯押した。兄と妹はあっという間に高い絶壁の下の滝壺に落ちて絶命した。

夕方、女は、野良仕事から帰った夫が庭に入るのを見て飛び出し、まことしやかに嘘八百を並べ立てた。

「ああ、あんた！　今日山菜を摘みに竜沼谷へ行ったんだけど、不意に虎に襲われ子どもたちをさらわれたの。アイゴー…

あの恐ろしい虎は情け容赦もなしに子どもたちをくわえて…。あたし一人こんなに生き残っちゃって…。あんたになんとも合わせる顔がありません。アイゴー…」

「ふうむ、なんてこった…。子どもたちが虎の餌食になるなんて、胸がつぶれそうだ、まったく…。けれどもなあ、山の神がそうはからったんなら、運命とあきらめるほかない。いずれ子どもはまた授かるだろうからな。お前だけでも命拾いしたのは不幸中の幸いだ」

こうして毒蛇のような女は、邪魔な子たちがいなくなったことを喜び、毎日楽しそうに鼻歌を歌い、夫の前ではあだっぽく振る舞って、こびへつらった。愚昧な盧斗七はこの悪賢い後妻の嬌態に我を忘れ、前妻の残していった二人

の哀れな子たちのことをすっかり忘れてしまった。

一方、竜沼で泳ぎたわむれていた竜宮の王子が、不意に落ちてきた二人の子を哀れみ、背中におぶって竜宮に帰った。

二人から、悪逆な継母の手に掛かって殺されたと聞いた竜王はいたく同情し、兄と妹を天界へ送ることにした。

兄弟は魚の衣服を着せられ、竜宮で７年ほど楽しい日々を過ごした。黒い雨雲が低く垂れ込め、激しい暴風が荒れ狂い雷鳴が轟くある夏の日、二人はそれぞれ青竜と黄竜になって昇天した。

青竜と黄竜に姿を変えた兄弟は、天界で雲に乗り、地上の世界をいつも見下ろしながら、悪魔のような継母に復讐をせずにはおかないと思い続けた。

７月７日たなばたの日の夕方、お世辞上手の継母は、「今日は牽牛と織女が１年ぶりに、天の川にカササギが渡した烏鵲橋で会う日なのですから、あたしたちも海へ出て舟遊びをしましょうよ」と言って、夫を雲満台前の海に誘った。

青竜と黄竜になった兄と妹は、雲に乗り、思い出の深い故郷の地を見下ろしているうちに、舟の上でたわむれる継母と愚昧な父親を発見した。

父親を哀れむ気持ちはなくはなかったが、二人は風を呼び、雲を垂れ、雷鳴を轟かせて、舟を荒波に巻き込み海底深く沈めてしまった。

このように復讐し、継母を溺死させたものの、兄弟の恨みは晴れなかった。

二人は、あまりにも早く自分たちを世に残してなくなった母親を懐かしむ一方、悪どい継母と、まま父になりはてた父親への恨みを癒し難く、雲満台の上空にいつまでも留まっていた。

後世の人たちは、雲満台にひっきりなしに海霧が立ち、舞水端沖に激しく波が荒れるのは、哀れな死を遂げた兄弟の怨恨が消えやらずに残っているからだろうとも解釈している。

飲鹿潭

竜沼から50メートルほど先の谷川に、ハート型の綺麗に澄んだ淵がある。これが古来一つがいの鹿がやって来ては水を飲んだという

飲鹿潭である。

崖に取り囲まれてひっそりと水をたたえているこの淵の深さは3.4メートル、広さは100平方メートルほどである。

淵の上にはやや湾曲した崖が立ち、その上から流れ落ちる水は、崖の中ほどに突き出ている尖った岩にぶつかり、傘のような模様の伏せ滝となって淵に注ぎ込む。

錦織の滝

谷沿いに120メートルほど入ると、左側に枝分かれしている今一つの小さい谷があり、その谷を少し上がると、谷の際に立ちはだかる高さ９メートルの崖の上から落ちる滝に出会う。

その下の滝壺の深さは４メートルである。これが錦織の滝である。

錦織の滝の50メートルほど先には、高さ16メートルの滝がある。この滝は６メートルの伏せ滝と10メートルの垂直の滝からなっており、伏せ滝が岩肌を伝って流れる水は銀の糸を広げたような模様であり、直立した滝は銀の柱を立てたような趣である。

谷をさらに100メートルほど進むと、今度は高さ12メートルの崖の上から落下する滝に出会う。滝の落下する様子があたかも空から落ちるひょうのようだとして、これは天雨の滝と呼ばれている。

７、８月の雨期ともなれば、水は大量に膨れ上がり、滝の音は雷鳴のように轟き、全渓谷を揺るがす。

これら三つの滝を合わせて錦織の滝と称しもしている。と言うのは、一番上の滝の水は広げた無数の糸のようであり、その次の滝は平組みの糸のようであり、一番下の滝の水は織り上がった絹布のようで、それらが一続きの紡織工程を思わせると見たからである。

２段の滝と繍簾潭

２段の滝と繍簾潭は竜沼谷の基本の渓谷にある滝と淵である。

谷川の合流点から基本の谷の奥

へ100メートルほど進むと、傾斜した偏平な岩の上に形態と大きさのよく似た二つの伏せ滝と滝壷に出会う。

うっそうと生い茂った樹林を背景にした、それぞれ高さ８メートルと10メートルの伏せ滝と、深さ３メートルと4.2メートルの滝壷がそれである。

この二つの滝は、さして高くはないが、長い歳月水に洗われてすべすべした岩肌を伝って薄く滑り落ちる清水の模様は、あたかも絹糸で編んだすだれのようであり、それで、その下の滝壷を繍簾潭と呼んでいる。

実に２列をなして流れ落ちる伏せ滝の全景は、軽く垂らした薄い絹布を青い滝壷にひたして染めているかのような趣である。

竜穿岩

竜穿岩は、上竜の滝と50メートルほど先の左側の尾根の上に突き出ている岩である。昔、白竜潭でさまざまの術と力を鍛えた１匹の竜が、あまりにもせっかちに天に昇ろうとして、この岩に頭をぶっつけて穴が開いてしまった。こうして、その岩は竜穿岩と呼ばれるようになった。

雲満の滝

雲満の滝は、多瀑洞の南側に立つ峠の向こう側にある。

33メートルの高さからまっさかさまに落下する滝は、下の平らな岩に勢いよくぶつかり、特異な音を立てている。

笹の群落

雲満台には青々とした笹の群落が広がっている。昔から人々はこの群落の笹を用いて、矢や筆の柄、釣り竿その他いろいろな細工物を作って利用した。

夏、広く青々とした海原のような群落の風にそよぐ有様は見事である。

雲満台の笹の群落は、朝鮮における竹類の最北限の境界域に密生していることで、学術研究の価値

が大きく、観賞植物としても優れていることから天然記念物に指定されている。

消日嶺

消日嶺は多瀑洞区域の北側にそそり立つ、標高431メートルの嶺である。

昔から、海辺の方から多瀑洞に入るには消日嶺を越えていくほかなかった。

ところで、北側の浦下里から嶺を往復する場合は丸１日をかけるほかない。それで嶺の名も消日嶺と呼ばれているのである。

［伝 説］

郡守の笠に落ちた 馬 糞

昔の夏のある日、当地の郡守（郡の長官）が多瀑洞の錦織の滝の見物に出掛けた。馬にまたがり馬丁を従えて偉ぶりながら消日嶺の麓に着いたが、峠を上がり始めると、鞍にじっとまたがっていられなくなった。峠道の傾斜が急で、上体が後ろに倒れそうになるのである。郡守はどうにも我慢できず馬から降りた。

馬丁は馬の口を取って前に立ち、郡守は馬の後に従って歩いた。

あえぎあえぎ道を登っていた郡守の笠に、何かがポトリポトリと落ちた。郡守は雨ではないかといぶかったが、その雨なる物から変な臭いが漂ってくる。

「おい、この消日嶺の雨はなぜこうも臭いのじゃ」

「え、なんですって、お殿様。雨などどこにも降ってはおりませんが」

馬丁はこう言って振り返ってみた。ところがなんと、郡守の笠の上に馬糞が付いているのである。訳を知った馬丁は、「いやはや殿様、それは雨ではなくて、馬が垂れた糞でございます」と言った。

このように前に立った馬の糞が後に続く人間の頭に落ちるほど、消日嶺の峠道は傾斜が急なのである。

黄津温泉区域

黄津温泉区域は外七宝の北側に位置する名勝で、東は朝鮮東海、南は松湖峠、西は新道嶺、北は三角峰によって囲まれている。

この区域には文字通り温泉が多い。

７天女の伝説がこもる滝と淵があり、その一帯の至る所に温泉や薬用鉱泉が湧き、人々の人気を呼んでいる。

黄津温泉

黄津温泉の温度はセ氏51度、湧出量は１秒当たり６～８リットルである。泉には水素炭酸イオン、塩素イオン、ナトリウムイオン、硫黄成分が含まれていて、硫黄温泉と呼ぶにふさわしい。

硫黄温泉は皮膚病の治療に特効があり、神経痛や消化器系統の治療にも効果がある。

黄津温泉の一帯には、セ氏42度と32度の温泉、19度の微温泉（薬用鉱泉）など、温泉の湧出口が12カ所にある。

黄津温泉は1500年ほど前から世に知られており、朝鮮封建王朝末期、当地の住人鄭某が木製の浴槽を設けて利用し始めたという。

ところで、朝鮮を占領した日本帝国主義の一資本家が黄津温泉の強奪を謀り、不当な口実を設けて訴訟を起こした。裁判所の判決は、「鄭某は地上権のみを有し、地下権はない。よって、穴を掘って出てくる温水を利用すればよい」という不当なものだった。

こうして日本人資本家は、大勢の労働者を駆り出し、発破までかけて洞穴を掘ったが、一滴の温水も湧かなかった。

現在もその洞穴は未完成のまま残っている。

鶏卵薬水

鶏卵薬水は黄津温泉の基本湧出口からさして遠くない地点にあ

り、温度はセ氏19度、湧出量は１秒当たり50グラム程度であるが、雨期や長日照りの際もその量に変化はない。

水は清く澄み、ゆで卵の匂いがするこの鉱泉は胃腸病に特効がある。

ひさご潭

ひさご潭は、黄津温泉から温水坪渓谷に沿って１キロほど入った所にある淵である。

ひさご潭は探勝の途中一休みして遊ぶ場としてとても適している。

偏平な岩の上を水晶のように澄んだ水が伏せ滝となって流れ落ち、この滝壷にいったんたまった後、その下側の狭い出口から吐き出されていく。

滝壷の周りには幾つもの大きな岩石があり、それらの間に木々が茂って、周辺の景色に彩りを添えている。

松 原

黄津温泉の南方200メートルほど隔たった川のほとりに平坦な地帯が広がっているが、ここに30〜40年の樹齢を持つ松の大木が一面に生え、その周辺には白い石が敷きつめられている。岸に沿って流れる水は澄み切っており、この松原は憩いの場として実に優れている。

黄津温泉に漬かった後、ここへ出てひと時を楽しく憩うのもまた一興である。

七星谷

七星谷は黄津湾の西方に位置する谷で、渡し場に面しているとして渡し谷とも言われている。

七星谷という名は、昔この谷に七星堂があったことに由来している。

七星谷は基本の渓谷とそれから枝別れした幾つもの小さい谷からなり、それぞれ特異な滝と滝壷、淵、奇岩を持って渓谷の風致に一段と彩りを添えている。

七星谷には季節の滝、たらい淵、

桃潭、七星の滝など名所が多い。

七星谷の入り口から２キロほど入ると、その谷から別れて横に入る小さな谷があり、その枝別れした地点の西側に岩が一つそそり立っているが、それが舟のような形をしているとして輪船岩と呼ばれている。

輪船岩を見てから基本の渓谷をさかのぼっていくと、右側に高さ50メートルの傾斜した岩肌を銀の糸のような奇麗な水が流れ落ちる季節の滝に出会う。

乾期には滝とは言えないほどであるが、７、８月の雨期には、１本の太い水柱をなす壮観な滝が現出する。

季節の滝から50メートルほど谷を降りた所に胃潭という名の淵がある。人間の胃のような形だとしてこんな名が付いているのである。

人間の胃のように噴門、胃体、幽門が一続きに並んでいるが、胃腸の形をいかに精巧に画いたとしても、このように生き生きとは描出できないであろう。

七星谷の基本の渓谷を引き続きさかのぼると、その道筋に滝や滝壷が続き、景観そのものである。

まず見られる淵は、たらいのような形のたらい淵であり、さらにその先に花崗岩の岩肌を流れ落ちる長さ６メートルの伏せ滝があり、その下に桃のような形をした桃潭という名の滝壷がある。

桃潭の先には長さ３メートルの牛角潭があり、その上方に七星の滝と二仙潭がある。

七星の滝

七星の滝は垂直に落下する滝で、この渓谷第一の名所だと言える。高さ14メートルの崖の上から勢いよく落ちる滝は白い水しぶきを飛ばしながら、2.5メートルの深さの滝壷に注ぎ込む。

これが大昔、海七宝の見物に舞い降りた天女たちが七星谷の最奥までやって来て遊んだという七星の滝である。

滝の上には、長さ1.6メート

ル、幅0.6メートルの、人間一人が入って横たわれるほどの、形がそっくり同じ二つの淵がある。これが二仙潭である。

［伝 説］

二 仙 潭

昔、７人の天女が海七宝に舞い降りて松島に遊んだ後、さらにここ七星谷の見物をした。

見物を終えたが、あまりにも暑くて彼女たちは水遊びをしたいと思った。けれどもそこには淵が二つしかない。天上界の決まりでは水遊びをする時は一人一人別々に淵に入ることになっていた。

そこで相談した末、長女と次女がここ七星の滝の上の淵を使い、残り５人は上徳谷の淵へ行くことにした。

こうして七星の滝の上の二つの淵は二仙潭と呼ばれるようになったという。

＊　＊　＊

外七宝の広い地域には、以上七つの名勝区域以外にも、古くから景勝の地として広く知られている仙岩区域と竜淵区域がある。

仙岩区域は明川郡茶湖(タホ)里にある多谷洞と仙岩洞の名所を含む外七宝名勝の一つである。

この名勝には、朝鮮の高温温泉の一つである茶湖温泉、真夏の暑さの中でもツララが垂れ下がっている氷窟、伝説的な三兄弟の滝など特異な名所がある。

竜淵区域は明間郡の楊川(ヤンチョン)里と立(リプ)石(ソク)里一帯の名所を含む外七宝名勝の一つである。

ここには、古くから名の知られた洪家洞の谷の竜淵をはじめ奇岩怪石や立石洞の立石岩その他名勝が多い。

海七宝

海七宝は、北方の漁郎端から南方の舞水端に至る60キロの区間に広がる、海岸の風致が特に優れた七宝山の名勝地域である。

そのうち名所が集中している海岸は牛洞から舞水端までの35キロ区間と、天然湖の景勝によってとりわけその名が知られている牛洞北方の海辺地帯である。

海七宝は、長い海岸線の岸辺に切り立つ絶壁とさまざまの様態の奇岩怪石、海上にそそり立つ奇妙な島々、これらが波打つ青い海原と見事に溶け合って、特異な海岸風景を繰り広げている。

海七宝の諸名所は、麗しくも優しさの漂う景勝の美もあれば、たくましくも勇猛の気迫に満ちた景観も随所に見られ、女性的な美と男性的な美を兼ね備えた絶勝の地だと言える。

海七宝の沖には古来、スケトウダラをはじめ海魚の豊富な漁場があり、海岸で取れるワカメやコンブは美味なことでよく知られている。

海七宝の基本的な探勝コースは、漁大津港で遊覧船に乗り、海岸線伝いに南下しつつ諸々の名所を順に観覧するものと、内七宝と外七宝を見た後海七宝を観覧する場合の、宝村里の仲坪波止場で遊覧船に乗り、その北側と南側の海岸風景を楽しむ二通りがある。

海七宝名勝地域は、彩画峰区域、塔古津区域、月門区域、武渓湖区域など５区域からなっている。

松島区域

松島区域は、松島を中心にして南は宝村里の弦岩村、北は彩画峰区域の覆水端に至る浜辺と、海上に広がる名所を見て楽しむ海七宝名勝区域の一つである。

行列岩

行列岩は宝村里前の海中に長く連なっている岩の列である。

波打つ海水上に見え隠れする岩がずっと１列に並んでいるとして、行列岩と呼ばれている。長さ300メートルを超える行列岩は、またとない天然の防波堤である。

臥竜七峰

仲坪波止場から北方に向かっていくと、あたかも荒い波から宝村を守っているかのような臥竜七峰を仰ぎ見ることができる。

２キロほどの区間に、七つの峰が切れ切れに長い列を作ってそびえている。

その姿を眺めていると、波が押し寄せる時は峰々も共にうねっているように感じられ、それがあたかも巨大な竜が横たわって体をくねくね曲がりくねらせているようだとして、臥竜七峰と呼ばれている。

臥竜七峰には青竜と黄竜についての伝説がある。

臥 竜 七 峰

［伝 説］

山の神に罰せられた黄 竜

遠い昔、朝鮮東海の深くには非常に大きく華麗な竜宮があった。

竜宮の竜王には可愛い一人娘がいたが、ある日、原因不明の病気にかかり、危篤状態に陥った。

侍医たちは、王女の病に利く薬は海にはどこにもなく、ただ七宝山の野生人参だけが特効を有すると進言した。

竜王は、人間の住む世界で薬草を取るこの困難な役目を青竜と黄竜に与えた。

青竜と黄竜は共に竜王の近臣で年も若く、とりわけ剛直で誠実な青竜は竜王の眼鏡にかない、愛嬢の婿に内定されていた。

このことに気づいてひそやかにねたんでいた黄竜は、今度の機会を利用して青竜を謀殺し、自分一人で野生人参を持って帰り、竜王の寵愛を得ようと企んだ。

青竜と黄竜は七宝山に入り、苦心惨憺の末野生人参を手に入れた。帰途黄竜は青竜を高い崖の上から突き落として、一人で帰り、竜王に野生人参を差し出し、青竜は足を踏みはずして崖から墜落して死んだと報告した。

野生人参を服用して王女は全快したが、竜王は青竜のことが忘れられず、黄竜に今一度七宝山に行って青竜を探してみるようにと命じた。

一方、崖から落ちた青竜は、七宝山を守る山の神に助けられて、傷の回復に努めていた。

七宝山における出来事の一部始終をすっかり知り尽くしていた山の神は、黄竜が再び七宝山に現れたのを見て激怒し、天地が割れんばかりに怒号した。

「自分一個人の富貴栄華のみを考えて殺人をする不埒な野郎め！

七宝山の罰を受けろっ」

その怒声は全山を揺るがした。ついで何か大槌のような物が打ち下ろされ、その勢いに朝鮮東海の水が柱をなして空高く立ち上がり、黄竜の胴体は七つに千切れて海七宝の岸辺に長々と置かれてしまった。

こうして出現したのが臥竜七峰だという。

虹 岩

虹岩は宝村の海辺に虹のような形をして立つ岩で、その一端は山の中腹に懸かり、他の端は海中に降りている。半月形のトンネルには打ち寄せる大波が当たっては砕け、銀色のしぶきを散らしており、その様態は実に妙を極めている。

虹岩の高さはおよそ８メートル、トンネルの幅は10メートル、虹橋模様のトンネルの上部の幅はほぼ2.5メートルである。

虹岩の上には、岩の裂け目に根を下ろした２本の松が立っており、この一帯の風致にいっそうの彩りを添えている。

珊瑚岩

珊瑚岩は虹岩の前の海に立つ岩で、以前その下に珊瑚が多かったとしてこの名がある。

虹 岩

珊瑚岩に当たって水しぶきを上げる波の上空をカモメやヒメウなどの海鳥が飛び交い、この海特有の情景がそこにかもされている。

蜂巣津と柱岩

蜂巣津は、宝村川の河口から砂浜を伝って北へ300メートルほど行くと現れる磯である。

大小の岩が波打ち際に無数に重なって、寄せる波に絶え間なく洗われているが、妙なことにどの岩にも蜂の巣のような穴が一面に付いているのである。

蜂巣津という名は、このような蜂の巣のような岩の集まった広い岩場の前の津だという意味である。

蜂巣津の後方には、平徳（ピョンドク）山脈の切り立つ絶壁に沿った海辺に無数の石柱が列をなして立ち並んでいる柱岩がある。

石工が墨縄をもってまっすぐ線を引いて削って立て並べたかのような無数の石柱のうちに、根元が湾曲して他の石柱にもたれている岩が一つある。

ところで、この岩の上に今一つの石柱が立っているが、これまた奇妙である。

築造峰

築造峰は、宝村川の河口のやや北方に絶壁を持つ峰で、岩石の壁面がいろいろの形と大きさの煉瓦をもって築かれたようだとして、築造峰と言われている。

築造峰の先に谷があり、そこに以前麻を大々的に栽培した畑が広がり、それに湖があるとして、この谷間の村を麻湖里と呼んでいる。

ここからは七星谷の奇岩怪石からなる峰々がはっきり望見でき、海辺に立てば外七宝の景観をずっと見渡せる。

夢門岩

牡丹峰の岸壁の南側に立つ岩の門で、これが夢門岩と呼ばれているのは、次のような伝説に由来している。

［伝 説］

竜宮にない珊瑚

遠い昔、竜宮にはこの世のありとあらゆる宝物が蓄えられていた。

竜王はこの宝物の保管場を大きな自慢の種とし、海の動物やその子孫に見せびらかしていた。

ところが、ある時、朝鮮東海に面した七宝山の前の海には、この世界のどんな宝物よりもはるかに珍しい珊瑚があるが、この竜宮の宝物保管場にはそれがないという話が竜王の耳に入った。

竜王は一人の臣下を呼び、それは本当かと尋ねた。彼は、事実ですと答えた。竜王はそんなことがあってもよかろうかとして、信頼すべき近臣を海東聖国の海七宝につかわした。

彼は朝鮮東海岸を何日もかけて捜し歩いた末やっと海七宝にたどりついたが、旅の疲れが重なり、ある岩に腰を下ろすなり、たちまち深い眠りに落ちた。

ところが夢の中に白髪の老人が現れて、珊瑚の位置を教えてくれたのである。

眠りからさめた彼は、ただの夢にすぎない、まさかと思いながらも、物は試しとばかりに、告げられた場所へ行ってみた。あにはからんやこれまで見たことのない珍しい珊瑚が波浪の下でゆらめいているではないか。彼はそれらの中でも最も素晴らしい珊瑚を切り取り、大事に包んで持ち帰った。

このように夢を見て珊瑚を手に入れたとして、そこにある岩石の門をさして夢門岩と呼ぶようになった。

隠仙窟

隠仙窟は牡丹峰の東側の岸辺にある洞である。

松島の景勝を楽しむべく天女たちが舞い降りて、地上の人間が遠くに姿を現すと、この洞に隠れたとして隠仙窟と言われている。

松 島

松島は陸から80メートル離れた

松 島

海上にある島で、奇妙な形の島の上に丈の低い小松がまばらに立っており、そのことで松島と呼ばれている。

松島は昔は陸続きであったが、久しい歳月波に洗われて陸から切り離され、島になったという。

島に上がって見ると、島が中央辺りで真っ二つに断ち切られていて、実際にはそれが二つの島からなっていることが分かる。

島の中程には大きな穴が一つぽっかり開いており、これを竜窟と称している。この洞の中へ降りると、波が岸壁に打ちながら中へ流れ込み、澄んだ清い池を作っているが、そこには魚の泳いでいる姿が見られる。

島の下から上へ登るには、崖伝いに階段が設けられていて、容易に上がれる。

松島は島そのものの形が奇妙で見物する面白みがあるが、島の上から眺める海岸風景がまた素晴らしく、昔からその名が広く知られている。

風致に優れ、奇妙な造りの松島は天然記念物に指定されている。

松島には蔡(チェ)剛力という人物の伝説がある。

［伝 説］

海竜を退治した
蔡剛力

大昔、海七宝北方の海辺にある埠郷という小さな村に蔡某という若者が住んでいた。

彼は幼い頃父親に死なれて、母親に育てられて大きくなり、毎日のように小舟に乗って魚を捕り、それらを売ってどうにか暮らしを立てていた。

そうした生活の中で18の歳を迎えた彼は、埠郷の7、8里先を流れる明間川のほとりに住む娘を妻に迎えた。

結婚して５日目の夜、新妻は不思議な夢を見た。

若い夫が美しい若妻をまぶしそうに眺めながら懐から目にまばゆいほどに輝く紅玉を取り出して、こんなことを言った。

「この宝玉はわが家に先祖代々伝わってきた家宝なんだけど、今は君が家の人になったんだから、これを肌身離さず大事にしまってくれよ。

ぼくはいつも海で働いているんだから、ひょっとしたはずみに海に落とさないとも限らんのだ。それが気がかりで君に預けることにしたから、しっかり守ってくれよな」

新妻は、その目が覚めるような美しい宝石を両手で押し頂き、いろいろ回して見ながら注意深く眺めた。

ところで、玉の下部にちりのような物がついていることに気づいた。彼女は、その可愛いおちょぼ口をすぼめて息をふうっと吹いてちりを払い、口を大きく開けて息を深く吸ったが、そのとたん玉が吸う息に引かれて口に入り、のどの奥へ落ちて胸につかえてしまった。

彼女は夫の家の貴い宝物を軽率に手の平に載せていじくりまわした末に飲み込んでしまったと悔やみ、それが胸につかえさえして死ぬほかなくなったと、おぞけをふるった。

苦しげに身もだえした末、ようやく目をさました彼女は、なんという不思議な夢だったろうかと考

えて胸をなでおろしたが、全身が冷や汗に濡れていた。

そんなあと身ごもった新妻は、次第に体が重くなっていった。近所の老婆たちは、身重な彼女の太い腰の様子を見て、虎のようなたくましい子を生みそうだと言って喜んでくれた。

そうこうするうちに出産の日は迫ったが、夫はイカの漁期で休むわけにいかなかった。それで彼女は一人で実家へ帰り、母親の手助けでお産をしようと思った。

家を出た彼女は息をはずませながら峠道を登ったが、尾根の上に立ってからはお腹がひどく痛み出し、どうにも歩けなくなった。

それで、人の目を避けようとして少しばかり先の岩の陰にチマをほどいて、その上に座った。

しばらくして岩の上に白い霧が漂い、その上空に７色の美しい虹が懸かった。

新しい生命の誕生を告げる産声が山間のしじまをやぶって「オギャー、オギャー」と鳴り響いた。

若い母親が産児を抱き上げると、赤子は早くも産後１年の子のように、瞳を輝かせ、母親の愛に答えるかのように、にこにこ笑っていた。

そんなわが子を眺めているうちに、産後に似ず体が軽くなり、空に舞い上がれそうな気分になった母親は、わが子を抱き上げて家へ帰ろうとした。

その時不意に１匹の虎が現れて立ちはだかり、同時に山鳴りがして、こんな声が聞こえた。

「嫁御や、心配せずその可愛い坊やは大きくなるまでこちらに預けておくのだよ。日に２度ほどここへやって来て乳を飲ませさえすればいいからね。

赤ちゃんの髪の毛一本も傷を付けないよう、この虎が守ってくれるから、ちっとも心配することはないよ」

若い母親は、これは間違いなく山の神のお告げだと固く信じ、わが子をその場に残して、一人で家へ帰った。

それ以来若い母親は山の神にいい告げられた通り、朝夕日に２回峠に登ってわが子に乳を飲ませた。

このようにして歳月が流れ、生後16年が経った年の春、すっかり

成長したわが子は大力の持ち主となって両親の下へ帰った。

彼は、天変地異を数日前から時には遅くとも１日前に予知する能力を身に付けていた。

明日は嵐で海が荒れると知ると、日暮れ時に誰にも告げず海岸に出かけて漁船を陸に引き上げたりしたが、その力がいかに大きいかというと、とも綱を足の指に掛けて船を砂浜に引き揚げるほどの強さであった。

このように彼は風水害などを予知しては、海七宝の漁師たちの危難を人知れず救った。

彼が大力の持ち主だということが人々に広く知られるようになったのは、わが家に帰った年の秋のある日の出来事によってであった。

海辺に出た若者は、今しがた帰った船から生きのいい魚が水揚げされているのを見て、熱あつの魚スープを食べたいなと思った。

「魚を捕るのは大変だったでしょうね。実は魚スープを作って食べたいんですけど、マスを１匹分けて頂けませんでしょうか」

若者は船頭に丁寧に言葉をかけた。

「なんだと？　これらを捕るのにどんなに難儀したかも考えず、只でくれとはなんたるこっちゃ。若い坊主がずうずうしいにもほどがある」

意地の悪そうな船頭は目をむいてしかりつけた。若者の顔はみるみる真っ赤になり、漁師たちが乗っている船をぐいと持ち上げて一言も言わず、遠く陽化（ヤンファ）へ越えていく長承岩の上に下ろした。

船頭は平謝りに謝り、今後はいつなんどきでも鮮魚は只であげるから、どうか船を岩から降ろしてくれと懇願した。

こんな出来事があってから若者は人々から蔡剛力と呼ばれるようになった。

蔡剛力の噂がさらに咸鏡道一帯に広がり蔡将軍とまで言われるようになったのは、その数年後のある夏のことである。

ある日の日暮れ時、数十名の海賊が七宝山の海辺の村に押し寄せ、家々に火を付け、家財を略奪し、人々を拉致しようとして騒ぎまわった。

このことを知らされた蔡剛力は大きな金棒をつかんで立ち上が

り、海賊の暴れている村へ一息に馳せつけた。

彼は真っ先に海賊船を手当たり次第に金棒でぶち壊し、海の方へ引き揚げてくる海賊を一人残らず叩きのめした。

この出来事はたちまち咸鏡道一帯に広く伝わり、海七宝に大力無双の将軍が現れたと騒がれた。

蔡剛力の父親は、息子が20歳になった年の初め、仲坪の漁師のういういしい娘を嫁に迎えた。

ある日、蔡剛力は新妻と連れ立って松島へ遊びに行った。

秀麗な海景色に見ほれた若い夫婦は、両手を額にかざしてさざ波が寄せては返る海を眺めていた。

そんな時、不意に醜い、山のように巨大な竜が１匹海中から姿を現し、赤い口を大きく開けて松島の頂に這い上がってきた。

異様な物音に我に返った蔡剛力は、腰の大剣をさっと引き抜き、松島の岩山へ這い上がる竜の首をめがけて力一杯切りつけた。

竜の頭はその一打ちで空高く舞い上がり、遠く南方へ飛んで海中へ落ちた。竜の首から吹き出たどす黒い血は海岸の崖の上へ飛び散り、岸壁を黒紅色に染めた。

蔡剛力は続けざまに竜の胴体を次々に切り離して南側の対岸に投げ付けた。このように蔡剛力は松島で、人間に危害を加える恐ろしい海竜を一刀の下に切り殺してしまったのである。

現在松島が二つの岩石島に切り離されているのは、蔡剛力が大剣を振るって竜を切り付けた際、その勢いで両断されたのであり、二つの崖の間に出来ている竜窟という名の大穴は、竜が蔡剛力に追われながら海の中へ逃げ込もうとしてあがいた際に出来たものだと言われている。

それに、筆峰の裾を分割したかのような、T字形の頁岩筋がある竜血岩は、大剣に切られた竜の血が飛び散り付着した名残りであり、宝村と仲坪の間の海辺に横たわる臥竜七峰は、ずたずたに切られて投げられた竜の胴体が岩に固まって出来たものだと言い伝えられている。

遠く舞水端の海岸にある竜頭泉は、首をはねられた竜の頭が落ちて生じたものだとか。

彩画峰区域

彩画峰区域は、松島区域の覆水端からその北方明川郡の楸津浦に至るまでの浜辺と海上に広がる諸名所を包括する海七宝の名勝区域である。

彩画峰区域は、白色珪長岩、玄武岩、砒石岩など多様な岩質をもって峰が形成されているので、岩の色が赤、青、黄と入り混じり、まるで岩々に彩色を施したかのような華やかな風景を呈しているのが特徴である。

黒竜窟

海中深く潜水している絶壁に半月形の洞が出来ているが、この中に昔黒竜が棲んでいたとして黒竜窟と呼ばれている。

小船に乗って洞へ入ると、光の射さない洞の半ばの高さまでが海水に満たされて黒々としており、それこそ恐ろしい怪物がとぐろを巻いていそうな洞窟だという印象を免れなくする。

崔錫今岩

崔錫今岩（チェソックム）は、黒竜窟のある崖の上に立つ三つの岩の名である。

これらの岩を注意して見ると、一番前に法衣を着た長身の僧が崖の上の道を歩いて山に登っており、その後ろを幼児を負ぶった女と子犬が続いているかのような様子をしている。

これらの岩には、性悪な地主崔錫今を仏陀が罰した際、そのあおりで、僧と女それに子犬まで石に固まってしまったという伝説があり、崔錫今岩の名もこの伝説によって付けられたものである。

［伝　説］

石に変じた僧と女

ある年の初夏、石林寺の僧が布施を乞うて、地主崔錫今の家の門の前で木鐸を叩きながら念仏を唱えた。

縁先に座って涼んでいた地主は、念仏を耳にすると顔をしかめた。

「ちえっ、あの坊主め、今どんな時だと心得て托鉢巡りなんかをしてやがるんだ。村民は食べ物に事欠いて野良仕事もままにできず苦しんでいるのに、只で米を手に入れようとしてやがる。

おい誰かいないか。馬小屋で馬の糞を一すくい取ってきてあれにくれてやれ。そしてこの家にはこれしかないと言うのだ」

年少の下男は主の言い付けを違えるわけにはいかず、縁の欠けた器に馬糞を盛って門の外へ出て行った。

石林寺の僧は、この家の主がけちな人間だと聞いてはいたが、托鉢僧をこんなにも馬鹿にするとはと憤慨した。

「うーむ、あの男は畜生にも劣る根性の曲がったけしからん奴だ。神聖な仏様をこれほどまで冒涜するとはなんたることだ」

僧はこう独りごちて、憤りながら横丁の小道を歩いて引き返していた。

この時、地主の嫁が壷を小脇にかかえて走ってきて僧を呼び止めた。

「お坊主様、ちょっとお待ちになって下さい。

うちのしゅうとはちょっと偏屈でこんなことになってしまったのですけど、お釈迦様の大海のような恩徳をもってご勘弁して頂けないでしょうか」

彼女はこう言って、壷に隠してきた２升ばかりの粟を僧の頭陀袋に入れた。

彼女は、勝手口でドアの取っ手をつかみ、しゅうとが下男に大声で命じている声を残らず聞き、殊に布施ならぬ馬の糞をくれてやれと言い付けたのはあんまりだと思って、かめの中の粟を壷に移してそっと家を抜け出し、僧を追ってきたのであった。

「奥さんはヨモギの原に咲いた野菊のような美しい心根の持ち主ですな。奇特な奥さんとお子さんの身を思って話すことですから、拙僧の言葉を注意して聞いてくだされ。

明日の朝早く縁の下でカエルの鳴き声がしたら、すぐさま赤ちゃんを負ぶって裏山に上がってきなさい。

拙僧があの尾根の上でお待ちするから、きっとそうするんですぞ。もし拙僧の言葉に従わず、ま

たはそのことを他人に漏らしたりしたら命を落とすことになりかねません。お分かりでしょうな」

僧はこう厳しく言い残して山へ上がった。

女はぞっとした。彼女はわが家に天罰が下るだろうという恐れよりも、それ以上に村人たちの憎悪の的となっている地主の家でその一味とみなされながら生きる自分がおぞましくて、僧の言葉に従おうと決心した。

一晩中悶々としていた彼女は、明け方緑の下でカエルが鳴く声を聞くと、あわててわが子を背負い、ひそかに家を抜け出した。

外では乳色の薄い朝もやが家の周りに漂い流れていたが、東の空に朝焼けが映えてあたりは明るくなった。

女は山を登りながら振り返ってみると、自分が朝夕食べ物を与え可愛がっている灰色の子犬が後を追ってきていた。子犬は、誰よりも自分を愛してくれる女主人の側を離れたくないとしてついてきたのであろう。

尾根に登ると、早くも石林寺の僧が来て待っていた。

「あんたが家を捨ててやって来て本当に良かった。では拙僧の後についてきなされ。すぐにもあんたの家のあたりから何か大きな音が鳴り響くだろうが、絶対に後ろを振り向いてはなりませんぞ」

女は僧の言葉に注意しながら、その後に従って山頂に向かった。

前に立っていた僧はつとはっと立ち止まり、何か経文のようなものを唱えた。

と、一天にわかにかきくもり、青い稲妻が走り、村家の辺りで雷の落ちる轟音が響いた。

女は驚き、僧の言葉を忘れて後ろを振り向いた。稲妻にあかあかと照らされた地帯には、わが家は跡形もなく、そこに大きな沼が一つ出来ていた。

地主崔錫今を懲罰する落雷が轟いた時、僧の注意を忘れて後ろを振り返ったことが災いして、その場で僧も子を負ぶった女も、また子犬までもがみな石に変じてしまった。

彩画峰

彩画峰は、黄津湾の北方１キロほど先に岸壁を持つ雄壮な岩石の峰である。

岩肌の色は総体的に白っぽく見えるので白岩と称されてもいるが、近くで見ると、ところどころ青色や黄色を呈し、さらに赤色や黒色、灰色を持つ岩肌もある。このように峰がいろいろの色彩で画かれた風景画のようだとして彩画峰と言われているのである。

象 岩

象岩は彩画峰の北、海岸伝いに500メートルほど離れた海辺に立つ岩で、象が長い鼻を垂らして水を吸っているようだとしてこの名がある。

ところで、この岩は北側から見る場合と南側から眺める場合とでは違った形をしている。

北側から見ると確かに象であるが、南側から眺めると猛犬が口を開いて何かに襲いかかろうとしているように思える。

直東の滝

直東の滝は、彩画峰区域の北端、明川郡と明間郡の境界にある埠郷村の西方２キロほど先の渓谷にあり、55メートルの高さから落

象 岩

下する滝は、下から見上げると、頂上は天に届いているかのような景観である。

滝壺の際には空に舞い上がらんとしているかのような趣の亭が建っており、ここからは滝の全景がひと目で眺められる。

この滝は、それが真っ直ぐ東側に向いているとして直東の滝と称されている。

イブキジャコウソウの群落

イブキジャコウソウの群落は、彩画峰区域の北方、牛洞村の前の山に広がっている。

貴重な香料植物であるイブキジャコウソウは、その香りが100里（日本の10里）先まで漂うとして、朝鮮語で百里香（ペンリヒャン）と名づけられている。

塔古津区域

塔古津区域は、北方は陣雀峰（チンジャク）、南方は雲満台浦にまたがって海岸に点在する名所を包括する海七宝の名勝区域である。

塔古津区域は海岸沿いに絶壁がそそり立ち、その上に塔さながらの奇岩が連なって、勇壮な気概を誇示している。

とりわけ浦下里の浜辺の景色は抜群で、古くから財産家や権勢層の遊興の地として有名であったが、今では広く人民の楽しいリゾートになっている。

陣雀峰

陣雀峰は松島区域の行列岩の南側に高くそびえる峰である。

絶壁の面は赤みがかり、網の目のような細かい亀裂が一面に入っている。

昔の人たちは、その有様が数千羽の鳥が壁面に群がり陣を張っているようだとして、陣雀峰と呼んだ。

蓮台峰

蓮台峰は浦下里の東側の海岸にそそり立つ峰である。

以前、この峰の西側に池が一つあったが、夏には蓮の花で覆われていたという。

このように蓮の花の満開している池の際に立つ峰だとして、その名も蓮台峰と呼ばれるようになった。

文筆岩（燭台岩）

文筆岩は、浦下川の河口南側にある岩石の小島である。

島の模様が筆のようだとして文筆岩と言われているが、ろうそくの炎のように見えるとして燭台岩とも呼ばれている。

文筆岩の側近くには、硯や硯滴の模様をした岩があり、まるで筆、硯、硯滴など一揃いの書画用

文 筆 岩

具が置かれているようである。

そこで、これは天界に住む画家が降りてきて、海七宝の風景を画こうとしたがうまくいかず、絵画の腕をもっと磨いて出直してこようとして置き去りにした物が岩になってしまったとされている。

仏像峰

仏像そっくりの岩があるとして仏像峰と呼ばれているこの峰の北側の尾根には、実際、悠然と端座している模様の仏像岩がある。

古 津

蓮台峰の突出部を回って海岸沿いに進んでいくと、古くから漁村としてよく知られている古津に至る。

明川郡古津には、その昔太という姓の漁師が初めてスケトウダラを捕ったとして、その魚の朝鮮語名を明川郡と太漁師の明と太を合わせて明太（メンタイ）と呼ぶようになったという言い伝えがある。

塔古津

塔古津は、古津の渡し場の南側突出部の向こう側に小さい半月形の湾をなしている浦である。

塔古津という名は、そこに塔の

玉 花 門

ような模様の岩石の峰があるとして付けられたものである。

塔古津の岸辺には、海七宝の他の海岸には見られない大小さまざまの模様の石ころや砂の原が続いており、海七宝の遊覧に際して憩いのひとときを楽しむに足る格好の場所である。

玉花門

玉花門は雲満台埠頭の東側入り口にある岩で、その一端は山の崖に付き、他端は海に根を下ろした妙な格好の岩石門である。

この岩石門は、長い歳月海蝕作用できれいに磨かれて、有能な石工の手で精巧に造り上げられたのかと思えるような美しさである。

月門区域

月門区域は、雲満台から木津里を経て舞水端に至るまでの海岸に広がる海七宝の名勝区域の一つである。

この区域には妙な形をした絶壁が峨々とそびえ、また興味津々たる様相を繰り広げている名所がそれぞれ独特の風致を誇り合っている。

城壁岩

城壁岩は鸕佳端の南側の海岸にそそり立つ城壁のような岩である。

水平に並ぶ無数の亀裂で覆われた玄武岩からなるこの城壁岩の高さはおよそ70メートル、長さは300メートルほどで、まるで石築の城壁のようである。

この城壁岩はいかに獰猛な海賊も寄せ付けない天然の要塞を彷彿させている。

三猫岩

三猫岩は木津波止場の前の岩石島である。

岩石の高さは7メートルで、中

央に親猫のような形の岩が座り、その左右で２匹の可愛い子猫がじゃれているような風景である。

叢石峰

叢石峰は木津波止場の南側の岬に立つ岩石の峰である。

叢石峰を形づくっている岩は幾つもの石柱がくっつき合っているように見え、上に行くほど狭まって先が尖り、下に向かっては扇のように広がっている。

叢石峰の前の岸辺には犬岩がある。真っ直ぐに立てた耳、深くくぼんだ目、前に突き出た口など、どう見ても犬そのものである。これらを見物して弓なりに湾曲した海岸に沿って南の方へ少し行くと、神仙岩と両主（夫婦）岩という名の岩に出会う。

両主岩

両主岩は神仙岩の少し先の岸近くに立つ二つの岩で、夫婦と言えそうな趣であるが、どう見ても二人の仲はぎくしゃくしているように見える。

この両主岩には昔、七宝山の見物にやって来た夫婦が、何か腹立たしげに口争いしているうちに岩に固まってしまったという伝説がある。

［伝 説］

果てのないいさかい

昔、物見遊山を好む男が妻を伴って七宝山を見て歩き、海七宝まで来たが、妻は疲れ果てて、もうこれ以上歩けないとして動こうとしなかった。

後は仙女岩と月門さえ見たらおしまいだと励ましたが、妻はてこでも動こうとしない。では俺一人で最後まで見てくるから、ここへ座って休んでおれと言うと、いやよ、怖くてあたし一人ここにいるのはまっぴらごめんよと言い張って、夫を困らせた。

あれも嫌、これも嫌だと言う妻の身勝手なわがままに業を煮やし、とうとう頭に来た夫は、かっとなって叫んだ。

「ふん、そんなら俺の前からとっとと消えてなくなれっ」

こう怒鳴りつけはしたものの、さてとなると妻を捨て置いて一人で行くのもはばかれた。それでまた妻をなだめにかかったが、相手

は頑として受け付けない。

行こう、嫌よと言い合っているうちに二人は岩に変じてしまった。

絶勝峰

絶勝峰は両主岩の少し先に現れる岩石の峰で、その名に恥じず、峰にはありとあらゆる造化の妙が集中している。

峰の上にまた峰がそびえ、岩の上にもまた岩があり、男性的なたくましさに満ちているかと思うと、その岩の山に松、クヌギ、カエデなどが茂り、色とりどりの花が季節を違えず咲き乱れて絶勝峰を彩っている。

朝日が昇ると、絶勝峰は神秘なほどに美しく輝き、その景観は、海七宝に今一つの万物相が存在していることを実感させる。

仙男岩、仙女岩

絶勝峰の先には仙男岩、仙女岩と呼ばれている二つの岩がある。やや離れて立つ岩のうち北側にあるのが仙男岩、波打ち際にあるのが仙女岩である。

天界に住む天男天女がここ絶勝峰の景観に見とれているうちに石に固まり、この地に永遠にとどまっていようとしているのだろうか。

［伝 説］

七宝山に居残った天男天女

昔、七宝山の見物にやって来た天女たちが、天に帰る時間になり、羽衣をなびかせて空へ舞い上がったが、銀河（ウンハ）という名の天女は、絶勝峰の景観に我を忘れて時間の経つのにも気づかず、一行から取り残されてしまった。

天帝は、雲霧（ウンム）という天男を迎えに寄こした。

海七宝の絶景を天上から見下ろした雲霧は、驚嘆した。

（いやあ、あんなに素晴らしい所もあったのか。だからあそこへ降りた天女たちが簡単に帰ろうと

しないのも無理はない）

こう考えて銀河のいる海辺に降り、絶景に見とれている彼女の容姿をほれぼれと見つめ、胸をときめかせた。

彼女を伴って天上の世界に帰ったところで、雲だけが漂う単調な景色、それに天界のきまりに縛られて結婚しても味気なく暮らすほかないと考えた彼は、この麗しい土地で彼女と一緒に過ごしたいと考えた。

「銀河さん、ぼくたち二人、ここに残って一緒に暮らそうよ」

熱っぽく愛を告白する雲霧の言葉にはっとしながらも、日頃秘かに思いを寄せていた若者からこう持ちかけられてみるともじもじした。なんと答えてよいものかと。

「なぜ黙っているんだ。ぼくが嫌なのか」

（いや、そうじゃありませんわ）

心の中でこう呟くだけで、彼女はいつまでも押し黙っていた。

返答を待つ若者、恥じらいうつむいているうぶな娘。こうして立ち続ける天男天女はそのまま石に固まってしまった。

月 門

片方は海に足を下ろし他方は崖にくっついている月門の高さは19メートル、長さは12メートル、幅は3.5～5メートルで、その岩の模様が月のようだとして、この名がある。

伝説によると、朝鮮東海に昇った月が、海七宝の景観に我を忘れて一晩中動きもせず見下ろし、夜が明けかかるとここに降りて休みながら海辺の景色を眺めたという。

寄せては返る波に洗われている月門の眺めは、人々を神秘の境地へ自ずといざなっていく。

舞水端

舞水端は海七宝の南端に立つ巨大な絶壁で、暗紅色の玄武岩層が78メートルもの高さをなして海側に突き出ている。

月 門

前方の海は烈風に吹かれて休みなく荒れ、その東側の岸は北方から流れ込む荒波に壁面を叩かれ、白い水しぶきを飛ばしている。その有様が踊りを踊っているようだとして、この絶壁は舞水端と呼ばれているのである。

舞水端の上に立って眺めると、前方に東海の青い海原が広がり、下の岸壁には怒涛が荒々しくぶつかり、怒れる獅子の咆哮さながらに轟音を上げて勢いよくしぶきを飛ばす光景が展開されている。

武渓湖区域

武渓湖区域は、七宝山地域の最北端にある武渓湖とその周辺の名所からなる海七宝の名勝区域の一つである。

芝坊里山城

漁大津から芝坊里に向かってしばらく行くと、昔、兄と妹の二人の剛健の士が木製の鋤で掘った土で築いたとされる芝坊里山城がある。

この山城は芝坊里中心部から東方２キロにある成徳という谷間に建つ土城である。この城の東と

西、北側は高さ50メートル内外の絶壁がそびえ、南側は武渓湖と漁郎川に流れ込む渓流があって、天然の要塞が形成されている。

武渓湖

武渓湖は、芝坊里山城南方の景勝の地に東北——西南の方向に長く伸びている天然湖である。

この湖は緑の濃い森林の中の深い深閑とした地帯にあり、風致抜群として、古くから関北第一の景勝と賞揚されている。

湖水は清く澄み切り、ハクレン、ソウギョ、フナ、コイ、ナマズ、貝などが生息している。

ここで遊覧船やボートに乗るのも愉快だが、釣りに興ずるのもまた楽しい。

槍烈士碑閣

槍烈士碑閣は、武渓湖南側の石垣の内側にある。

前面3.3メートル、側面2.7メートルの碑閣には２基の碑がある。

この碑閣の近くに今一つの碑が立っているが、碑閣はなく、石垣に囲まれているだけである。

これらはいずれも19世紀末に建てられた碑石である。

仏像岩と卒塔婆岩

槍烈士碑の南方に位置する武渓里西側の峰に仏像と卒塔婆そっくりの、仏像岩、卒塔婆岩と呼ばれている奇妙な形の岩が立っている。

ここからは近くの漁大津港に行き、遊覧船に乗って海七宝の海岸景勝を巡ることになる。

サービス施設

外七宝旅館

外七宝旅館は外七宝の中心部にある。

五つの閣からなり、室数は25、収容能力は57人である。食堂にはマツタケ料理をはじめ、天然健康食品として広く知られている山菜の料理が特に用意されている。

民 宿

海七宝の海辺に20戸の民宿がある。そのうち６戸は欧米風、14戸は朝鮮風である。

これらの民宿では、ナマコ、イガイ、ハマグリ、ワカメ、イカその他特色ある海産物料理が提供されている。

民 宿

七宝山の探勝

編　　集:　張香玉

翻　　訳:　金時習

レイアウト:　金正蓮

発 行 所:　朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発　　行:　チュチェ109(2020)年11月

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ109(2020)

ISBN 978-9946-0-1969-7